

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	平成24年6月29日
【事業年度】	第90期(自平成23年4月1日至平成24年3月31日)
【会社名】	株式会社池田泉州銀行
【英訳名】	The Senshu Ikeda Bank, Ltd.
【代表者の役職氏名】	取締役頭取 藤田 博久
【本店の所在の場所】	大阪府大阪市北区茶屋町18番14号
【電話番号】	大阪(06)6375局1005番
【事務連絡者氏名】	取締役 企画部長 鶴川 淳
【最寄りの連絡場所】	大阪府大阪市北区茶屋町18番14号 株式会社池田泉州銀行 企画部
【電話番号】	大阪(06)6375局3595番
【事務連絡者氏名】	取締役 企画部長 鶴川 淳
【縦覧に供する場所】	該当事項ありません。

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
		(自 平成19年 4月1日 至 平成20年 3月31日)	(自 平成20年 4月1日 至 平成21年 3月31日)	(自 平成21年 4月1日 至 平成22年 3月31日)	(自 平成22年 4月1日 至 平成23年 3月31日)	(自 平成23年 4月1日 至 平成24年 3月31日)
連結経常収益	百万円	88,452	83,201	66,151	117,308	116,007
連結経常利益 (は連結経常損失)	百万円	64,118	34,736	6,413	7,481	10,792
連結当期純利益 (は連結当期純損失)	百万円	54,968	37,453	7,373	7,652	3,770
連結包括利益	百万円				7,938	4,956
連結純資産額	百万円	68,272	57,589	85,149	170,415	158,466
連結総資産額	百万円	2,727,805	2,550,017	2,689,604	4,879,786	4,991,035
1株当たり純資産額	円	1,437.84	65.99	755.66	3,140.45	3,287.86
1株当たり当期純利益 金額 (は1株当たり当期 純損失金額)	円	2,122.77	1,446.51	188.46	146.15	84.12
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額	円			186.89		
自己資本比率	%	2.46	2.22	3.13	3.46	3.15
連結自己資本比率 (国内基準)	%	10.62	9.39	10.42	10.53	10.72
連結自己資本利益率	%	62.16	60.43	10.45	6.03	2.30
連結株価収益率	倍					
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	150,311	64,195	186,798	114,105	115,474
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	101,460	72,671	184,748	140,169	124,259
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	41,414	17,987	185	9,236	1,722
現金及び現金同等物の 期末残高	百万円	43,808	70,269	72,139	141,335	130,996
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,192 [544]	1,294 [531]	1,581 [781]	3,125 [1,400]	3,069 [1,279]

- (注) 1 平成21年度以前の計数については、合併前の当行の計数を記載しており、合併前の株式会社泉州銀行の計数を合算しておりません。なお、平成22年度の計数については、平成22年4月1日より企業結合したものとみなして作成しております。(以下、当有価証券報告書において同様であります。)
- 2 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、主として税抜方式によっております。
- 3 平成19年度及び平成20年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在しますが、1株当たり当期純損失であるため、記載しておりません。また、平成22年度及び平成23年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないので記載しておりません。
- 4 「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益金額(又は当期純損失金額)」及び「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」(以下、「1株当たり情報」という。)の算定に当たっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。
また、これら1株当たり情報の算定上の基礎は、「第5 経理の状況」中、1「(1) 連結財務諸表」の「1株当たり情報」に記載しております。
- 5 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末少数株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
- 6 連結自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。
- 7 平成19年度及び平成20年度の連結株価収益率については、連結当期純損失が計上されているので記載しておりません。また、平成21年度以降の連結株価収益率については、当行の普通株式が平成21年9月25日に上場廃止となっているため記載しておりません。
- 8 従業員数には嘱託及び臨時従業員の平均人員数を[]内に外数で記載しております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第86期	第87期	第88期	第89期	第90期
決算年月		平成20年3月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月	平成24年3月
経常収益	百万円	81,966	76,682	58,722	100,984	104,074
経常利益 (は経常損失)	百万円	64,319	34,150	5,935	5,786	7,716
当期純利益 (は当期純損失)	百万円	55,015	37,234	7,104	6,343	2,050
資本金	百万円	64,365	76,865	50,710	50,710	50,710
発行済株式総数	千株	普通 株式 25,927 第一種 優先株式 6,000	普通 株式 25,927 第一種 優先株式 6,000 第二種 優先株式 6,250	普通 株式 35,587 第一種 優先株式 6,000 第二種 優先株式 6,250	普通 株式 35,587 第一種 優先株式 6,000 第二種 優先株式 6,250	普通 株式 47,837
純資産額	百万円	66,882	56,567	84,045	167,782	154,130
総資産額	百万円	2,704,912	2,529,655	2,674,747	4,869,023	4,982,234
預金残高	百万円	2,191,128	2,253,735	2,314,245	4,357,005	4,407,710
貸出金残高	百万円	1,599,491	1,665,625	1,670,505	3,512,391	3,527,485
有価証券残高	百万円	357,664	646,566	830,784	1,081,565	1,203,706
1株当たり純資産額	円	1,423.87	60.54	747.21	3,100.33	3,221.99
1株当たり配当額 (内1株当たり 中間配当額)	円 (円)	普通 株式 2.14 第一種 優先株式 (普通 株式) (第一種 優先株式)	普通 株式 第一種 優先株式 第二種 優先株式 (普通 株式) (第一種 優先株式) (第二種 優先株式)	普通 株式 93 第一種 優先株式 196 第二種 優先株式 204.5 (普通 株式) (第一種 優先株式) (第二種 優先株式)	普通 株式 108 第一種 優先株式 196 第二種 優先株式 204 (普通 株式) (第一種 優先株式) (第二種 優先株式)	普通 株式 118
1株当たり当期純利益金額 (は1株当たり当 期純損失金額)	円	2,124.56	1,438.05	178.16	109.38	45.74
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金 額	円			176.77		
自己資本比率	%	2.47	2.23	3.14	3.44	3.09
単体自己資本比率 (国内基準)	%	10.75	9.55	10.42	10.54	10.66
自己資本利益率	%	62.45	60.32	10.10	5.03	1.27
株価収益率	倍					
配当性向	%			52.20	98.73	257.97
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,137 [532]	1,240 [519]	1,378 [486]	2,839 [928]	2,781 [874]

- (注) 1 第88期(平成22年3月)以前の計数については、合併前の当行の計数を記載しており、合併前の株式会社泉州銀行の計数を合算していません。なお、第89期(平成23年3月)の計数については、合併までの株式会社泉州銀行の計数を合算していません。(以下、当有価証券報告書において同様であります。)
- 2 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
- 3 第90期(平成24年3月)の1株当たり配当額には、その他資本剰余金からの配当218円を含めておりません。
- 4 第86期(平成20年3月)及び第87期(平成21年3月)の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在しますが、1株当たり当期純損失であるため、記載していません。また、第89期(平成23年3月)及び第90期(平成24年3月)の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないので記載していません。
- 5 「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益金額(又は当期純損失金額)」及び「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」(以下、「1株当たり情報」という。)の算定に当たっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。
また、これら1株当たり情報の算定上の基礎は、「第5 経理の状況」中、2「(1)財務諸表」の「1株当たり情報」に記載してあります。
- 6 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出してあります。
- 7 単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出してあります。当行は、国内基準を採用しております。
- 8 第86期(平成20年3月)及び第87期(平成21年3月)の株価収益率については、当期純損失が計上されているので記載していません。また、第88期(平成22年3月期)以降の株価収益率については、当行の普通株式が平成21年9月25日に上場廃止となっているため記載していません。
- 9 従業員数には嘱託及び臨時従業員の平均人員数を[]内に外数で記載してあります。

2 【沿革】

昭和26年 1月25日	株式会社泉州銀行、設立
昭和26年 2月 5日	株式会社泉州銀行、営業開始
昭和26年 9月 1日	株式会社池田銀行、設立
昭和26年10月 1日	株式会社池田銀行、営業開始
昭和27年11月 1日	株式会社池田銀行、池田市城南に本店移転
昭和34年 6月29日	株式会社泉州銀行、岸和田市宮本町に本店移転
昭和38年 8月22日	株式会社池田銀行、大阪証券取引所市場第二部に株式上場
昭和46年10月 8日	株式会社池田銀行、東京証券取引所市場第二部に株式上場
昭和47年 2月 1日	株式会社池田銀行、大阪証券取引所及び東京証券取引所両市場において市場第一部に指定替え
昭和47年 4月 1日	株式会社泉州銀行、大阪証券取引所市場第二部に株式上場
昭和48年 2月 1日	株式会社泉州銀行、大阪証券取引所市場第一部に指定替え
昭和48年 7月20日	京阪神総合保証株式会社(現池田泉州信用保証株式会社、連結子会社)設立
昭和50年 4月 1日	近畿信用保証株式会社(連結子会社)設立
昭和58年 2月 1日	株式会社ジェーアイ(連結子会社)設立
昭和58年 4月 1日	泉銀ビジネスサービス株式会社(現池田泉州ビジネスサービス株式会社、連結子会社)設立
昭和60年 6月10日	池田ソフト株式会社(現ハイ・ブレーション株式会社、連結子会社)設立
昭和60年10月23日	泉銀総合リース株式会社(連結子会社)設立
昭和61年 4月 1日	池銀リース株式会社(現池田泉州リース株式会社、連結子会社)設立
昭和61年10月 6日	泉州ソフトウェアサービス株式会社(現エス・アイ・ソフト株式会社、連結子会社)設立
昭和62年 4月 1日	池銀投資顧問株式会社(現池田泉州投資顧問株式会社、連結子会社)設立
昭和62年 8月28日	株式会社泉州カード(連結子会社)設立
昭和63年 7月11日	池銀オフィスサービス株式会社(現池田泉州オフィスサービス株式会社、連結子会社)設立
平成元年 3月 6日	池銀抵当証券株式会社(現池田泉州キャピタル株式会社、連結子会社)設立
平成 2年 9月 5日	株式会社ディーアイ(連結子会社)設立
平成 2年11月 2日	株式会社ブイアイ(連結子会社)設立
平成 3年10月28日	池田モーゲージサービス株式会社(現池田泉州モーゲージサービス株式会社、連結子会社)設立
平成17年 1月 4日	株式会社池田銀行、コンピュータの基幹システムをNTTデータ地銀共同センターへ移行
平成19年 2月22日	株式会社池田銀行、大阪梅田池銀ビル竣工、大阪梅田本部開設
平成21年 9月25日	株式会社池田銀行、東京証券取引所市場第一部及び大阪証券取引所市場第一部を上場廃止 株式会社泉州銀行、大阪証券取引所市場第一部を上場廃止
平成21年10月 1日	株式会社池田銀行と株式会社泉州銀行は、共同株式移転により完全親会社となる持株会社「株式会社池田泉州ホールディングス」を設立
平成22年 5月 1日	株式会社池田銀行と株式会社泉州銀行は合併し、株式会社池田泉州銀行となり、大阪市北区に本店移転
平成24年 1月 4日	旧株式会社池田銀行、旧株式会社泉州銀行の基幹システムを、旧株式会社池田銀行のシステムであるNTTデータ地銀共同センターへ統合

3 【事業の内容】

当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。そのため、事業の種類別の事業の内容を記載しております。

当行グループ(当行及び当行の関係会社)は、親会社である株式会社池田泉州ホールディングスのもと、当行、子会社26社(うち連結子会社25社)及び関連会社3社(うち持分法適用関連会社3社)で構成されており、銀行業務を中心にリース業務、信用保証業務、クレジットカード業務などの金融サービスを提供しております。

当行グループの事業に係る位置づけは、次のとおりであります。

〔銀行業務〕

当行の本店及び支店134カ店、出張所7カ所において、預金業務、貸出業務、商品有価証券売買業務、有価証券投資業務、内国為替業務、外国為替業務、社債受託及び登録業務等の受託等業務並びに附帯業務(代理業務、債務の保証、証券投資信託・保険商品の窓口販売業務、証券仲介業務等)を行っております。

〔リース業務〕

子会社の池田泉州リース株式会社及び泉銀総合リース株式会社において、産業機械、工作機械、電子計算機・事務用機器等のリース業務を行っております。

〔信用保証業務〕

子会社の池田泉州信用保証株式会社及び近畿信用保証株式会社において、当行の住宅ローン等の保証業務を行っております。

〔クレジットカード業務〕

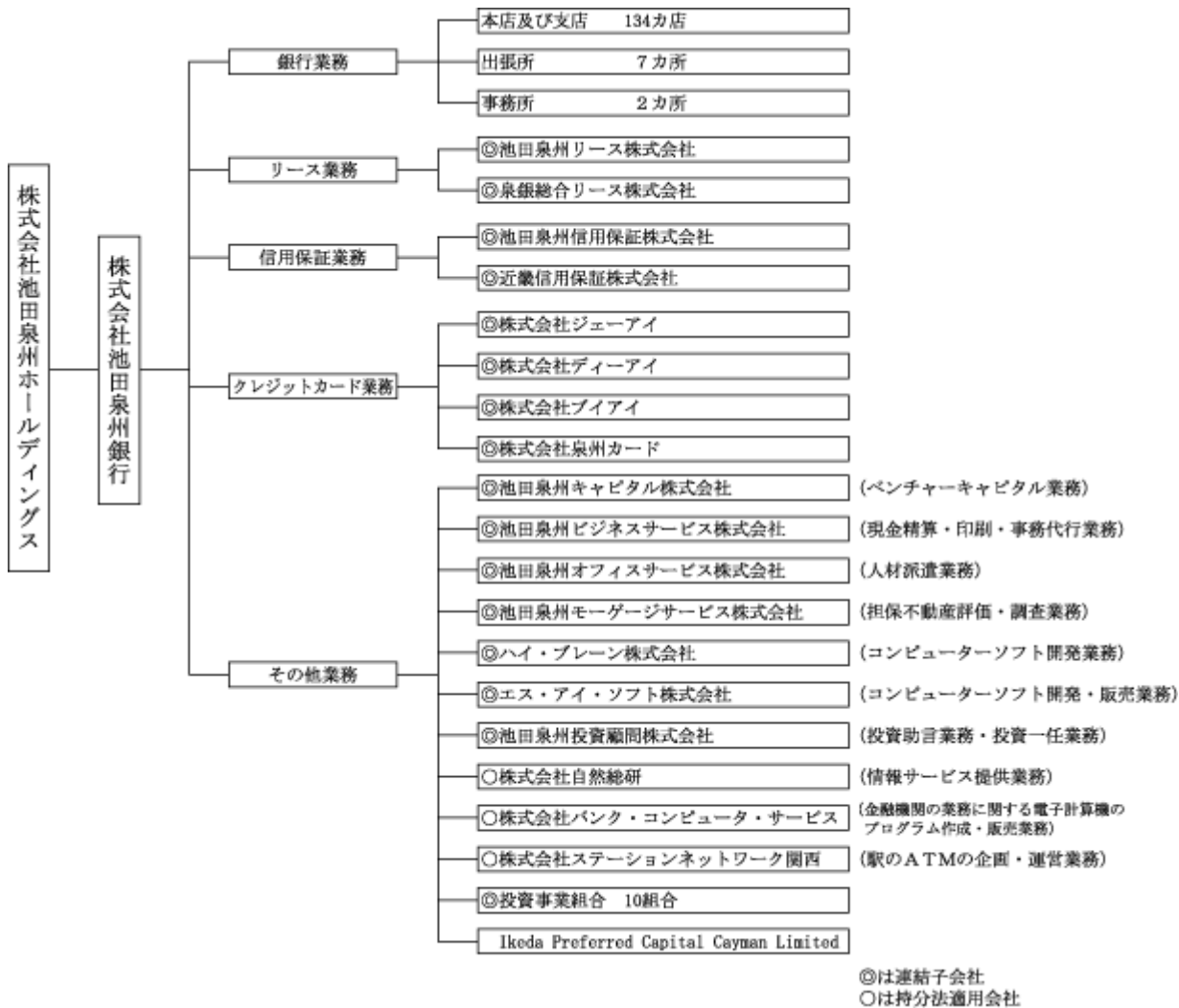
子会社の株式会社ジェーアイ、株式会社ディーアイ、株式会社ブイアイ及び株式会社泉州カードの4社において、クレジットカード業務等を行っております。

〔その他業務〕

上記の業務のほか、子会社・関連会社において、ベンチャーキャピタル業務、コンピューターソフト開発・販売業務、投資助言業務・投資一任業務、情報サービス提供業務を行っております。また、子会社・関連会社において、当行の従属業務(現金精算・印刷・事務代行業務、人材派遣業務、担保不動産評価・調査業務、駅のATMの企画・運営業務等)を行っております。

[事業系統図]

当行グループの事業系統図は次のとおりであります。(平成24年3月31日現在)



- (注) 1 平成23年5月1日に、池銀総合保証株式会社は、池田泉州信用保証株式会社に社名変更いたしました。
- 2 泉銀ビジネスサービス株式会社と池田ビジネスサービス株式会社は、平成23年7月1日をもって、存続会社を泉銀ビジネスサービス株式会社として合併し、社名を池田泉州ビジネスサービスに変更いたしました。
- 3 前連結会計年度において連結子会社であった池銀キャピタル夢仕込ファンド1号投資事業有限責任組合は、平成24年3月15日に清算が終了しました。
- 4 平成24年6月25日に、東京支店(統合店舗)と神田支店(廃止店舗)を統廃合し東京支店に、並びに千里中央支店(統合店舗)と千里中央駅前支店(廃止店舗)を統廃合し千里中央支店にいたしました。この結果、本店及び支店の数は132カ店となっております。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 又は出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (被所有 割合) (%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(親会社) 株式会社池田泉州ホールディングス	大阪市北区	72,311	銀行持株会社	被所有 100.00 () []	12 (12)		経営管理 預金取引関係	当行より建物 の一部賃借	
(連結子会社) 池田泉州リース株式会社	大阪市中央区	50	リース業務	81.00 (76.00) []			預金取引関係 金銭貸借関係 リース取引関係		
泉銀総合リース株式会社	大阪府岸和田市	120	リース業務	95.60 () []	3 ()		預金取引関係 金銭貸借関係 リース取引関係		
池田泉州信用保証株式会社	大阪府池田市	180	信用保証業務	58.70 (41.11) []			預金取引関係 保証取引関係	当行より建物 の一部賃借	
近畿信用保証株式会社	大阪府貝塚市	6,400	信用保証業務	100.00 () []	2 ()		預金取引関係 保証取引関係	当行より建物 の一部賃借	
株式会社ジェーアイ	大阪府池田市	30	クレジットカード業務	82.19 (43.62) []	2 (1)		預金取引関係 金銭貸借関係 保証取引関係		
株式会社ディーアイ	大阪府池田市	30	クレジットカード業務	90.00 (59.16) []	2 (1)		預金取引関係 金銭貸借関係		
株式会社ブイアイ	大阪府池田市	40	クレジットカード業務	100.00 (95.00) []	2 (1)		預金取引関係 金銭貸借関係		
株式会社泉州カード	大阪府岸和田市	30	クレジットカード業務	85.00 () []	1 ()		預金取引関係 金銭貸借関係		
池田泉州キャピタル株式会社	大阪市北区	426	ベンチャーキャピタル業務	65.91 (60.91) []	3 ()		預金取引関係 金銭貸借関係		
池田泉州ビジネスサービス株式会社	大阪市北区	30	現金精算・印刷・事務代行業務	100.00 () []	3 ()		預金取引関係 業務受託関係	当行より建物 の一部賃借	
池田泉州オフィスサービス株式会社	大阪府池田市	20	人材派遣業務	100.00 () []	3 ()		預金取引関係 人材派遣関係	当行より建物 の一部賃借	
池田泉州モーゲージサービス株式会社	大阪府箕面市	20	担保不動産評価・調査業務	100.00 () []	2 ()		預金取引関係 業務受託関係		
ハイ・ブレン株式会社	大阪府池田市	50	コンピューターソフト開発業務	63.10 (58.10) []	2 ()		預金取引関係 業務受託関係	当行より建物 の一部賃借	
エス・アイ・ソフト株式会社	大阪府泉佐野市	30	コンピューターソフト開発・販売業務	85.00 (80.00) []	3 ()		預金取引関係 業務受託関係	当行より建物 の一部賃借	
池田泉州投資顧問株式会社	大阪市中央区	120	投資助言業務・投資一任業務	100.00 (70.04) []	5 (1)		預金取引関係 業務受託関係		
池銀キャピタルニュービジネスファンド1号投資事業有限責任組合	大阪市北区	300	ベンチャー企業への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタルニュービジネスファンド2号投資事業有限責任組合	大阪市北区	600	ベンチャー企業への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタルニュービジネスファンド3号投資事業有限責任組合	大阪市北区	1,000	ベンチャー企業への投資業務				預金取引関係		

名称	住所	資本金 又は出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (被所有 割合) (%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
池銀キャピタル 夢仕込ファンド 2号投資事業有 限責任組合	大阪市北区	200	ベンチャー企業 への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタル 夢仕込ファンド 3号投資事業有 限責任組合	大阪市北区	200	ベンチャー企業 への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタル 夢仕込ファンド K G I 投資事業 組合	大阪市北区	100	ベンチャー企業 への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタル 夢仕込ファンド D・I 投資事業 組合	大阪市北区	100	ベンチャー企業 への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタル 夢仕込ファンド P C I 投資事業 有限責任組合	大阪市北区	100	ベンチャー企業 への投資業務				預金取引関係		
池銀キャピタル 夢仕込ファンド K I 投資事業有 限責任組合	大阪市北区	100	ベンチャー企業 への投資業務				預金取引関係		
J S 企業育成 ファンド投資事 業有限責任組合	東京都千代田区	400	投資事業有限責 任組合						
(持分法適用関連 会社) 株式会社自然総 研	大阪府池田市	80	情報サービス提 供業務	15.00 (10.00) []	6 (3)		預金取引関係 業務受託関係		
株式会社バンク ・コンピュータ ・サービス	大阪府泉佐野市	400	金融機関の業務 に関する電子計 算機のプログラ ム作成、販売業 務	45.00 () []	3 (2)		預金取引関係 金銭貸借関係 業務受託関係	当行より建 物の一部賃 借	
株式会社ステー ションネット ワーク関西	大阪市北区	100	駅のA T Mの企 画、運営業務	40.00 (35.00) []	2 (1)		預金取引関係 金銭貸借関係 業務受託関係		

- (注) 1 当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。そのため、「主要な事業の内容」欄には、事業の種類を記載しております。
- 2 上記関係会社のうち、特定子会社に該当するのは、近畿信用保証株式会社であります。
- 3 上記関係会社のうち、有価証券報告書又は有価証券届出書を提出している会社は、株式会社池田泉州ホールディングスであります。
- 4 「議決権の所有割合(被所有割合)」欄の()内は子会社による間接所有の割合(内書き)、[]内は「自己と出資、人事、資金、技術、取引等において緊密な関係があることにより自己の意思と同一の内容の議決権を行使すると認められる者」又は「自己の意思と同一の内容の議決権を行使することに同意している者」による所有割合(外書き)であります。
- 5 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

平成24年3月31日現在

	銀行業務	リース業務	信用保証業務	クレジット カード業務	その他業務	合計
従業員数(人)	2,781 [874]	34 [7]	39 [47]	37 [11]	178 [340]	3,069 [1,279]

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員1,231人を含んでおりません。
2 嘱託及び臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
3 当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。そのため、事業の種類別の従業員数を記載しております。
4 従業員数は、執行役員を含んでおりません。

(2) 当行の従業員数

平成24年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
2,781 [874]	35.1	12.4	6,861

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員836人を含んでおりません。
2 当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。なお、当行の従業員はすべて銀行業務に属しております。
3 嘱託及び臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
4 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
5 当行の従業員組合は、池田泉州銀行職員組合と池田泉州銀行従業員組合の2つがあり、組合員数は池田泉州銀行職員組合2,337人、池田泉州銀行従業員組合1人であります。双方の組合とも労使間においては特記すべき事項はありません。
6 従業員数は、執行役員18人を含んでおりません。

第2 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

・業績

当連結会計年度におけるわが国経済は、昨年3月に発生した東日本大震災後、一旦大きく落ち込んだものの、その後、設備投資の下げ止まりや個人消費持ち直しなど、緩やかな回復がみられました。しかしながら、欧州債務危機や資源価格の上昇等を背景とした海外景気の下振れ、長引く電力供給不安、為替動向等、景気の先行きについては、未だ不透明で予断を許さない厳しい状況となっております。

物価情勢につきましては、消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、概ねゼロ％となっております。

金融面につきましては、日本銀行による潤沢な資金供給が続くもとで、無担保コールレート（翌日物）は、0.1％を下回る水準で推移しました。また、日本国債利回り（10年物）は、欧州のソブリン問題に起因するリスク回避的な動きから緩やかに低下し、概ね1.0％前後で推移しました。

株価につきましては、円高の動きが強まる中、輸出産業の採算悪化やタイ洪水被害の影響などから、日経平均株価は軟調な推移をみせておりましたが、2月の日銀による金融緩和をきっかけに円安・株高の動きが強まり、3月末の日経平均株価は1万円台を回復して取引を終えました。

当連結会計年度の経常収益は、前連結会計年度比13億1百万円減少して、1,160億7百万円となりました。また、当連結会計年度の経常費用は、前連結会計年度比46億13百万円減少して、1,052億14百万円となりました。この結果、経常利益は、前連結会計年度比33億11百万円増加し、107億92百万円となりました。また、当期純利益は、前連結会計年度比38億82百万円減少し、37億70百万円となりました。

セグメントの業績につきましては、当行グループの報告セグメントが銀行業のみであり、当行グループの業績における「その他」の重要性が乏しいため、記載を省略しております。

・キャッシュ・フローの状況

現金及び現金同等物の当連結会計年度末残高は、前連結会計年度末比103億39百万円減少して、1,309億96百万円となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度比2,295億79百万円増加して、1,154億74百万円の収入となりました。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度比2,644億28百万円減少して、1,242億59百万円の支出となりました。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度比109億58百万円減少して、17億22百万円の支出となりました。

(1) 国内・国際業務部門別収支

当連結会計年度の資金運用収支は、国内業務部門では前連結会計年度比5.1%減少し、国際業務部門でも前連結会計年度比3.3%減少した結果、合計では前連結会計年度比5.0%、31億47百万円減少しました。

当連結会計年度の役務取引等収支は、国内業務部門では前連結会計年度比9.6%減少し、国際業務部門では前連結会計年度比11.5%増加した結果、合計では前連結会計年度比9.5%、10億60百万円減少しました。

当連結会計年度のその他業務収支は、国内業務部門では前連結会計年度比69.1%減少しましたが、国際業務部門では前連結会計年度比64.1%増加した結果、合計では前連結会計年度比6.4%、6億69百万円増加しました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	58,322	5,010	63,333
	当連結会計年度	55,343	4,843	60,186
うち資金運用収益	前連結会計年度	70,400	6,052	76,452
	当連結会計年度	64,941	6,095	71,036
うち資金調達費用	前連結会計年度	12,078	1,041	13,119
	当連結会計年度	9,598	1,252	10,850
役務取引等収支	前連結会計年度	11,083	61	11,144
	当連結会計年度	10,016	68	10,084
うち役務取引等収益	前連結会計年度	17,248	191	17,439
	当連結会計年度	16,049	227	16,276
うち役務取引等費用	前連結会計年度	6,165	130	6,295
	当連結会計年度	6,032	159	6,191
その他業務収支	前連結会計年度	4,544	5,941	10,485
	当連結会計年度	1,403	9,751	11,154
うちその他業務収益	前連結会計年度	4,828	7,815	12,643
	当連結会計年度	7,895	10,237	18,132
うちその他業務費用	前連結会計年度	284	1,873	2,157
	当連結会計年度	6,491	485	6,976

- (注) 1 国内業務部門は、国内店及び連結子会社の円建取引であります。
2 国際業務部門は、国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等は国際業務部門に含めております。
3 資金調達費用は、金銭の信託運用見合費用(前連結会計年度51百万円、当連結会計年度39百万円)を控除して表示しております。
4 資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。
5 その他業務収益及びその他業務費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間に相殺される金融派生商品損益であります。

[次へ](#)

(2) 国内・国際業務部門別資金運用 / 調達状況

当連結会計年度の資金運用勘定平均残高は、国内業務部門では、貸出金が減少しましたが、有価証券並びにコールローン及び買入手形が増加したことから、前連結会計年度比1.7%増加しました。また、国際業務部門では、貸出金及び有価証券運用が増加したことから、前連結会計年度比2.5%増加しました。この結果、資金運用勘定平均残高合計は、前連結会計年度比1.8%増加しました。

当連結会計年度の資金調達勘定平均残高は、国内業務部門では、譲渡性預金、コールマネー及び売渡手形並びに債券貸借取引受入担保金が減少しましたが、預金が増加したことを中心に、前連結会計年度比1.7%増加しました。また、国際業務部門では、貸出金及び有価証券運用増加に伴って、債券貸借取引受入担保金を中心に、前連結会計年度比3.1%増加しました。この結果、資金調達勘定平均残高合計は、前連結会計年度比1.8%増加しました。

次に、当連結会計年度の資金運用利回りについては、国内業務部門では、主に貸出金利回り及び有価証券利回りを中心に、前連結会計年度比0.15%低下し、国際業務部門では、有価証券利回りを中心に、前連結会計年度比0.03%低下しました。この結果、資金運用利回り全体では、前連結会計年度比0.14%低下しました。

当連結会計年度の資金調達利回りについては、国内業務部門では、主に預金利回りを中心に、前連結会計年度比0.06%低下し、国際業務部門では、調達金利が上昇したことから、債券貸借取引受入担保金利回りを中心に、前連結会計年度比0.06%上昇しました。この結果、資金調達利回り全体では、前連結会計年度比0.06%低下しました。

国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	(44,002) 4,413,740	(171) 70,400	1.59
	当連結会計年度	(43,650) 4,488,453	(126) 64,941	1.44
うち貸出金	前連結会計年度	3,431,174	59,697	1.73
	当連結会計年度	3,425,124	58,411	1.70
うち商品有価証券	前連結会計年度	47	0	0.26
	当連結会計年度	96	0	0.30
うち有価証券	前連結会計年度	909,634	10,451	1.14
	当連結会計年度	977,806	6,300	0.64
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	22,826	24	0.10
	当連結会計年度	30,767	32	0.10
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	4,784	11	0.23
	当連結会計年度	9,648	22	0.23
資金調達勘定	前連結会計年度	4,354,313	12,078	0.27
	当連結会計年度	4,428,666	9,598	0.21
うち預金	前連結会計年度	4,263,081	10,612	0.24
	当連結会計年度	4,335,509	7,895	0.18
うち譲渡性預金	前連結会計年度	8,548	19	0.23
	当連結会計年度	4,096	1	0.03
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	7,730	9	0.12
	当連結会計年度	1,040	1	0.12
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	5,286	5	0.09
	当連結会計年度			
うちコマースナル・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度	49,801	752	1.51
	当連結会計年度	59,183	843	1.42

- (注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。
- 2 国内業務部門は、国内店及び連結子会社の円建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。
- 3 資金運用勘定は、無利息預け金の平均残高(前連結会計年度36,598百万円、当連結会計年度33,543百万円)を、資金調達勘定は、金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度19,000百万円、当連結会計年度18,999百万円)及び利息(前連結会計年度51百万円、当連結会計年度39百万円)を、それぞれ控除して表示しております。
- 4 ()内は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	275,321	6,052	2.19
	当連結会計年度	282,188	6,095	2.16
うち貸出金	前連結会計年度	136	1	0.90
	当連結会計年度	4,780	39	0.82
うち商品有価証券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち有価証券	前連結会計年度	268,991	6,011	2.23
	当連結会計年度	272,426	5,989	2.19
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	1,304	4	0.36
	当連結会計年度	687	25	3.68
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
資金調達勘定	前連結会計年度	(44,002) 277,547	(171) 1,041	0.37
	当連結会計年度	(43,650) 286,083	(126) 1,252	0.43
うち預金	前連結会計年度	13,873	50	0.36
	当連結会計年度	14,188	41	0.29
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	20	0	0.57
	当連結会計年度	1,323	8	0.60
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	219,370	791	0.36
	当連結会計年度	226,599	978	0.43
うちコマースナル・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			

(注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

2 国際業務部門は、国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

3 資金運用勘定は、無利息預け金の平均残高(前連結会計年度113百万円、当連結会計年度105百万円)を、控除して表示しております。

4 ()内は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

5 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式(前月末T T 仲値を当該月のノンエクスチェンジ取引に適用する方式)により算出しております。

[次へ](#)

合計

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	4,645,059	76,281	1.64
	当連結会計年度	4,726,990	70,910	1.50
うち貸出金	前連結会計年度	3,431,310	59,699	1.73
	当連結会計年度	3,429,904	58,450	1.70
うち商品有価証券	前連結会計年度	47	0	0.26
	当連結会計年度	96	0	0.30
うち有価証券	前連結会計年度	1,178,626	16,463	1.39
	当連結会計年度	1,250,232	12,290	0.98
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	24,130	29	0.12
	当連結会計年度	31,455	58	0.18
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	4,784	11	0.23
	当連結会計年度	9,648	22	0.23
資金調達勘定	前連結会計年度	4,587,858	12,948	0.28
	当連結会計年度	4,671,099	10,724	0.22
うち預金	前連結会計年度	4,276,955	10,663	0.24
	当連結会計年度	4,349,697	7,937	0.18
うち譲渡性預金	前連結会計年度	8,548	19	0.23
	当連結会計年度	4,096	1	0.03
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	7,750	9	0.12
	当連結会計年度	2,364	9	0.39
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	224,657	796	0.35
	当連結会計年度	226,599	978	0.43
うちコマースナル・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度	49,801	752	1.51
	当連結会計年度	59,183	843	1.42

- (注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。
- 2 資金運用勘定は、無利息預け金の平均残高(前連結会計年度36,712百万円、当連結会計年度33,648百万円)を、資金調達勘定は、金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度19,000百万円、当連結会計年度18,999百万円)及び利息(前連結会計年度51百万円、当連結会計年度39百万円)を、それぞれ控除して表示しております。
- 3 国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息は、相殺して記載しております。

(3) 国内・国際業務部門別役務取引の状況

当連結会計年度の国内業務部門の役務取引等収益は、為替業務並びに保証業務を中心に前連結会計年度比7.0%減少して、160億49百万円となり、役務取引等費用は、前連結会計年度比2.2%減少して、60億32百万円となりました。また、国際業務部門の役務取引等収益は2億27百万円となり、役務取引等費用は1億59百万円となりました。この結果、全体の役務取引等収益は、前連結会計年度比6.7%減少して、162億77百万円となり、役務取引等費用は、前連結会計年度比1.6%減少して、61億92百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	17,248	191	17,440
	当連結会計年度	16,049	227	16,277
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	2,503		2,503
	当連結会計年度	2,451		2,451
うち為替業務	前連結会計年度	2,583	188	2,771
	当連結会計年度	2,383	225	2,609
うち証券関連業務	前連結会計年度	238		238
	当連結会計年度	202		202
うち代理業務	前連結会計年度	421		421
	当連結会計年度	400		400
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	591		591
	当連結会計年度	579		579
うち保証業務	前連結会計年度	2,192	3	2,195
	当連結会計年度	1,991	2	1,993
うち投資信託・保険販売業務	前連結会計年度	6,159		6,159
	当連結会計年度	5,998		5,998
役務取引等費用	前連結会計年度	6,165	130	6,295
	当連結会計年度	6,032	159	6,192
うち為替業務	前連結会計年度	642	130	773
	当連結会計年度	451	159	610

(注) 1 国内業務部門は、国内店及び連結子会社の円建取引であります。
2 国際業務部門は、国内店の外貨建取引であります。

(4) 国内・国際業務部門別預金残高の状況

預金の種類別残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	4,333,386	15,982	4,349,369
	当連結会計年度	4,382,546	13,150	4,395,696
うち流動性預金	前連結会計年度	1,698,246		1,698,246
	当連結会計年度	1,797,422		1,797,422
うち定期性預金	前連結会計年度	2,600,138		2,600,138
	当連結会計年度	2,549,468		2,549,468
うちその他	前連結会計年度	35,002	15,982	50,985
	当連結会計年度	35,654	13,150	48,805
譲渡性預金	前連結会計年度	4,500		4,500
	当連結会計年度			
総合計	前連結会計年度	4,337,886	15,982	4,353,869
	当連結会計年度	4,382,546	13,150	4,395,696

- (注) 1 国内業務部門は、国内店及び連結子会社の円建取引であります。
2 国際業務部門は、国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等は国際業務部門に含めております。
3 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金
4 定期性預金 = 定期預金 + 定期積金

[前へ](#) [次へ](#)

(5) 貸出金残高の状況

業種別貸出状況(残高・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	貸出金残高(百万円)	構成比(%)	貸出金残高(百万円)	構成比(%)
国内 (除く特別国際金融取引勘定分)	3,501,016	100.00	3,516,142	100.00
製造業	300,112	8.57	314,976	8.96
農業, 林業	1,429	0.04	1,795	0.05
漁業	25	0.00	82	0.00
鉱業, 採石業, 砂利採取業	285	0.01	269	0.01
建設業	92,797	2.65	89,905	2.56
電気・ガス・熱供給・水道業	2,925	0.08	7,926	0.23
情報通信業	13,693	0.39	12,128	0.34
運輸業, 郵便業	71,806	2.05	72,763	2.07
卸売業, 小売業	190,388	5.44	207,860	5.91
金融業, 保険業	160,073	4.57	126,152	3.59
不動産業, 物品賃貸業	482,006	13.77	469,691	13.36
学術研究, 専門・技術サービス業	10,888	0.31	10,578	0.30
宿泊業, 飲食業	21,900	0.63	23,424	0.67
生活関連サービス業, 娯楽業	25,086	0.72	23,722	0.67
教育, 学習支援業	7,047	0.20	7,445	0.21
医療・福祉	30,384	0.87	33,430	0.95
その他のサービス	64,402	1.84	63,547	1.81
地方公共団体	158,697	4.53	212,541	6.04
その他	1,867,054	53.33	1,837,892	52.27
特別国際金融取引勘定分				
政府等 金融機関 その他				
合計	3,501,016		3,516,142	

(注) 「国内」とは、当行及び連結子会社であります。

外国政府等向け債権残高(国別)

前連結会計年度、当連結会計年度とも該当ありません。

(6) 国内・国際業務部門別有価証券の状況

有価証券残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	347,558		347,558
	当連結会計年度	398,381		398,381
地方債	前連結会計年度	84,323		84,323
	当連結会計年度	77,972		77,972
短期社債	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
社債	前連結会計年度	210,792		210,792
	当連結会計年度	229,198		229,198
株式	前連結会計年度	63,105		63,105
	当連結会計年度	62,283		62,283
その他の証券	前連結会計年度	138,269	233,291	371,561
	当連結会計年度	148,419	283,710	432,129
合計	前連結会計年度	844,050	233,291	1,077,342
	当連結会計年度	916,255	283,710	1,199,965

(注) 1 国内業務部門は、国内店及び連結子会社の円建取引であります。

2 国際業務部門は、国内店及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建外国証券は、国際業務部門に含めております。

3 「その他の証券」には、外国証券を含んでおります。

(単体情報)

(参考)

当行の単体情報のうち、参考として以下の情報を掲げております。

なお、前事業年度については、合併までの株式会社泉州銀行の計数を含んでおりません。

1 損益状況(単体)

(1) 損益の概要

	前事業年度(A) (百万円)	当事業年度(B) (百万円)	増減(B)-(A) (百万円)
業務粗利益	74,439	74,051	388
国内業務粗利益	63,550	59,388	4,162
資金利益	55,847	55,300	547
役務取引等利益	3,457	2,843	614
その他業務利益	4,245	1,244	3,001
国際業務粗利益	10,888	14,662	3,774
資金利益	4,976	4,843	133
役務取引等利益	57	68	11
その他業務利益	5,854	9,751	3,897
経費(除く臨時処理分)()	48,972	50,759	1,787
人件費	23,511	24,760	1,249
物件費	22,959	23,252	293
税金	2,502	2,746	244
業務純益(一般貸倒引当金繰入前・のれん償却前)	25,466	23,291	2,175
のれん償却額()			
業務純益(一般貸倒引当金繰入前)	25,466	23,291	2,175
一般貸倒引当金繰入額()	3,409	2,410	999
業務純益	22,057	20,881	1,176
うち債券関係損益	8,993	9,259	266
臨時損益	16,270	13,164	3,106
株式等関係損益	1,424	459	965
不良債権処理額()	10,961	6,969	3,992
貸出金償却()	8,174	3,061	5,113
個別貸倒引当金繰入額()	2,414	4,345	1,931
偶発損失引当金繰入額()	64	101	165
債権譲渡損益()	11	15	4
償却債権取立益		631	631
その他()	319	310	9
その他臨時損益	3,884	5,734	1,850
経常利益	5,786	7,716	1,930
特別損益	781	280	1,061
償却債権取立益	1,169		1,169
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	12		12
固定資産処分損()	143	176	33
減損損失()	189	166	23
株式報酬受入益	6	62	56
資産除去債務会計基準適用に伴う影響額()	74		74
税引前当期純利益	6,568	7,436	868
法人税、住民税及び事業税()	82	86	4
法人税等調整額()	141	5,299	5,158
法人税等合計()	224	5,385	5,161
当期純利益	6,343	2,050	4,293

(注) 1 業務粗利益 = (資金運用収支 + 金銭の信託運用見合費用) + 役務取引等収支 + その他業務収支

2 業務純益 = 業務粗利益 - 経費(除く臨時処理分) - 一般貸倒引当金繰入額

3 「金銭の信託運用見合費用」とは、金銭の信託取得に係る資金調達費用であり、金銭の信託運用損益が臨時損益に計上されているため、業務費用から控除しているものであります。

4 臨時損益とは、損益計算書中「その他経常収益・費用」から一般貸倒引当金繰入額を除き、金銭の信託運用見合費用及び退職給付費用のうち臨時費用処理分等を加えたものであります。

5 債券関係損益 = 国債等債券売却益 + 国債等債券償還益 - 国債等債券売却損 - 国債等債券償還損 - 国債等債券償却 + その他の業務収益(CDO区分処理益) - その他の業務費用(投資事業組合に係る損失)

6 株式等関係損益 = 株式等売却益 - 株式等売却損 - 株式等償却

(2) 営業経費の内訳

	前事業年度(A) (百万円)	当事業年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
給料・手当	22,434	23,640	1,206
退職給付費用	2,639	2,831	192
福利厚生費	378	292	86
減価償却費	2,736	3,552	816
土地建物機械賃借料	3,289	3,323	34
営繕費	45	63	18
消耗品費	634	613	21
給水光熱費	483	487	4
旅費	116	112	4
通信費	1,221	1,411	190
広告宣伝費	882	912	30
租税公課	2,502	2,746	244
その他	13,171	13,060	111
計	50,536	53,048	2,512

(注) 損益計算書中「営業経費」の内訳であります。

2 利鞘(国内業務部門)(単体)

	前事業年度(A) (%)	当事業年度(B) (%)	増減(B) - (A) (%)
(1) 資金運用利回	1.58	1.43	0.15
(イ)貸出金利回	1.73	1.70	0.03
(ロ)有価証券利回	1.14	0.64	0.50
(2) 資金調達原価	1.38	1.30	0.08
(イ)預金等利回	0.24	0.18	0.06
(ロ)外部負債利回	1.44	1.39	0.05
(3) 総資金利鞘	0.20	0.13	0.07

(注) 1 「国内業務部門」は、国内店の円建取引であります。

2 「外部負債」 = コールマネー + 売渡手形 + 借入金

3 ROE(単体)

	前事業年度(A) (%)	当事業年度(B) (%)	増減(B) - (A) (%)
業務純益ベース(一般貸倒引当金繰入前・ のれん償却前)	20.22	14.47	5.75
業務純益ベース(一般貸倒引当金繰入前)	20.22	14.47	5.75
業務純益ベース	17.51	12.97	4.54
当期純利益ベース	5.03	1.27	3.76

[前へ](#) [次へ](#)

4 預金・貸出金の状況(単体)

(1) 預金・貸出金の残高

	前事業年度(A) (百万円)	当事業年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
預金(未残)	4,357,005	4,407,710	50,705
預金(平残)	4,124,129	4,359,181	235,052
貸出金(未残)	3,512,391	3,527,485	15,094
貸出金(平残)	3,297,318	3,442,070	144,752

(2) 個人・法人別預金残高(国内)

	前事業年度(A) (百万円)	当事業年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
個人	3,562,663	3,566,886	4,223
法人	794,342	840,823	46,481
合計	4,357,005	4,407,710	50,705

(注) 譲渡性預金及び特別国際金融取引勘定分を除いております。

(3) 消費者ローン残高

	前事業年度(A) (百万円)	当事業年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
消費者ローン残高	1,796,061	1,758,852	37,209
住宅ローン残高	1,753,899	1,720,255	33,644
その他ローン残高	42,162	38,597	3,565

(4) 中小企業等貸出金

		前事業年度(A)	当事業年度(B)	増減(B) - (A)
中小企業等貸出金残高	百万円	2,939,762	2,901,231	38,531
総貸出金残高	百万円	3,512,391	3,527,485	15,094
中小企業等貸出金比率	/ %	83.69	82.24	1.45
中小企業等貸出先件数	件	189,021	182,103	6,918
総貸出先件数	件	189,419	182,495	6,924
中小企業等貸出先件数比率	/ %	99.78	99.78	0.00

(注) 1 貸出金残高には、特別国際金融取引勘定分は含まれておりません。

2 中小企業等とは、資本金3億円(ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品賃貸業等は5千万円)以下の会社又は常用する従業員が300人(ただし、卸売業、物品賃貸業は100人、小売業、飲食業は50人)以下の企業等でありませ

す。
3 中小企業等貸出件数及び総貸出先件数は、システム統合に伴い集計方法を統一しております。なお、過年度との比較の観点から、前事業年度の中小企業等貸出先件数、総貸出先件数及び中小企業等貸出先件数比率も遡って見直しております。

5 債務の保証(支払承諾)の状況(単体)

支払承諾の残高内訳

種類	前事業年度		当事業年度	
	口数(口)	金額(百万円)	口数(口)	金額(百万円)
手形引受	12	57	43	239
信用状	388	1,633	249	1,474
保証	4,579	21,796	4,119	19,767
計	4,979	23,487	4,411	21,482

(注) 保証に係る口数は、システム統合に伴い集計方法を統一しております。なお、過年度との比較の観点から、前事業年度の保証に係る口数も遡って見直しております。

6 内国為替の状況(単体)

区分		前事業年度		当事業年度	
		口数(千口)	金額(百万円)	口数(千口)	金額(百万円)
送金為替	各地へ向けた分	7,525	8,340,554	8,173	10,085,326
	各地より受けた分	10,278	6,007,560	10,161	6,536,321
代金取立	各地へ向けた分	372	297,189	109	147,448
	各地より受けた分	7	11,835	9	13,739

7 外国為替の状況(単体)

区分		前事業年度	当事業年度
		金額(百万米ドル)	金額(百万米ドル)
仕向為替	売渡為替	1,354	1,748
	買入為替	108	121
被仕向為替	支払為替	961	1,167
	取立為替	158	171
合計		2,583	3,209

[前へ](#) [次へ](#)

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号。以下、「告示」という。)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

項目		平成23年3月31日	平成24年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
基本的項目 (Tier 1)	資本金	50,710	50,710
	うち非累積的永久優先株	27,500	
	新株式申込証拠金		
	資本剰余金	104,361	93,932
	利益剰余金	27,042	24,518
	自己株式()		
	自己株式申込証拠金		
	社外流出予定額()	6,294	5,645
	その他有価証券の評価差損()		
	為替換算調整勘定		
	新株予約権		
	連結子法人等の少数株主持分	1,177	1,144
	うち海外特別目的会社の発行する優先出資証券		
	営業権相当額()		
	のれん相当額()		
	企業結合等により計上される無形固定資産相当額()		
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額()	575	515
	繰延税金資産の控除前の〔基本的項目〕計 (上記各項目の合計額)		
	繰延税金資産の控除金額()		
	計 (A)	176,422	164,145
うちステップ・アップ金利条項付の 優先出資証券 (注1)			
補完的項目 (Tier 2)	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の 差額の45%相当額		
	一般貸倒引当金	31,213	33,192
	負債性資本調達手段等	69,500	84,500
	うち永久劣後債務 (注2)	15,000	15,000
	うち期限付劣後債務及び期限付優先株 (注3)	54,500	69,500
	計	100,713	117,692
うち自己資本への算入額 (B)	84,925	99,796	
控除項目	控除項目 (注4) (C)	1,374	1,334
自己資本額	(A) + (B) - (C) (D)	259,973	262,608
リスク・ アセット等	資産(オン・バランス)項目	2,295,037	2,285,195
	オフ・バランス取引等項目	39,004	36,638
	信用リスク・アセットの額 (E)	2,334,042	2,321,834
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額 (G) / 8% (F)	134,038	125,631
	(参考)オペレーショナル・リスク相当額 (G)	10,723	10,050
計(E) + (F) (H)	2,468,081	2,447,465	
連結自己資本比率(国内基準) = D / H × 100(%)	10.53	10.72	
(参考)Tier 1比率 = A / H × 100(%)	7.14	6.70	

(注) 1 告示第28条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。

2 告示第29条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。

- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
- (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
- (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
- (4) 利払い義務の延期が認められるものであること

3 告示第29条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。

4 告示第31条第1項第1号から第6号に掲げるものであり、他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額及び第2号に規定するものに対する投資に相当する額が含まれております。

単体自己資本比率(国内基準)

項目		平成23年3月31日	平成24年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
基本的項目 (Tier 1)	資本金	50,710	50,710
	うち非累積的永久優先株	27,500	
	新株式申込証拠金		
	資本準備金	11,082	13,168
	その他資本剰余金	93,278	80,764
	利益準備金	1,152	2,411
	その他利益剰余金	24,473	18,970
	その他		
	自己株式()		
	自己株式申込証拠金		
	社外流出予定額()	6,294	5,644
	その他有価証券の評価差損()		
	新株予約権		
	営業権相当額()		
	のれん相当額()		
	企業結合により計上される無形固定資産相当額()		
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額()	575	515
	繰延税金資産の控除前の〔基本的項目〕計 (上記各項目の合計額)		
	繰延税金資産の控除金額()		
	計 (A)	173,827	159,865
うちステップ・アップ金利条項付の 優先出資証券 (注1)			
うち海外特別目的会社の発行する 優先出資証券			
補完的項目 (Tier 2)	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の 差額の45%相当額		
	一般貸倒引当金	22,197	24,607
	負債性資本調達手段等	69,500	84,500
	うち永久劣後債務 (注2)	15,000	15,000
	うち期限付劣後債務及び期限付優先株 (注3)	54,500	69,500
	計	91,697	109,107
うち自己資本への算入額 (B)	84,755	99,647	
控除項目	控除項目 (注4) (C)	1,101	1,099
自己資本額	(A) + (B) - (C) (D)	257,481	258,413
リスク・ アセット等	資産(オン・バランス)項目	2,284,493	2,277,539
	オフ・バランス取引等項目	39,004	36,638
	信用リスク・アセットの額 (E)	2,323,498	2,314,177
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額 ((G) / 8%) (F)	117,302	109,438
	(参考)オペレーショナル・リスク相当額 (G)	9,384	8,755
	計(E) + (F) (H)	2,440,800	2,423,616
単体自己資本比率(国内基準) = D / H × 100(%)		10.54	10.66
(参考)Tier 1比率 = A / H × 100(%)		7.12	6.59

(注) 1 告示第40条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。

2 告示第41条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。

- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
- (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
- (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
- (4) 利払い義務の延期が認められるものであること

3 告示第41条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。

4 告示第43条第1項第1号から第5号に掲げるものであり、他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額が含まれております。

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3カ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	平成23年3月31日	平成24年3月31日
	金額(百万円)	金額(百万円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	13,983	14,079
危険債権	41,565	43,209
要管理債権	7,460	7,452
正常債権	3,504,752	3,508,278

[前△](#)

2 【生産、受注及び販売の状況】

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

3 【対処すべき課題】

当行グループの地盤とする大阪ベイエリアは、阪神港と3つの空港を有し、東京都に匹敵する人口と事業所が高密度に存在する全国有数の恵まれたマーケットです。

当行グループは、こうした「地域力（ポテンシャル）」を活かし、地域の活性化を促していくことが地元金融機関として、私どもに与えられた責務であるとの認識の下、積極的に「地域力」を高める努力をし、結果として、当社グループも地域とともに成長していく「ビジネスモデル（地域密着型金融）」を推進してまいります。

このビジネスモデルを具体化するために、当行グループはグループ経営戦略として、「効率化の徹底」「アライアンスの推進」「競争力強化のための3つの独自戦略（成長戦略）」を掲げております。

「効率化の徹底」におきましては、業務プロセスの見直しによる重複業務の削減等、業務効率化に加え、事務体制や人員戦略を一体的に検討し、ローコストオペレーションを実現してまいります。

「アライアンスの推進」におきましては、独立系の金融機関ならではの系列・グループにとらわれない自由度の高い独自ネットワークを活かし、お客さまのニーズに合った高品質の商品・サービスを提供いたします。

「競争力強化のための3つの独自戦略（成長戦略）」では、「親切で新しい」をモットーに戦略3本部（アジアチャイナ本部・プライベートバンキング本部・先進テクノ本部）による以下のような取り組みを通じて、当行の独自戦略としての「地域第一主義」「独自の提案力」に更に磨きを掛けつつ、お客さまサービスの向上に努めてまいります。

アジア・チャイナ・ビジネスへの対応力強化

蘇州事務所で集積したニーズ・実績、独立系地銀ならではの自由で幅広いネットワークを活用して、アジアチャイナ全域におけるお客さまに対するサポート力を飛躍的に高めてまいります。

企業オーナーの様々なニーズへの対応

高品質な専門家ネットワークにより付加価値の高いサービスを提供し、法人・個人を問わず、「プロが」「中長期的に」「幅広く」様々なニーズに対応いたします。

産学官連携推進と先進テクノ支援

関西主要大学・公的機関との緊密な産学官ネットワークを活用し、助成金応募先等の先進技術をもった企業の育成・サポートを行ってまいります。

4 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループ(当行及び連結子会社)が判断したものであります。

(1) 経営統合に関するリスク

期待した統合効果を十分に発揮できないリスク

当行(存続会社)は、泉州銀行(消滅会社)と平成22年5月1日付けで合併し(以下、当行と泉州銀行の共同株式移転を「本件株式移転」、当行と泉州銀行の合併を「本件合併」といい、総称して「本件統合」といいます。)、本件統合において企図した池田泉州ホールディングスグループの事業計画の推進及び経営の効率化等を進めていく方針です。

しかしながら、以下の要因等により本件統合の効果が妨げられ、その結果、当初期待した本件統合の効果を十分に発揮できない等の場合には、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

- ・本件統合において企図した事業計画及び経営の効率化を予定どおり実施できないこと
- ・本件統合に伴う商品・サービス、業務・システム、店舗等の統合による想定外の追加費用の発生
- ・本件統合後の顧客との関係の変化、営業戦略の不奏功等により、本件統合によるシナジーを発揮できないこと

当行親会社と大株主との関係に関するリスク

株式会社三菱東京UFJ銀行(以下「BTMU」といいます。)は、平成24年3月31日現在、当行親会社の総議決権(但し、当行親会社の第一種優先株式及び第二種優先株式に係る議決権の数は除外しております。)の約15%の議決権を保有しております。当行グループは、BTMU及び株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ(以下「MUFJ」といいます。)との親密な関係を今後も継続してまいります。当行親会社の議決権について、地域金融機関としての経営の独立性を高めるため、本件統合に伴い、当行、泉州銀行とBTMUは一定の合意(当該合意内容の詳細については、後記「5 経営上の重要な契約等(2) 当行及び泉州銀行と株式会社三菱東京UFJ銀行との間の当行親会社の議決権に関する契約」をご参照下さい。)をしており、当該合意により、将来的に、当行親会社は、BTMU及びMUFJの持分法適用会社から外れることを想定しております。当行グループは、現時点においても、BTMU及びMUFJとは独立して事業経営を行っておりますが、BTMUは当行親会社の総議決権の約15%を有する当行親会社の大株主であることから、BTMUの事業戦略又は投資方針等に変更が生じた場合等においては、当行グループの経営方針及び業務遂行に対して影響を及ぼす可能性があります。

また、BTMUが、上記の合意に基づき、多数の当行親会社株式を一定期間において売却した場合には、一時的に当行親会社株式の市場における流通量が増加し、これにより当行親会社の株価が影響を受ける可能性があります。

第一種優先株式及び第二種優先株式の取得に関するリスク

当行親会社は、第一種優先株式及び第二種優先株式を発行しておりますが、当行親会社は、池田泉州ホールディングスグループとしての最適な資本政策を常に検討しており、今後、必要に応じて第一種優先株式及び第二種優先株式を取得する場合には、当行グループの財政状態、分配可能額や当行親会社の株価が影響を受ける可能性があります。

(2) 地域経済への依存のリスク

当行グループは、関西地区を主要な営業基盤としております。当行グループは、関西地区のうちの特定の地域又は特定の顧客へ過度に依存することがないように営業を行っておりますが、主要な営業地域の経済が悪化した場合には、取引先の業況悪化等を通じて信用リスクが増大し、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 競争に関するリスク

当行グループの主要な営業基盤は、既存のメガバンクや他の地元金融機関に加え、近隣地銀の参入等もあり、今後一層の競争激化が予想されます。当行グループがこのような事業環境の影響を受け、計画している営業戦略が奏功しないこと等により、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 信用リスク

貸出先の財務状況悪化等に起因する信用リスクは当行グループが保有する主要なリスクであり、当行グループの不良債権は、景気動向や、不動産価格及び株価の変動、貸出先の経営状況等によっては増加する可能性があります。その結果、現時点の想定を上回る信用コストが発生した場合、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 市場リスク

当行グループの市場関連業務においては、様々な金融商品での運用を行っており、金利・為替・株式等の相場変動の影響を受けます。これらのリスクに対しては、ヘッジ取引等によりリスクのエクスポージャーを低減するための諸施策を実施しておりますが、かかる施策によって必ずしもこれらのリスクを完全に回避することができるわけではありません。当行グループの予想を超える変動が生じた場合、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) 流動性リスク

内外の経済情勢や市場環境の変化等により、資金繰りに影響をきたしたり、通常より著しく高い金利での調達を余儀なくされたりする可能性があります。また、外部の格付機関が当行の格付けを引き下げた場合等にも、不利な条件での資金調達取引を余儀なくされる可能性があります。

(7) 事務リスク

当行グループでは、事務処理手続きに関する諸規定を定め、それに則った正確な事務処理を励行することを徹底し、事務事故の未然防止を図るため事務管理体制の強化に努めております。しかしながら、これらの対策にもかかわらず、重大な事故・不正等が発生した場合には、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(8) システムリスク

当行グループは、営業店、A T M及び他行とを結ぶオンラインシステムや顧客情報を蓄積している情報システムを保有しております。当行グループでは、コンピュータシステムの停止や誤作動又は不正利用等のシステムリスクに対してシステムの安全稼働に万全を期すほか、厳格な情報管理を行い、運用面での対策を実施しております。しかしながら、これらの対策にもかかわらず、重大なシステム障害が発生した場合には、決済業務に支障をきたす等当行グループの事業に重大な影響を及ぼす可能性があります。その結果、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(9) 人的リスク

他の金融機関や異業種との競合の結果として当行グループの求める人材を確保できない場合、人材の流出や士気の低下、法令等遵守の観点から問題となる行為等が発生した場合には、当行グループの経営成績や業務遂行に影響を及ぼす可能性があります。

(10)有形資産リスク

災害や資産管理の瑕疵等の結果、有形資産の毀損や執務環境等の質の低下等が発生した場合には、当行グループの経営成績や業務遂行に影響を及ぼす可能性があります。特に、南海地震・東南海地震等の大規模自然災害が発生した場合、当行グループ自身の被災による損害のほか、取引先の被災による業績悪化が、当行グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(11)各種規制の変更リスク

当行グループは、事業運営上の様々な公的規制や金融システム秩序維持のための諸規制・政策のもとで業務を遂行しておりますが、これらの諸規制・政策は、今後の経済及び金融市況、又は金融機関への規制に関する世界的な潮流等に応じて、変更される可能性があります。例えば、平成21年12月4日には中小企業等に対する金融の円滑化を図るための臨時措置に関する法律が施行され、金融機関の努力義務として中小企業又は住宅ローンの借り手から申込みがあった場合には貸付条件の変更等を行うよう努める旨が定められております。このような諸規則・政策の変更については、現時点でその影響を正確に予測することは困難ですが、その変更内容及び事業運営に及ぼす影響の程度によっては、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(12)風説・風評の流布によるリスク

銀行業界及び当行グループに対するネガティブな報道を含め、悪質な風説や風評の流布は、それが正確であるか否かにかかわらず、また、当行グループに該当するか否かにかかわらず、当行グループの財政状態及び経営成績並びに当行親会社の株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

(13)繰延税金資産に関するリスク

現時点の会計基準では、ある一定の状況において、実現すると見込まれる税務上の便益を繰延税金資産として計上することが認められております。繰延税金資産の計算は、将来の課税所得に関する様々な予測・仮定に基づいており、実際の結果がかかる予測・仮定とは異なる可能性があります。当行グループは、一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき繰延税金資産を貸借対照表に計上しておりますが、今後も、当行グループの将来の課税所得の予測に基づいて繰延税金資産の一部又は全額の回収ができないと判断される場合や、将来的に制度の変更により繰延税金資産の算入額が規制された場合には、当行グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(14)自己資本比率に関するリスク

当行グループは、連結自己資本比率及び単体自己資本比率を平成18年金融庁告示第19号に定められる国内基準(4%)以上に維持する必要があります。当行グループの自己資本比率が、求められる水準を下回った場合、金融庁長官から業務の全部又は一部の停止命令等を含む様々な命令を受けることとなります。当行グループの自己資本比率に影響を与える主な要因として以下のものがあります。

- ・不良債権処理額の増加による与信関連費用の増加
- ・株価の下落、市場金利の上昇
- ・繰延税金資産の取崩し
- ・自己資本比率の基準及び算定方法の変更
- ・既調達劣後債務を同等の条件の劣後債務に借り換えることの困難性
- ・本項記載のその他の不利益な展開

(15)情報漏洩に関するリスク

当行グループでは、膨大な顧客情報を保有しているため、情報管理に関する内部管理体制の整備により、情報資産の厳正な管理に努めております。しかしながら、顧客情報や経営情報などの漏洩、紛失、改ざん、不正利用等が発生し、当行グループの信用低下等が生じた場合、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(16)退職給付債務に関するリスク

当行グループの退職給付費用及び債務は、割引率等数理計算上で設定される前提条件に基づき算出しております。これらの前提条件が変更された場合、又は実際の年金資産の時価が下落した場合、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(17)固定資産減損に関するリスク

今後の経済環境の動向や不動産価格の変動等により、当行グループが所有する固定資産に減損処理に伴う損失が発生し、当行グループの経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(18)外的要因(テロ等)に関するリスク

テロ等外部要因によるシステムや社会インフラの大規模な障害発生等及び感染症(新型インフルエンザ等)の流行等により、当行グループの業務の一部が不全となった場合、当行グループの経営成績や業務遂行に悪影響を及ぼす可能性があります。

(19)訴訟等のリスク

当行グループは事業活動を行う上で、会社法、金融商品取引法、銀行法等の法令諸規制を受けるほか、各種取引上の契約を締結しております。当行グループはこれら法令諸規制や契約内容が遵守されるよう法務リスク管理等を行っておりますが、法令解釈の相違、法令手続きの不備により法令諸規制や契約内容を遵守できなかった場合には、当行グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(20)内部統制の構築等に関するリスク

当行グループは、池田泉州ホールディングスグループの一員として金融商品取引法や会社法等に基づく内部統制に関する体制の構築・維持・運営に努めておりますが、予期しない問題が発生した場合等において内部統制について開示すべき重要な不備が存在する等の場合には、当行グループの財政状態及び経営成績並びに当行親会社の株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

(1) 当行親会社との経営管理契約締結について

当行は、当行の完全親会社である株式会社池田泉州ホールディングスとの間で同社が当行に対して行う経営管理に関して、平成21年10月1日付で「経営管理契約書」を締結しております。

(2) 当行及び泉州銀行と株式会社三菱東京UFJ銀行との間の当行親会社の議決権に関する契約

当行グループは、BTMU及びMUF Gとの親密な関係を今後も継続してまいります。当行親会社の議決権について、地域金融機関としての経営の独立性を高めるため、本件統合に伴い当行、泉州銀行とBTMUは以下の合意をしております。

- 1 BTMUは、当行及び泉州銀行に対して、平成22年3月31日までに、() MUF Gグループ(BTMU及びBTMU以外のMUF Gの子会社並びにその緊密者を併せたものをいいます。以下同じ。)の保有する当行親会社の議決権株式に係る議決権が、合計して、当行親会社の総議決権の20%に実務上可能な限り近い値となること、() BTMU、MUF G及びMUF Gの子会社の保有する当行親会社の議決権株式に係る議決権が、合計して、当行親会社の総議決権の15%未満となること、() MUF Gの子会社の保有する当行親会社の議決権株式に係る議決権が、それぞれ単体で、当行親会社の総議決権の5%以下となること、() BTMUの保有する当行親会社の議決権株式に係る議決権が、単体で、当行親会社の総議決権の5%以下となることを確約しております。
- 2 上記議決権割合の可及的速やかな達成に向けて、BTMUは、その保有する当行親会社の普通株式のうち、当行親会社の総議決権の3分の1を超える部分に対応する株式について、株式相場の状況や株式相場への影響を考慮の上、平成22年3月31日までに、MUF Gグループ以外の者への売却処分を完了することができるよう最大限努力する義務を負っております。

3 B T M Uは、上記議決権割合を可及的速やかに達成するために、法令の許容する限度において、その保有する当行親会社の普通株式につき、平成22年3月31日までに、株式処分信託を設定するほか、売却処分をするために必要性が高いと合理的に認められる場合には、信託を解除して、他の売却処分を行うことがあります。上記株式処分信託のうち、B T M Uの保有する当行親会社の普通株式の、当行親会社の総議決権の20%を超える部分に対応する株式に係る信託については、B T M Uは、その議決権その他株主としての権利の行使に係る指図を一切行わず、その処分及び議決権の行使その他の運用に関する指図権の行使を一定の投資運用業者に対して一任することとし、当該投資運用業者は、その運用する資産に一般的に適用されるものとして公表している議決権行使の基本方針に従って議決権を行使することとされています。なお、B T M Uは、本3に定める期限までに所定の株式処分信託の設定を完了すれば足り、同期限までに株式処分信託に基づく当行親会社の普通株式の売却が完了することまでは要しないものとされています。

4 更に、B T M Uは、当行親会社の企業価値を高めるべく協力し、独立性をより実質的なものとするため、当行及び泉州銀行に対して、平成24年9月30日までに、遅くとも平成26年9月30日までの可能な限り早い機会に、当行親会社の議決権に関連して、() M U F Gグループが保有する議決権株式に係る議決権の割合が、合計して、当行親会社の総議決権の15%未満となるようにすること、() B T M U、M U F G及びM U F Gの子会社の保有する議決権株式に係る議決権が、合計して、当行親会社の総議決権の10%未満となること、() M U F Gの子会社の保有する議決権株式に係る議決権が、それぞれ単体で、当行親会社の総議決権の5%以下となること、() B T M Uの保有する議決権株式に係る議決権が、単体で、当行親会社の総議決権の5%以下となること、() 当行親会社がB T M U及びM U F Gの持分法適用会社ではなくなる(但し、当行親会社の定款第16条の定めにより、第一種優先株式の議決権が発生している場合には、その議決権が発生していないと仮定したときに、持分法適用会社でなくなる状況とすれば足り、)を確約しております。

6 【研究開発活動】

該当ありません。

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループ(当行及び連結子会社)が判断したものであります。

(1) 経営成績の分析

連結粗利益

当連結会計年度の連結粗利益については、その他業務利益が6億69百万円増加しましたが、資金利益及び役務取引等利益が、それぞれ31億35百万円、10億60百万円減少したことから、前連結会計年度比35億26百万円減少して、813億86百万円となりました。

イ 資金利益

当連結会計年度の資金利益については、預金利息及び譲渡性預金利息などの資金調達費用が前連結会計年度比22億35百万円減少しましたが、貸出金利息及び有価証券利息配当金などの資金運用収益も前連結会計年度比53億71百万円減少したことから、前連結会計年度比31億35百万円減少して、601億46百万円となりました。

ロ 役務取引等利益

当連結会計年度の役務取引等利益については、役務取引等費用が1億3百万円減少しましたが、保証業務などを中心に役務取引等収益も前連結会計年度比11億63百万円減少したことから、前連結会計年度比10億60百万円減少して、100億84百万円となりました。

ハ その他業務利益

当連結会計年度のおの他業務利益については、金融派生商品収益が前連結会計年度比5億15百万円増加したことを主因として、前連結会計年度比6億69百万円増加して、111億54百万円となりました。

経常利益

当連結会計年度の経常利益については、連結粗利益が前連結会計年度比35億26百万円減少して、813億86百万円となりましたが、営業経費も前連結会計年度比7億11百万円減少して、555億67百万円となりました。また、株式等関係損益は前連結会計年度比11億30百万円改善して、6億10百万円の損失となり、不良債権処理費用も前連結会計年度比56億12百万円減少して、121億89百万円となったことなどから、前連結会計年度比33億11百万円増加して、107億92百万円となりました。

当期純利益

当連結会計年度の当期純利益については、経常利益が前連結会計年度比33億11百万円増加して、107億92百万円となりましたが、法人税減税に関する法律等の公布に伴う法定実効税率低下等により、繰延税金資産を60億75百万円取崩したことから、前連結会計年度比38億82百万円減少して、37億70百万円となりました。

主要損益の状況

	前連結会計年度(A) (百万円)	当連結会計年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
連結粗利益	84,912	81,386	3,526
資金利益	63,281	60,146	3,135
役務取引等利益	11,144	10,084	1,060
その他業務利益	10,485	11,154	669
営業経費()	56,278	55,567	711
不良債権処理費用()	17,801	12,189	5,612
株式等関係損益	1,740	610	1,130
持分法による投資損益	155	38	193
その他	1,766	2,187	421
経常利益	7,481	10,792	3,311
特別損益	1,466	186	1,652
うち償却債権取立益	1,863		1,863
税金等調整前当期純利益	8,947	10,606	1,659
法人税等合計()	1,217	6,686	5,469
法人税、住民税及び事業税()	343	611	268
法人税等調整額()	874	6,075	5,201
少数株主損益調整前当期純利益	7,729	3,919	3,810
少数株主利益()	77	148	71
当期純利益	7,652	3,770	3,882
与信関連費用 -	15,937	12,189	3,748

連結粗利益 = (資金運用収益 - 資金調達費用) + (役務取引等収益 - 役務取引等費用)
+ (その他業務収益 - その他業務費用)

不良債権処理費用

当連結会計年度の不良債権処理費用(一般貸倒引当金繰入額含む)は、前連結会計年度比56億12百万円減少して、121億89百万円となりました。

	前連結会計年度(A) (百万円)	当連結会計年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
不良債権処理費用	17,801	12,189	5,612
うち貸出金償却()	11,952	5,504	6,448
うち個別貸倒引当金繰入額()	3,036	4,694	1,658
うち一般貸倒引当金繰入額()	1,089	1,985	896
うち償却債権取立益		1,321	1,321

株式等関係損益

当連結会計年度の株式等売却損益は、前連結会計年度比5億13百万円改善して、1億48百万円の損失となりました。また、株式等償却は、前連結会計年度比6億17百万円減少して、4億62百万円となりました。

この結果、当連結会計年度の株式等関係損益は、前連結会計年度比11億30百万円増加して、6億10百万円の損失となりました。

	前連結会計年度(A) (百万円)	当連結会計年度(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
株式等関係損益	1,740	610	1,130
株式等売却益	506	305	201
株式等売却損()	1,168	454	714
株式等償却()	1,079	462	617

(2) 財政状態の分析

預金残高

当連結会計年度末の預金残高は、銀行業務において個人預金・法人預金とも増加したことを主因として、前連結会計年度末比463億円増加して、4兆3,956億円となりました。

	前連結会計年度末(A) (百万円)	当連結会計年度末(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
預金	4,349,369	4,395,696	46,327
うち個人預金	3,562,663	3,566,886	4,223

貸出金残高

当連結会計年度末の貸出金残高は、銀行業務において住宅ローンを中心とした個人ローンが減少しましたが、事業性貸出金が増加したことを主因として、前連結会計年度末比151億円増加して、3兆5,161億円となりました。

	前連結会計年度末(A) (百万円)	当連結会計年度末(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
貸出金	3,501,016	3,516,142	15,126
うち住宅ローン	1,753,899	1,720,255	33,644

有価証券残高

当連結会計年度末の有価証券残高は、銀行業務において国債並びに外国証券が増加したことを主因として、前連結会計年度末比1,226億円増加して、1兆1,999億円となりました。

	前連結会計年度末(A) (百万円)	当連結会計年度末(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
有価証券	1,077,342	1,199,965	122,623
国債	347,558	398,381	50,823
地方債	84,323	77,972	6,351
社債	210,792	229,198	18,406
株式	63,105	62,283	822
その他の証券	371,561	432,129	60,568

金融再生法開示債権残高(単体ベース)

当事業年度末の金融再生法開示債権残高は、前事業年度末比17億33百万円増加して、647億42百万円となり、総与信に占める割合は、前事業年度末比0.05%増加して、1.81%となりました。

	前事業年度末(A) (百万円)	当事業年度末(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	13,983	14,079	96
危険債権	41,565	43,209	1,644
要管理債権	7,460	7,452	8
小計	63,009	64,742	1,733
正常債権	3,504,752	3,508,278	3,526
総与信	3,567,761	3,573,021	5,260

比率	/	1.76%	1.81%	0.05%
----	---	-------	-------	-------

なお、貸倒引当金と担保保証等による保全率は、前事業年度末比3.84%低下して、88.12%となりました。

保全状況

	前事業年度末(A) (百万円)	当事業年度末(B) (百万円)	増減(B) - (A) (百万円)	
保全額	57,945	57,056	889	
貸倒引当金	12,743	14,858	2,115	
担保保証等	45,201	42,198	3,003	
保全率	/	91.96%	88.12%	3.84%

自己資本比率(国内基準)

基本的項目については、親会社である株式会社池田泉州ホールディングスに対して、その他資本剰余金からの配当104億28百万円を行ったことを主因として、前連結会計年度末比122億77百万円減少して、1,641億45百万円となりました。

補完的項目については、劣後特約付社債を300億円償還しましたが、劣後特約付借入金を100億円調達したこと、並びに劣後特約付社債を350億円発行したことを主因として、前連結会計年度末比148億71百万円増加して、997億96百万円となりました。

この結果、自己資本は前連結会計年度末比26億35百万円増加して、2,626億8百万円となりました。

一方、リスク・アセット等は、前連結会計年度末比206億円減少して、2兆4,474億円となりました。

以上の結果、当連結会計年度末の連結自己資本比率は、前連結会計年度末比0.19%上昇して、10.72%となりました。

(連結)

	前連結会計年度末(A) (百万円)	当連結会計年度末(B) (百万円)	増減(B)-(A) (百万円)
基本的項目(Tier1)	176,422	164,145	12,277
補完的項目(Tier2)	84,925	99,796	14,871
一般貸倒引当金	31,213	33,192	1,979
負債性資本調達手段等	69,500	84,500	15,000
うち永久劣後債務	15,000	15,000	
うち期限付劣後債務	54,500	69,500	15,000
補完的項目不算入額()	15,788	17,895	2,107
控除項目	1,374	1,334	40
自己資本 + -	259,973	262,608	2,635
リスク・アセット等	2,468,081	2,447,465	20,616
自己資本比率	10.53%	10.72%	0.19%

(単体)

	前事業年度末(A) (百万円)	当事業年度末(B) (百万円)	増減(B)-(A) (百万円)
基本的項目(Tier1)	173,827	159,865	13,962
補完的項目(Tier2)	84,755	99,647	14,892
一般貸倒引当金	22,197	24,607	2,410
負債性資本調達手段等	69,500	84,500	15,000
うち永久劣後債務	15,000	15,000	
うち期限付劣後債務	54,500	69,500	15,000
補完的項目不算入額()	6,942	9,460	2,518
控除項目	1,101	1,099	2
自己資本 + -	257,481	258,413	932
リスク・アセット等	2,440,800	2,423,616	17,184
自己資本比率	10.54%	10.66%	0.12%

繰延税金資産

当連結会計年度末の繰延税金資産は、法人税減税に関する法律等の公布に伴う法定実効税率低下等により、前連結会計年度末比57億88百万円減少し、338億17百万円となりました。一方、繰延税金負債は、前連結会計年度末比3億63百万円増加し、9億89百万円となりました。

この結果、繰延税金資産(純額)は、前連結会計年度末比61億51百万円減少して、328億28百万円となりました。

なお、自己資本における基本的項目に占める割合は、基本的項目が前連結会計年度末比122億77百万円減少して、1,641億45百万円となったことから、前連結会計年度末比2.10%低下し、19.99%となりました。

	前連結会計年度末(A) (百万円)	当連結会計年度末(B) (百万円)	増減(B)-(A) (百万円)
繰延税金資産(純額) (-)	38,979	32,828	6,151
繰延税金資産	39,605	33,817	5,788
繰延税金負債	626	989	363
自己資本における基本的項目	176,422	164,145	12,277
基本的項目に占める割合 /	22.09%	19.99%	2.10%

(3) キャッシュ・フローの状況の分析

現金及び現金同等物の当連結会計年度末残高は、前連結会計年度末比103億39百万円減少して、1,309億96百万円となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

前連結会計年度は、預金の増加及びコールローンの減少による収入が1,024億1百万円ありましたが、株式会社泉州銀行との合併により引き継いだ譲渡性預金、コールマネー等及び借入金、1,104億70百万円減少したこと、並びに貸出金の増加及び債券貸借取引受入担保金の減少による支出が1,350億33百万円あったことから、1,141億5百万円の支出となりました。当連結会計年度は、譲渡性預金の減少及び貸出金並びにコールローン等の増加による支出が205億7百万円ありましたが、預金、債券貸借取引受入担保金並びに借入金(劣後特約付借入金を除く)の増加による収入が1,243億97百万円あったことから、前連結会計年度比2,295億79百万円増加し、1,154億74百万円の収入となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

前連結会計年度は、有価証券の売却並びに償還による収入1兆2,586億1百万円が、有価証券の取得による支出1兆1,110億68百万円を上回ったことから、1,401億69百万円の収入となりました。当連結会計年度は、有価証券の取得による支出1兆6,506億19百万円が、有価証券の売却及び償還による収入1兆5,347億86百万円を上回ったことから、前連結会計年度比2,644億28百万円減少し、1,242億59百万円の支出となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

前連結会計年度は、配当金の支払による支出が57億63百万円ありましたが、劣後特約付社債及び新株予約権付社債の償還による収入が150億円あったことなどから、92億36百万円の収入となりました。当連結会計年度は、劣後特約付借入れによる収入100億円並びに劣後特約付社債及び新株予約権付社債の発行による収入が350億円ありましたが、配当金の支払による支出が167億22百万円あり、劣後特約付社債及び新株予約権付社債の償還による支出が300億円あったことから、前連結会計年度比109億58百万円減少し、17億22百万円の支出となりました。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。そのため、事業の種類別の設備投資等の概要を記載しております。

当行及び連結子会社では、主にお客さまの利便性向上と営業力強化のために、全体で84億65百万円の設備投資を行いました。

銀行業務部門では、システム統合に向けたソフトウェアの取得並びに店舗の改修・設備更新などを行いました結果、設備投資額は80億74百万円となりました。

なお、リース業務部門、信用保証業務部門、クレジットカード業務部門及びその他業務部門では、重要な設備投資はありません。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。なお、当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。そのため、事業の種類別の設備の状況を記載しております。

銀行業務

平成24年3月31日現在

会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物 帳簿価額 (百万円)	その他の有 形固定資産 帳簿価額 (百万円)	リース資産 帳簿価額 (百万円)	合計 帳簿価額 (百万円)	従業員数 (人)
				面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					
当行	大阪梅田本部	大阪市北区	店舗 事務所	(889) 889		2,432	353	11	2,796	403 (26)
	梅田支店 ほか1店	大阪市北区	店舗			69	72	0	142	39 (7)
	大阪支店 ほか3店	大阪市中央区	店舗			219	130	26	376	82 (6)
	大阪西支店	大阪市西区	店舗			7	7		15	17 ()
	淡路支店 ほか2店	大阪市東淀川区	店舗	344	1	74	52	0	128	53 (6)
	大宮町支店	大阪市旭区	店舗	555	52	41	9	0	103	14 (2)
	新大阪支店	大阪市淀川区	店舗			7	19		27	19 ()
	城東支店	大阪市城東区	店舗			25	14	11	50	27 (5)
	昭和町支店	大阪市阿倍野区	店舗			35	25	4	65	28 (1)
	帝塚山支店 ほか1店	大阪市住吉区	店舗	743	64	97	41	7	210	25 (4)
	駒川町支店	大阪市東住吉区	店舗	360	66	53	14	2	137	22 (2)
	住之江支店	大阪市住之江区	店舗			18	12	3	35	11 (1)
	池田営業部 ほか4店	大阪府池田市	店舗 事務所	5,473	1,592	752	316	8	2,669	99 (32)
	箕面支店 ほか2店	大阪府箕面市	店舗	1,154	101	160	50		313	50 (12)

会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物 帳簿価額 (百万円)	その他の有 形固定資産 帳簿価額 (百万円)	リース資産 帳簿価額 (百万円)	合計 帳簿価額 (百万円)	従業員数 (人)
				面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					
当行	能勢支店	大阪府豊能郡能勢町	店舗	(7) 1,093	20	51	16		88	9 (3)
	ときわ台支店 ほか1店	大阪府豊能郡豊能町	店舗	1,149	102	54	27		185	13 (6)
	豊中支店 ほか11店	大阪府豊中市	店舗	2,499	723	411	156	2	1,294	174 (36)
	摂津支店 ほか1店	大阪府摂津市	店舗			118	35		153	26 (3)
	吹田支店 ほか5店	大阪府吹田市	店舗	364	222	319	131		672	78 (18)
	彩都支店	大阪府茨木市	店舗	1,071	220	133	46		400	7 (2)
	富田支店	大阪府高槻市	店舗	777	150	97	15		263	16 (2)
	枚方北支店 ほか1店	大阪府枚方市	店舗	(6) 6		79	44	6	131	28 (7)
	交野支店	大阪府交野市	店舗	418	290	43	23	6	364	7 (4)
	大東支店 ほか1店	大阪府大東市	店舗	1,048	234	82	43	4	365	28 (7)
	東大阪中央支 店ほか1店	大阪府東大阪市	店舗			55	47	2	106	40 (2)
	高安支店 ほか1店	大阪府八尾市	店舗	357	79	55	26	7	168	35 (6)
	羽曳野支店	大阪府羽曳野市	店舗	(5) 402	28	40	11	6	86	11 (4)
	松原支店	大阪府松原市	店舗	(23) 578	34	47	10	0	92	16 (2)
	藤井寺支店	大阪府藤井寺市	店舗			20	15	1	37	24 (5)
	金剛支店 ほか1店	大阪府富田林市	店舗			41	20	6	68	17 (6)
	堺支店 ほか1店	堺市堺区	店舗	728	55	150	33	16	255	45 (5)
	初芝支店 ほか2店	堺市東区	店舗	1,141	299	163	74	12	550	40 (12)
	鳳支店 ほか3店	堺市西区	店舗	(103) 2,059	181	291	70	16	560	52 (18)
	泉ヶ丘支店	堺市南区	店舗			37	22	11	71	14 (6)
	堺市駅前支店 ほか2店	堺市北区	店舗	(6) 501	6	122	58	17	204	30 (11)
	東山支店	堺市中区	店舗	375	61	29	10	4	106	9 (1)
	高石支店	大阪府高石市	店舗			20	28	12	61	22 (10)
	泉大津支店	大阪府泉大津市	店舗	(16) 915	152	60	24	16	253	16 (4)
	和泉支店 ほか3店	大阪府和泉市	店舗	(36) 2,548	534	456	115	40	1,147	67 (28)
	忠岡支店	大阪府泉北郡忠岡町	店舗	(332) 332		38	21	12	72	20 (4)
	泉州営業部 ほか3店	大阪府岸和田市	店舗 事務所	(688) 4,158	759	528	504	49	1,842	115 (51)
	貝塚支店 ほか1店	大阪府貝塚市	店舗	(22) 22		81	52	17	151	69 (39)
	泉佐野支店 ほか2店	大阪府泉佐野市	店舗	(466) 1,466	116	178	68	18	382	61 (21)
	泉南支店 ほか2店	大阪府泉南市	店舗	(35) 1,500	174	182	57	10	424	34 (10)
阪南支店 ほか1店	大阪府阪南市	店舗	(509) 909	1	229	62	12	305	29 (8)	

	会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物 帳簿価額 (百万円)	その他の有 形固定資産 帳簿価額 (百万円)	リース資産 帳簿価額 (百万円)	合計		従業員数 (人)
					面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)				帳簿価額 (百万円)	帳簿価額 (百万円)	
当行		熊取支店	大阪府 泉南郡熊取町	店舗	(18) 660	207	173	18	8	408	16 (4)	
		田尻支店	大阪府 泉南郡田尻町	店舗	(390) 390		70	9	3	83	6 (5)	
		岬町支店	大阪府 泉南郡岬町	店舗	(9) 9		18	10	3	32	10 (3)	
		神戸支店	神戸市中央区	店舗			37	11		48	17 (1)	
		六甲支店	神戸市灘区	店舗			52	23		76	14 (3)	
		芦屋支店	兵庫県芦屋市	店舗	(473) 473		196	63		259	12 (3)	
		武庫之荘支店 ほか2店	兵庫県尼崎市	店舗	934	287	235	39		562	38 (10)	
		西宮北口支店 ほか3店	兵庫県西宮市	店舗	(1,666) 2,235	35	431	198		664	59 (10)	
		伊丹支店 ほか1店	兵庫県伊丹市	店舗	386	28	109	28		166	29 (5)	
		宝塚支店 ほか6店	兵庫県宝塚市	店舗	940	399	462	144	0	1,007	89 (27)	
		川西支店 ほか5店	兵庫県川西市	店舗	(10) 1,012	113	188	70	0	373	89 (36)	
		日生中央支店	兵庫県 川辺郡猪名川町	店舗			27	16		44	15 (4)	
		三田支店 ほか2店	兵庫県三田市	店舗	117	59	289	46		396	28 (10)	
		京都支店	京都市中京区	店舗			140	56		197	14 (1)	
		和歌山支店	和歌山県 和歌山市	店舗			18	14	1	34	21 (3)	
		東京支店 ほか1店	東京都千代田区	店舗			12	15	0	28	18 (1)	
		情報システム センター	兵庫県三田市	事務セン ター	25,846	3,515	2,766	729	0	7,011	28 (38)	
		システムセン ター	大阪府泉佐野市	システム センター	6,035	2,514	1,436	113	138	4,203	4 (1)	
		大阪事務集中 センターほか	大阪府中央区	事務セン ター・事 務所	(608) 608		36	63	3	103	83 (17)	
		堺事務集中 センター	堺市堺区	事務集中 センター	1,963	116	219	66	3	406	47 (1)	
	京阪寝屋川住 宅ローンセン ター	大阪府寝屋川市	住宅ロー ンセン ター			0	1	0	2	3 (3)		
	社宅・寮ほか	大阪府池田市ほか	社宅・寮	(3,144) 10,426	2,262	989	76	13	3,342	23 (15)		

リース業務

	会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物 帳簿価額 (百万円)	その他の有 形固定資産 帳簿価額 (百万円)	リース資産 帳簿価額 (百万円)	合計		従業員数 (人)
					面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)				帳簿価額 (百万円)	帳簿価額 (百万円)	
連結 子会社	池田泉州リ ース株式会社	本社	大阪府中央区	事務所			0	3		3	14 (3)	
		泉州支社	大阪府岸和田市	事務所			2	2		5	5 (1)	
		堺支店	堺市堺区	事務所			2	1		4	4 (1)	
	泉銀総合リ ース株式会社	本社	大阪府岸和田市	事務所			4	4		8	11 (2)	

信用保証業務

	会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物	その他の有 形固定資産	リース資産	合計	従業員数 (人)
					面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					
連結 子会社	池田泉州信用 保証株式会社	本社	大阪府池田市	事務所				1		1	2 (3)
		淀屋橋事 務所	大阪市中央区	事務所			12	18		31	25 (13)
	近畿信用保証 株式会社	本社	大阪府貝塚市	事務所			8	2		10	1 (11)
		淀屋橋事 務所	大阪市中央区	事務所			5	13		18	11 (22)

クレジットカード業務

	会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物	その他の有 形固定資産	リース資産	合計	従業員数 (人)
					面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					
連結 子会社	株式会社 ジェーアイ	本社	大阪府池田市	事務所				1	0	2	19 ()
	株式会社 ディーアイ	本社	大阪府池田市	事務所				1		1	3 (2)
	株式会社 ブイアイ	本社	大阪府池田市	事務所				2		2	5 (1)
	株式会社 泉州カード	本社	大阪府岸和田市	事務所			3	1		4	10 (8)

その他業務

	会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物	その他の有 形固定資産	リース資産	合計	従業員数 (人)
					面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					
連結 子会社	池田泉州キャ ピタル株式会 社	本社	大阪市北区	事務所				0	0	1	2 (3)
	池田泉州ビジ ネスサービス 株式会社	本社 ほか	大阪市北区ほか	事務所			0	25		25	90 (109)
	池田泉州オ フィスサービ ス株式会社	本社	大阪府池田市	事務所							(203)
	池田泉州モー ゲージサービ ス株式会社	本社	大阪府箕面市	事務所				1		1	12 (2)
	ハイ・プレー ン株式会社	本社	大阪府池田市ほ か	事務所			0	16		16	46 (6)
	エス・アイ・ ソフト株式会 社	本社	大阪府泉佐野市	事務所			0	0		1	24 (4)
	池田泉州投資 顧問株式会 社	本社	大阪市中央区	事務所			0	2		2	4 (1)

- (注) 1 土地の面積欄の()内は、借地の面積(内書き)であり、その年間賃借料は建物も含め2,514百万円であります。
2 従業員数の()内は、臨時従業員数(外書き)であります。
3 その他の有形固定資産は、事務機械2,843百万円、その他2,422百万円であります。
4 当行の店舗外現金自動設備186か所は上記に含めて記載しております。
5 上記には、連結会社以外に貸与している土地12百万円(768㎡)及び建物690百万円が含まれております。
6 上記には、リース業務を営む連結子会社からのリース資産742百万円が含まれております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当行及び連結子会社の設備投資については、店舗政策、利益に対する投資割合等を総合的に勘案して計画しております。

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、改修等に係る投資予定金額は68億16百万円であり、その所要資金についてはほぼ全額自己資金にて充当する予定であります。

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

なお、当行グループは、「銀行業」の単一セグメントであるため、セグメント情報を記載しておりません。そのため、事業の種類別の計画を記載しております。

(1) 新設、改修

銀行業務

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	事業(部門) の別	設備の内容	投資予定金額 (百万円)		資金 調達方法	着手年月	完了 予定年月
						総額	既支払額			
当行	住吉御影支店	神戸市 東灘区	新設	銀行業務	店舗	1,168	703	自己資金	平成23年 1月	平成24年 7月
	津久野 特別出張所	堺市西区	移転	銀行業務	店舗	354		自己資金	平成23年 9月	平成24年 7月
	阿倍野支店	大阪市 阿倍野区	新設	銀行業務	店舗	319		自己資金	平成24年 4月	平成26年 3月
	東京支店 神田支店	東京都 千代田区	統合	銀行業務	店舗	30		自己資金	平成24年 4月	平成24年 6月
	千里中央支店 千里中央駅前 支店	大阪府 豊中市	統合	銀行業務	店舗	50		自己資金	平成24年 4月	平成24年 6月
	淡路支店	大阪市 東淀川区	移転	銀行業務	店舗	310		自己資金	平成24年 5月	平成25年 1月
	その他		新店・新設 改修・改装	銀行業務	店舗他	3,915		自己資金	平成24年 4月	平成25年 3月
	事務機械等		更新	銀行業務		670		自己資金	平成24年 4月	平成25年 3月
	合計					6,816	703			

(注) 上記設備計画の記載金額には、消費税及び地方消費税を含んでおりません。

(2) 除却

銀行業務

会社名	店舗名その他	所在地	事業(部門)の別	設備の内容	期末帳簿価額 (百万円)	除却の予定時期
当行	千里中央駅前支店	大阪府豊中市	銀行業務	店舗	0	平成24年6月

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	70,000,000
計	70,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成24年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成24年6月29日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	47,837,088	同左		(注)
計	47,837,088	同左		

(注) 完全議決権株式であり、剰余金の配当に関する請求権その他の権利内容に何ら限定のない、当行における標準となる株式です。

普通株式は振替株式であり、単元株式数は100株です。

(2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成19年4月1日～ 平成20年3月27日(注1)	198	25,927,437	0	49,365	0	33,126
平成20年3月28日(注2)	6,000,000	31,927,437	15,000	64,365	15,000	48,126
平成20年3月28日(注3)		31,927,437		64,365	48,126	
平成20年6月30日(注4)		31,927,437		64,365	2	2
平成21年3月30日(注5)	6,250,000	38,177,437	12,500	76,865	12,500	12,502
平成21年3月30日(注6)		38,177,437		76,865	12,500	2
平成21年8月14日(注7)		38,177,437	37,234	39,630		2
平成21年9月30日(注8)	38,049	38,139,388		39,630		2
平成22年3月24日(注9)	9,697,700	47,837,088	11,080	50,710	11,080	11,082
平成24年3月30日(注4)		47,837,088		50,710	2,085	13,168

- (注) 1 新株予約権の行使による合計数・額であります。
2 有償第三者割当 発行価格5,000円 資本組入額2,500円 割当先 株式会社三菱東京UFJ銀行
3 平成20年3月24日開催の臨時株主総会における資本準備金減少決議に基づくその他資本剰余金への振替であります。
4 その他資本剰余金からの配当に伴う資本準備金の積立であります。
5 有償第三者割当 発行価格4,000円 資本組入額2,000円 割当先 株式会社オーシー・ファイナンス他11社
6 平成21年2月2日開催の臨時取締役会における資本準備金減少決議に基づくその他資本剰余金への振替であります。
7 平成21年6月26日開催の定時株主総会及び種類株主総会における資本金の額の減少決議に基づく減少であります。
8 会社法第178条の規定に基づく自己株式消却による減少であります。
9 有償株主割当 発行価格2,285.10円 資本組入額 1,142.55円

(6) 【所有者別状況】

平成24年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満 株式の状況 (株)	
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他		計
					個人以外	個人			
株主数 (人)				1				1	
所有株式数 (単元)				478,370				478,370	88
所有株式数 の割合(%)				100.00				100.00	

(7) 【大株主の状況】

平成24年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
株式会社 池田泉州ホールディングス	大阪市北区茶屋町18番14号	47,837,088	100.00
計		47,837,088	100.00

(8) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成24年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)			
完全議決権株式(その他)	普通株式 47,837,000	478,370	
単元未満株式	普通株式 88		1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	47,837,088		
総株主の議決権		478,370	

【自己株式等】

該当事項はありません。

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

3 【配当政策】

当行は、銀行業としての公共性に鑑み、適正な内部留保の充実により、財務体質の健全性を確保するとともに、安定的配当の考え方を維持しつつ、積極的に株主の皆さまに利益を還元していくことを基本方針としております。

当行の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な配当方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当事業年度の剰余金の配当につきましては、平成24年3月30日開催の臨時株主総会決議に基づき1株につき218円の期中配当を実施するとともに、業績の状況や経営環境等を総合的に勘案し、1株につき118円の期末配当を実施することとしております。

また、内部留保資金につきましては、将来の事業発展のための投資や財務体質強化のための原資として活用してまいります。

なお、当行は会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことができる旨を定款で定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金総額(百万円)	1株当たり配当金(円)
平成24年3月30日 臨時株主総会決議	10,428	218
平成24年6月28日 定時株主総会決議	5,644	118

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第86期	第87期	第88期	第89期	第90期
決算年月	平成20年3月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月	平成24年3月
最高(円)	5,770	4,600	4,290		
最低(円)	2,485	2,300	3,420		

(注) 1 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部における株価を記載しております。

2 当行普通株式は、当行が泉州銀行と共同株式移転により株式会社池田泉州ホールディングスを設立したことに伴い、平成21年9月25日に株式会社東京証券取引所市場第一部を上場廃止となっておりますので、最終取引日である平成21年9月24日までの株価について記載しております。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

当行株式は、非上場であるため、該当事項はありません。

5 【役員の状況】

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役頭取 (代表取締役)		藤田 博 久	昭和27年11月 1 日生	昭和51年 4月 池田銀行(現池田泉州銀行)入行 平成10年 5月 同行システム部長 平成12年 5月 同行執行役員 平成15年 6月 同行取締役 平成17年 6月 同行常務取締役 平成21年10月 池田泉州ホールディングス取締役 平成22年 5月 当行常務取締役 平成23年 6月 当行専務取締役 平成24年 6月 池田泉州ホールディングス代表取締役社長(現職) 平成24年 6月 当行代表取締役頭取(現職)	(注) 3	
取締役会長 (代表取締役)		片岡 和 行	昭和27年 5月19日生	昭和51年 4月 三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)入行 平成16年 5月 UFJ銀行(現三菱東京UFJ銀行)企業部(大阪)部長(部付) 平成16年 9月 同行執行役員 平成17年 6月 UFJセントラルリース(現三菱UFJリース)執行役員 平成18年 6月 同社常務執行役員 平成21年 6月 泉州銀行(現池田泉州銀行)顧問 平成21年 6月 同行専務取締役兼専務執行役員 平成21年10月 池田泉州ホールディングス取締役 平成22年 5月 当行専務取締役 平成24年 6月 池田泉州ホールディングス代表取締役会長(現職) 平成24年 6月 当行代表取締役会長(現職)	(注) 3	
専務取締役 (代表取締役)		福地 直 哉	昭和27年 4月22日生	昭和51年 4月 泉州銀行(現池田泉州銀行)入行 平成16年 4月 同行泉佐野ブロック統括店長兼泉佐野支店長 平成19年 6月 同行執行役員 平成19年 6月 同行取締役兼執行役員 平成21年10月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成22年 5月 当行常務取締役 平成22年 6月 池田泉州ホールディングス取締役 平成23年 6月 当行専務取締役 平成24年 6月 池田泉州ホールディングス代表取締役(現職) 平成24年 6月 当行代表取締役専務(現職)	(注) 3	
専務取締役 (代表取締役)	C S本部長 兼アジア チャイナ本 部長兼先進 テクノ本部 長	青柳 茂	昭和27年 9月15日生	昭和51年 4月 池田銀行(現池田泉州銀行)入行 平成12年 4月 同行人事部長 平成12年 5月 同行執行役員 平成15年 6月 同行取締役 平成16年 3月 同行取締役兼常務執行役員 平成17年 6月 同行常務取締役 平成22年 5月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成22年 5月 当行常務取締役 平成23年 6月 当行専務執行役員 平成24年 6月 池田泉州ホールディングス代表取締役(現職) 平成24年 6月 当行代表取締役専務・C S本部長兼アジアチャイナ本部長兼先進テクノ本部長(現職)	(注) 3	
常務取締役		西 隆 史	昭和26年12月 9 日生	昭和51年 4月 泉州銀行(現池田泉州銀行)入行 平成20年 2月 同行国際業務部長 平成20年 6月 同行執行役員 平成21年 6月 同行取締役兼執行役員 平成21年10月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成22年 5月 当行常務取締役(現職) 平成24年 6月 池田泉州ホールディングス取締役(現職)	(注) 3	

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常務取締役	秘書役	久保田 洋	昭和28年8月3日生	昭和52年4月 三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)入行 平成16年1月 亜細亜証券印刷(現プロネクサス)入社 平成16年10月 同社大阪支店長 平成17年6月 同社取締役大阪支店長 平成20年6月 池田銀行(現池田泉州銀行)入行 平成21年10月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成22年5月 当行取締役 平成23年6月 当行常務取締役 平成23年7月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成24年6月 池田泉州ホールディングス取締役(現職) 平成24年6月 当行常務取締役秘書役(現職)	(注)3	
常務取締役	融資本部長	田原 彰	昭和31年9月22日生	昭和54年4月 三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)入行 平成21年5月 泉州銀行(現池田泉州銀行)入行 平成21年10月 経営企画部長 池田泉州ホールディングス企画部 平成22年5月 統括部長 池田泉州ホールディングス執行役員 平成22年5月 当行取締役 平成24年6月 池田泉州ホールディングス取締役秘書役(現職) 平成24年6月 当行常務取締役融資本部長(現職)	(注)3	
取締役	企画部長	鶴川 淳	昭和31年7月19日生	昭和55年4月 池田銀行(現池田泉州銀行)入行 平成18年8月 同行企画調整部長 平成18年11月 同行執行役員 平成22年5月 当行執行役員 平成23年6月 当行取締役 平成24年6月 池田泉州ホールディングス取締役企画部長(現職) 平成24年6月 当行取締役企画部長(現職)	(注)3	
取締役	C S本部大阪東地区本部長	齊藤 昌宏	昭和29年11月25日生	昭和54年4月 泉州銀行(現池田泉州銀行)入行 平成19年1月 同行住宅ローン推進部長 平成21年6月 同行執行役員 平成22年5月 当行常務執行役員 平成22年5月 池田泉州ホールディングス営業企画部長 平成22年6月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成23年7月 当行常務執行役員 平成24年6月 池田泉州ホールディングス取締役(現職) 平成24年6月 当行取締役・C S本部大阪東地区本部長(現職)	(注)3	
取締役	池田営業部長	南地 伸昭	昭和35年7月20日生	昭和59年4月 池田銀行(現池田泉州銀行)入行 平成21年4月 同行企画部長 平成21年5月 同行執行役員 平成21年10月 池田泉州ホールディングスリスク統括部長 平成22年5月 当行執行役員 平成24年6月 池田泉州ホールディングス取締役(現職) 平成24年6月 当行取締役池田営業部長(現職)	(注)3	
取締役(社外) (注)1		長岡 孝	昭和29年3月3日生	昭和51年4月 三菱銀行(現三菱東京UFJ銀行)入行 平成15年5月 東京三菱銀行(現三菱東京UFJ銀行)京都支社長 平成15年6月 同行執行役員 平成18年1月 三菱東京UFJ銀行執行役員 平成18年5月 同行常務執行役員 平成20年4月 三菱UFJフィナンシャル・グループ常務執行役員 平成20年6月 同行常務取締役 平成22年5月 同行専務執行役員 平成23年4月 三菱UFJフィナンシャル・グループ常務執行役員 平成23年6月 同行代表取締役副頭取 平成24年5月 同行代表取締役副頭取西日本駐在(現職) 平成24年6月 池田泉州ホールディングス社外取締役(現職) 平成24年6月 当行社外取締役(現職)	(注)3	

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (社外) (注)1		平松 一夫	昭和22年8月10日生	昭和54年4月 関西学院大学商学部助教授 昭和60年4月 同大学商学部教授(現職) 平成13年4月 学校法人関西学院理事(現職) 平成14年4月 関西学院大学学長 平成20年6月 住友電気工業社外取締役(現職) 平成21年4月 学校法人関西学院評議員(現職) 平成22年6月 大同生命保険社外監査役(現職) 平成22年6月 新明和工業社外取締役(現職) 平成23年6月 池田泉州ホールディングス社外取締役(現職) 平成23年6月 当行社外取締役(現職)	(注)3	
監査役 (常勤)		梶田 博信	昭和28年6月2日生	昭和53年4月 池田銀行(現池田泉州銀行)入行 平成12年8月 同行市場金融部長 平成16年6月 同行執行役員 平成18年6月 同行取締役 平成20年6月 同行常務執行役員 平成21年10月 池田泉州ホールディングス執行役員 平成22年5月 当行専務執行役員 平成23年5月 当行監査役(現職)	(注)5	
監査役 (常勤)		上木 昌憲	昭和28年9月15日生	昭和51年4月 泉州銀行(現池田泉州銀行)入行 平成16年6月 同行東京支店長兼経営企画部東京事務所長 平成21年6月 同行監査役 平成22年5月 当行監査役(現職)	(注)4	
監査役 (社外) (注)2		大橋 太朗	昭和14年8月31日生	昭和37年4月 京阪神急行電鉄入社 (昭和48年4月1日に阪急電鉄、平成17年4月1日に阪急ホールディングス 平成18年10月1日に阪急阪神ホールディングスに商号変更) 平成2年6月 同社取締役 平成4年6月 同社常務取締役 平成7年6月 同社専務取締役 平成10年6月 同社代表取締役専務取締役 平成11年6月 同社代表取締役社長 平成15年5月 東宝監査役 平成15年6月 阪急電鉄代表取締役会長 平成16年4月 東京楽天地監査役 平成17年4月 阪急電鉄相談役(現職) 阪急電鉄は平成17年4月1日に会社分割を行い、鉄道事業その他の全ての営業を阪急電鉄分割準備(同日付で阪急電鉄に商号変更)に承継するとともに、商号を阪急ホールディングスへと変更した。 阪急ホールディングスは平成18年10月1日に、商号を阪急阪神ホールディングスへと変更した。 東京楽天地取締役(現職) 平成19年4月 池田銀行(現池田泉州銀行)監査役 平成19年6月 平成22年5月 当行監査役(現職)	(注)6	
監査役 (社外) (注)2		吉田 二郎	昭和9年4月20日生	昭和32年4月 南海電気鉄道入社 昭和56年6月 同社人事部長 昭和60年6月 同社取締役 昭和62年6月 同社常務取締役 平成3年6月 同社専務取締役 平成8年6月 同社代表取締役副社長 平成11年6月 同社代表取締役社長 平成13年6月 同社代表取締役会長 平成17年6月 同社相談役 平成21年7月 同社特別顧問 平成23年6月 同社社友(現職) 平成24年1月 当行監査役(現職)	(注)7	
計						

- (注) 1 取締役のうち長岡孝及び平松一夫の2名は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
 2 監査役のうち大橋太郎及び吉田二郎の2名は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
 3 取締役の任期は、平成24年3月期に係る定時株主総会終結の時より、平成25年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 4 任期は、平成22年5月1日より、平成26年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 5 任期は、平成23年5月27日より、平成26年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 6 任期は、平成23年3月期に係る定時株主総会終結の時より、平成27年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 7 任期は、平成24年1月30日より、平成26年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 8 当行は、取締役会の機能の強化及び業務執行の迅速化を図るため、執行役員制度を導入しております。執行役員(取締役を兼務する執行役員を除く)は16名で、下記のとおりであります。

役名	職名	氏名
専務執行役員	プライベートバンキング本部長	内村 昭
専務執行役員	C S 本部大阪中央地区本部長兼大阪梅田営業部長	井角 和博
専務執行役員	C S 本部副本部長兼泉州地区本部長	安田 雅和
専務執行役員	事務システム本部長	小林 弘明
常務執行役員		坂戸 豊
常務執行役員	C S 本部阪神地区本部長	北村 康男
常務執行役員	C S 本部兵庫地区本部長	宮田 典幸
常務執行役員	C S 本部池田地区本部長	辻 二郎
常務執行役員	C S 本部大阪北地区本部長	森 畠 弘和
常務執行役員	C S 本部南大阪地区本部長	横田 武利
常務執行役員	マーケット本部長	野田 隆
常務執行役員	人事部長	川上 晋
執行役員	総務部長	原 智
執行役員	本町支店長兼大阪支店長	峯島 賢行
執行役員	東京支店長兼東京事務所長	井上 基
執行役員	C S 本部泉南地区本部長	須川 直人

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

当行は、池田泉州ホールディングスグループの一員として、地域金融機関グループとしての公共性に鑑み、コーポレート・ガバナンス態勢を適切に整備・運営していくことを経営上の最重要課題の一つとして位置付けております。

この考えのもと、当行では、株主や投資家の皆さまをはじめとして、お取引先や地域の皆さま、あるいは従業員など、全てのステークホルダーから不可欠な存在として信認を得ることを目指し、これを実現するため、地域社会への貢献や経営の健全性と独自性を堅持する旨の経営方針を掲げ、コンプライアンス(法令等遵守)、リスク管理、経営の透明性等を重視した経営を行うことを基本方針としております。

なお、本項においては、別段の記載がない限り、提出日現在の状況を記載しております。

企業統治の体制の概要等

当行は、継続的な企業価値の向上を目指す企業統治体制として、社外取締役の選任と監査役会等との連携により、経営に対する監督機能を強化する体制を採用しております。

具体的には、複雑かつ高度な経営判断が要求される銀行業務等に精通した取締役が代表取締役の業務執行の監督を行い、監査役が重要な会議への出席や重要書類の閲覧等を通じて取締役の職務執行を監査しております。さらに、高度な人格、見識等を備えた社外取締役・社外監査役が取締役会等に出席し、活発な発言を行うことで、企業統治体制を強化する役割を担っております。

なお、当行と社外取締役並びに社外監査役との間で、責任限定契約を締結しております。当該契約による、賠償責任限度額は法令で定める最低限度額であります。

イ 会社の機関の内容

取締役会

取締役会は、12名の取締役（うち社外取締役2名）で構成され、取締役会規定に基づき重要な経営事項を意思決定、報告聴取するとともに、取締役及び執行役員の職務執行の監督を行います。取締役会は原則として毎月1回開催し、監査役の出席のもと、コンプライアンスやリスク管理を重視した意思決定を行います。

監査役会

当行では、監査役制度を採用しております。監査役は4名のうち、半数にあたる2名を社外監査役とすることで、透明性を確保します。各監査役は、監査役会で定めた監査方針・監査計画等に従い、「取締役会」、「経営会議」等重要な会議への出席や重要書類の閲覧等を通じ、取締役の職務執行を監査します。社外監査役には、誠実な人柄、高い見識と能力を有し、それぞれの専門分野についての知識や実務経験が豊富な人材を配置し、多角的な視点から経営上の助言を受けております。

経営会議

業務執行において、よりの確・迅速な経営の意思決定を行うために、取締役会の下に「経営会議」を設置し、取締役会から委譲された権限に基づき経営の重要事項に関する意思決定や報告聴取を行います。経営会議は原則として毎週1回開催し、監査役も出席のもと、コンプライアンスやリスク管理を重視した意思決定を行います。

内部統制、内部管理・内部監査部門

内部統制、内部管理や内部監査部門として、「企画部」「リスク統括部」「監査部」を設置しております。

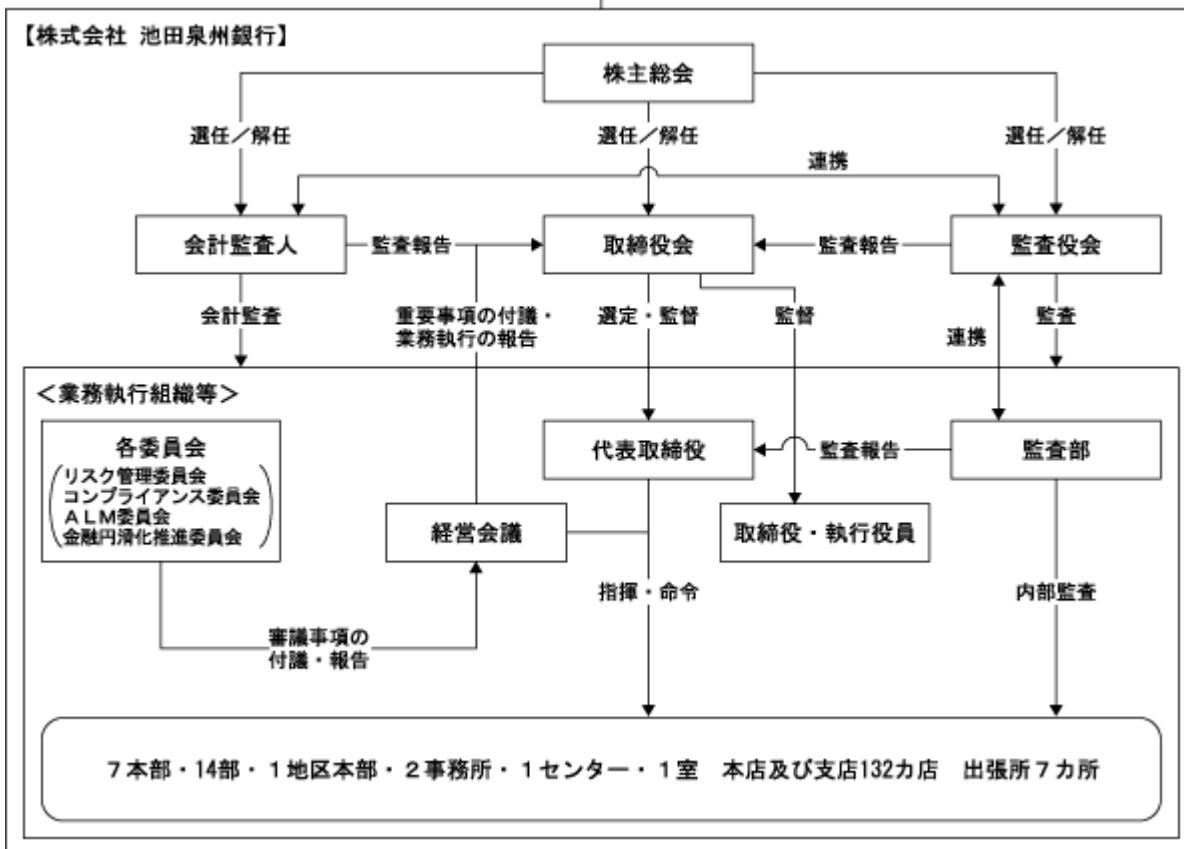
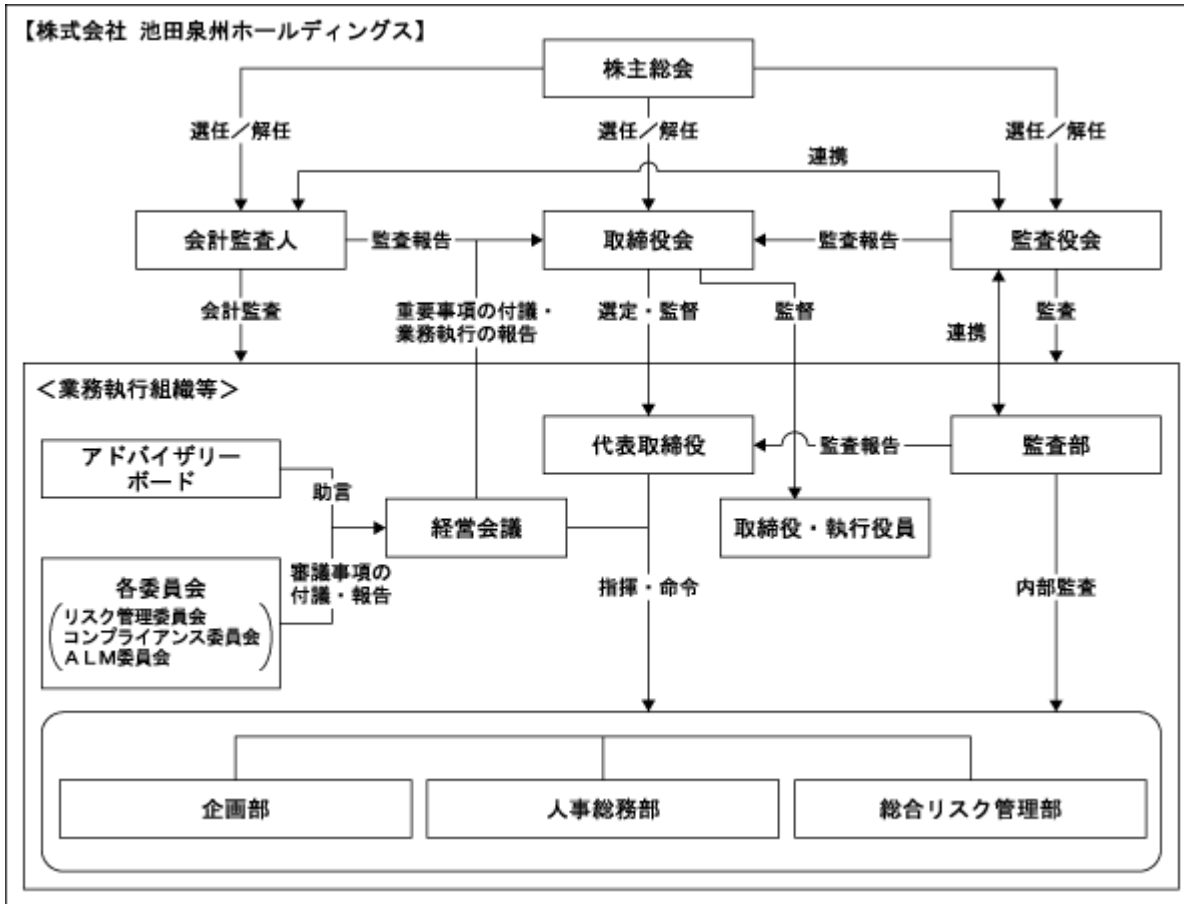
企画部は、会社法ならびに金融商品取引法上の内部統制の統括部署の役割を担います。リスク統括部は、内部管理の要でありますコンプライアンス管理を担当します。コンプライアンスにつきましては、取締役会で承認されたコンプライアンス・プログラムのもと諸施策の企画や進捗管理を行います。さらに、リスク統括部は、リスク管理の統括部署として、金融庁の評定制度等も参考にしつつ、リスク管理体制の定期的な見直しと改善を行います。

一方、監査部は、年度ごとに取締役会で承認された監査計画のもと、監査を実施し業務運営の改善に向け、具体的な提言等を行います。

会計監査人

当行の会計監査業務を執行した公認会計士は、津田多聞、鶴森寿士、伊加井真弓の3名であり、金融商品取引法監査及び会社法監査を行う会計監査人は、新日本有限責任監査法人に所属しております。継続監査年数については、全員7年以内であるため記載を省略しております。

当行の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士13名、その他14名であります。



ロ 内部統制システムに関する基本的な考え方及びその整備状況

当行は、人と人とのふれあいを大切に、誠実で親しみやすく、お客様から最も「信頼される」金融グループを目指し、業務の適正を確保するために必要な体制を以下のような観点で構築しております。

取締役・使用人の職務執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当行では、法令等遵守(コンプライアンス)を経営の最重要課題の一つとして位置づけ、役職員が法令・定款及び社会規範を遵守した行動をとるため、倫理綱領及び行動規範を制定するとともに、コンプライアンス基本規定を定め、コンプライアンス委員会において、全般的な方針や具体的施策などの審議を行います。

また、その徹底を図るため、コンプライアンスを担当する役員を設置するとともに、リスク統括部においてコンプライアンスの取組みを組織横断的に統括し、コンプライアンス・プログラムやコンプライアンス・マニュアルの制定、研修の実施などを通じ、役職員の教育等を行います。

さらに、法令上疑義のある行為等について従業員が直接情報提供を行う手段としてのホットラインを設置・運営いたします。

インサイダー取引未然防止規定に役職員が遵守すべき基本事項を定め、インサイダー取引の未然防止を図ります。

また、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力に対しては毅然とした態度を貫き、取引の介入排除に努めるとともに、金融機関を通じて取引される資金が各種の犯罪やテロに利用される可能性があることに留意し、マネー・ロンダリングの防止に努めます。

さらに、お客さまの保護及び利便性向上を推進し、「お客さま本位の徹底」を実現するため、顧客保護等管理を行います。

取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役会、経営会議、その他委員会等の重要会議について、職務執行の記録として議事録等を作成・保管いたします。

また、取締役を決定者とする決裁文書及び付属書類についても適切に作成・保管いたします。

損失の危険の管理に関する規程その他の体制

経営の健全性の維持と安定した収益確保を図るため、リスク管理基本規定を定め、リスクを信用リスク、市場リスク、資金流動性リスク、オペレーショナルリスクに区分の上、それぞれの所管部を明確にするるとともに、リスク管理委員会を設置し、各リスクのモニタリングを行います。

また、危機管理規定を定め、危機事象の発生に伴う経済的損失及び信用失墜等を最小限に留めるとともに、業務継続及び迅速な通常機能の回復を確保いたします。

取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

取締役会は経営目標を定めるとともに、経営計画を策定し、取締役の職務の執行を効率的に行うため、経営会議を設置いたします。

経営会議は、取締役会で決議した経営の基本方針に基づき、これを執行する上での重要事項を協議、決議する他、取締役会の意思決定に資するため、取締役会付議事項を事前に検討することといたします。

また、取締役の所管する本部及びその権限と責任を明確にするるとともに、ITの活用も図りながら効率的な業務執行体制を構築・維持します。

当行及びそのグループ会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

当行では、子会社・関連会社全社を池田泉州銀行のグループとして一体と考え、当行が適切に主導し、グループ各社が当行との連携を保ちつつ、自社の規模、事業の性質に応じた適切な内部管理体制を構築し、業務の健全かつ適切な運営を行います。

当行は、グループ経営管理として、子会社等から必要な報告を受け、協議する体制を構築します。

監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項並びにその使用人の執行役からの独立性に関する事項

監査役の職務を補助するため、監査役会事務局として監査役スタッフを配置いたします。このスタッフに対する業務執行の指揮命令は監査役会が行うこととし、人事異動、人事評価においても監査役会の意見を尊重するなど、取締役からの独立性を確保いたします。

取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制

取締役及び従業員は、監査役に対して、法定の事項に加え、当行及びそのグループに重大な影響を及ぼす事項、その他必要な事項をすみやかに報告することといたします。

また、これを補完するため、取締役会、経営会議、各種委員会等の重要な会議について、監査役が出席できる体制を構築いたします。

その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査役は、代表取締役、内部監査部署、監査法人との間で意見交換会を開催することといたします。

また、監査役は取締役会、経営会議、各種委員会等の重要な会議に出席し、業務執行上の様々な問題点の把握に努めます。

八 リスク管理体制について

リスク管理の基本的な考え方

金融業務の自由化・高度化・国際化の進展や情報通信技術の著しい進歩などにより、金融機関のビジネスチャンスが拡大する一方で、金融機関の抱えるリスクは、ますます複雑化・多様化しています。

また、銀行が様々な顧客ニーズに応えながら収益を安定的かつ継続的に確保するためには、多様なリスクを適切に把握・評価・管理し、環境の変化に適時・適切に対応することが重要となっています。このような状況の下、当行グループは、リスク管理体制の充実・強化を経営の重要課題として位置づけ、健全性の維持・向上に努めています。

具体的には、リスク管理に関する体制及び諸規定を取締役会で定め、リスクカテゴリー毎の責任部署を明確にするとともに、それらを統括するリスク管理統括部署を設置しています。さらに、経営陣を中心に構成する「リスク管理委員会」ならびに「ALM委員会」を設置し、当行グループのリスクの状況を把握するとともに、課題及び対応方を審議したうえで、それらの事項を取締役会等に付議・報告することにより、経営レベルでの実効性のあるリスク管理体制を確保しています。

また、環境の変化等に伴い新たに発生するリスク等に対しても適時・適切に対応できるよう、グループ戦略を踏まえたリスク管理の行動計画として、半期毎にリスク管理の基本方針を決定し、継続的に見直しを行っています。

なお、リスク管理体制の適切性及び有効性を客観的に検証するため、被監査部署からの独立性を十分に確保した内部監査部門による監査を行い、リスク管理上の課題の把握や改善策の実施等を通じて、業務の健全かつ円滑な運営を図っています。

統合的リスク管理

統合的リスク管理

統合的リスク管理とは、金融機関が直面するリスクに関して、自己資本比率の算定対象に含まれない与信集中リスクや銀行勘定の金利リスク等も含めて、信用リスク、市場リスク、オペレーショナル・リスク等のリスクカテゴリー毎の方法で評価したリスクを統合的に捉え、金融機関の経営体力（自己資本）と対比することにより、適切にリスク管理を行うことをいいます。

当行グループは、リスク管理体制の充実・強化を経営の重要な課題として位置づけ、業務遂行に伴う様々なリスクを可能な限り統一的な尺度で統合的に把握・認識し、リスクに見合った収益の安定的な確保及び適正な資本構成の達成、資源の適正配分等を実現するため、リスク管理統括部署がすべてのリスクを一元的に把握する統合的リスク管理体制を構築しています。

リスク資本管理制度

当行グループは、統合的リスク管理の枠組みの下、リスクの総量を自己資本の一定範囲内にコントロールするため、リスク資本管理制度に基づいて業務運営を実施しています。

具体的には、信用リスク、市場リスク、オペレーショナル・リスクのリスクカテゴリー毎にリスク量を算定したうえで、自己資本（Tier）を配賦原資としたリスク資本配賦を行っています。また、経営として許容可能な範囲内にリスク量が収まるよう継続的にモニタリングを行い、グループ全体の業務の円滑な遂行ならびに健全性の確保に努めています。

バーゼルへの対応

平成19年3月末から本邦での適用が開始された新しい自己資本比率規制（バーゼル）における、自己資本比率の計算について、当行グループでの適用状況は、信用リスクについては標準的手法、オペレーショナル・リスクについては粗利益配分手法であります。

信用リスク管理

信用リスクとは、お取引先の経営状態の悪化などに伴い、貸出金などの利息・元本が回収不能になるリスクをいいます。

当行グループでは、経営方針を踏まえつつ与信行為の具体的な考え方を明示した「クレジットポリシー」を制定し、健全性の確保を第一に取り組んでいます。

具体的には、管理方法を明示した「信用リスク管理規定」に基づき、信用リスク管理部署である融資企画部では、与信集中リスクの状況に加え、業種別・債務者区分別・信用格付区分別等さまざまな角度から与信ポートフォリオの分析・管理を行い、最適なポートフォリオの構築を図るべく、きめ細かな対応を行っています。

個別案件の審査・与信管理につきましては、審査部署（融資部、融資業務部）の、営業推進部署からの独立性を確保するとともに、取締役会等で大口と信先の個別案件や与信方針の検討を行うなど、審査体制の整備・強化を図っています。さらに、住宅ローンに関しては、融資本部内に融資業務部を設置し、住宅ローン債権の管理を行っています。さらに、臨店指導や行員研修の実施を通じて、審査体制の整備・強化に努めています。

また、資産の自己査定の実施状況を監査する担当部署として、監査部内に与信監査グループを設け、資産の健全性の維持・向上に努めています。

市場リスク管理

市場リスクとは、金利、為替、株価等の様々な市場のリスクファクターの変化により、保有する資産・負債の価格が変動し損失を被るリスク（市場リスク）と、市場の混乱や取引の厚みの不足などのために、必要とされる数量を妥当な水準で取引できないことにより損失を被るリスク（市場流動性リスク）をいいます。当行グループでは、経営陣を中心に構成する「リスク管理委員会」ならびに「ALM委員会」を設置し、市場環境の変化に応じた確・迅速な対応策を協議することにより、資産・負債の総合的な管理を行い、安定的かつ継続的な収益の確保に努めています。

資金流動性リスク管理

資金流動性リスクとは、市場の状況や当行グループの財務内容の悪化等を通じて必要な資金が確保できなくなり、資金繰りに支障をきたす場合や、資金の確保に際して通常より高い金利での資金調達を余儀なくされることにより損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、資金の運用・調達状況をきめ細かく把握することを通じて、適切な資金管理を行い、保有資産の流動性の確保や調達手段の多様化を図るなど、資金流動性リスクの管理に万全の体制で臨んでいます。

オペレーショナル・リスク管理

オペレーショナル・リスクとは、銀行の業務遂行の過程や、役職員の活動、システムが不適切であること、または外生的な事象により損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、「オペレーショナル・リスク管理規定」を制定し、オペレーショナル・リスクを、事務リスク、情報資産（システム）リスク、有形資産リスク、人材リスク、法的リスク、評判リスクの6つに分けて管理しています。

また、新たな商品やサービスの開発・提供等を行う場合には、それに伴い発生するリスクを識別・評価し、適切なリスク管理を行っています。このほか、業務を外部委託する場合には、お客さまの情報を適切に管理するとともに、経営の健全性確保に努めています。

事務リスク管理

事務リスクとは、事務処理の間違いや不正、事故等に伴い損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、お客さまに安心して取引を行っていただけるよう、事務処理手続きに関する諸規定を詳細に定め、正確かつ迅速な事務処理を通じて事故発生の未然防止に取り組んでいます。また、事務工程の分析による潜在的なリスクの把握を通じて、処理手順の見直しを行うなど、事務リスクの削減に取り組んでいます。

情報資産（システム）リスク管理

情報資産（システム）リスクとは、情報の喪失・改竄・不正使用・外部への漏洩、並びにコンピューターシステムが自然災害や故障などによって損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、業務運営が様々なコンピューターシステムによって支えられていることを踏まえ、システムの信頼性や安全性に万全を期すとともに、万一の場合に備えて、バックアップ体制を構築しています。

また、データの暗号化やアクセス権限の管理強化を行うなど、情報の漏洩や不正アクセスなどの防止に向けて体制の整備に努めています。

有形資産リスク管理

有形資産リスクとは、災害や資産管理の瑕疵等の結果、建物・設備の毀損や執務環境の質が低下することにより損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、耐震診断や停電対策を行い、災害発生時においても業務を継続できるよう、環境整備に努めています。

人材リスク管理

人材リスクとは、人材の流出・喪失や士気の低下によって、業務の遅延が生じたり専門的な技術・知識の継承が損なわれるといったことにより損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、職員の能力向上に努めるとともに、各々の職員が能力を最大限発揮できる職場環境の整備に努めています。

法的リスク管理

法的リスクとは、法令等の違反や、各種制度変更への対応が不十分であったために損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、リスク統括部を設置し、法律問題に関する情報の集約・管理をはじめ、法的リスクへの対応を適切に行い、法的リスクの顕在化の未然防止およびリスクの軽減に努めています。

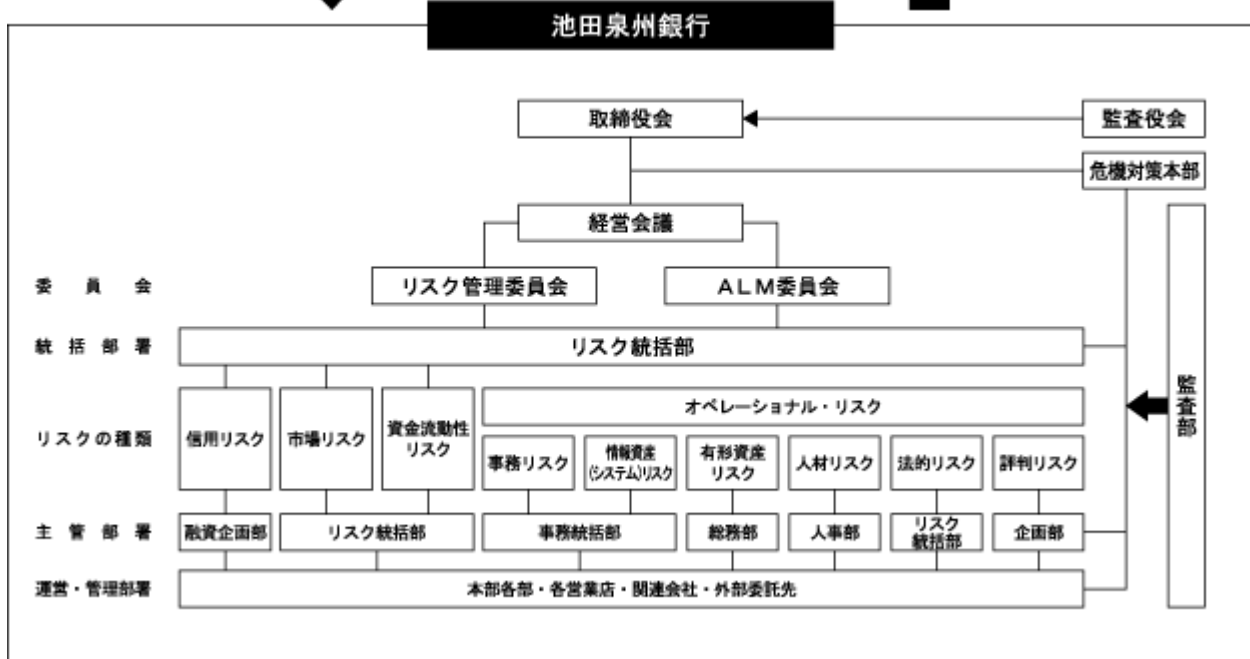
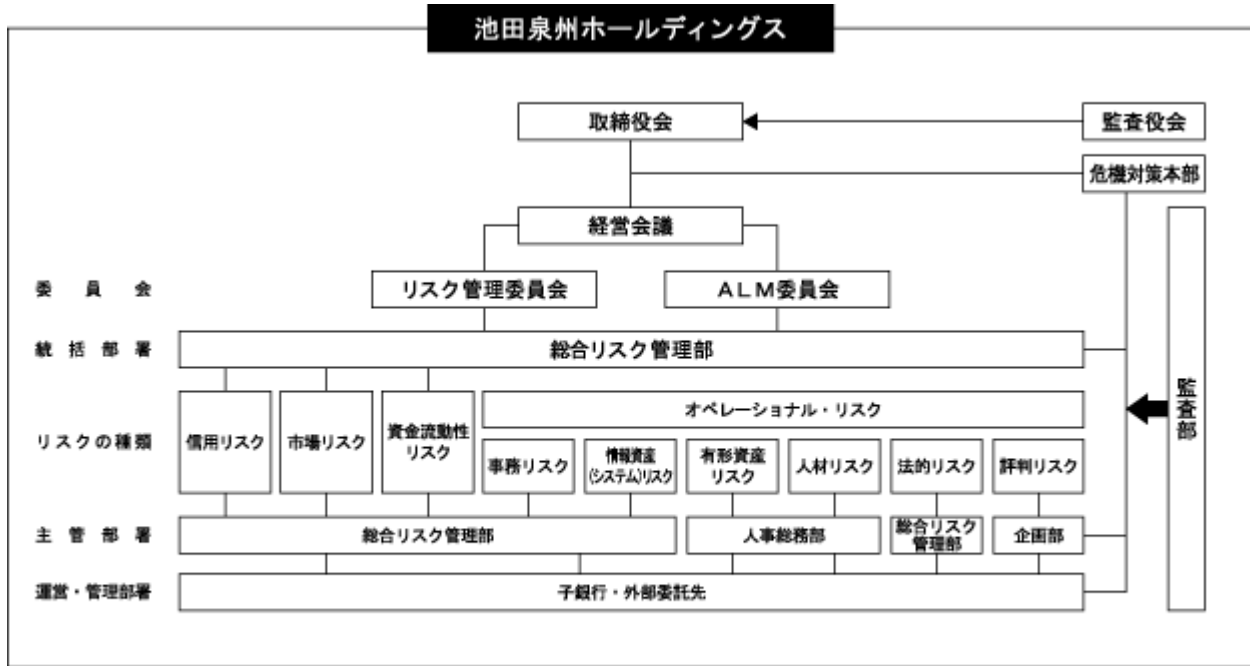
評判リスク管理

評判リスクとは、事実と異なる風説・風評が流布された結果、または事実に係る当行グループの対応の不備により、当行グループの評判が悪化し、損失を被るリスクをいいます。

当行グループでは、経営に与える影響の重大性に鑑み、積極的な情報開示を通じて経営の透明性を高めることにより、評判リスクの回避に努めています。

危機管理

当行グループでは、大規模な自然災害やシステム障害の発生等、突発的な事象に対処するための基本的な方針として「危機管理規定」を制定しており、重大な危機が発生した際には、「危機対策本部」を設置し、全行的な対応を行う体制としています。危機発生時の具体的な対応については、「コンティンジェンシープラン」を整備のうえ、お客さまや職員の安全確保に努めるとともに、金融システム機能の業務継続体制を構築しています。



二 コンプライアンス体制について

当行及び当行グループは、社会的責任と公共的使命を自覚し、お客さまや地域社会からの信認を得られるよう「コンプライアンス」を経営の最重要課題に位置付けて取り組んでおります。

具体的には池田泉州ホールディングス及び当行それぞれに「コンプライアンス委員会」を設置し、コンプライアンスに関する重要事項について審議を行っています。また、コンプライアンス担当役員のもとにコンプライアンスに関する一元的な管理を行う部署として「リスク統括部」を設置しております。

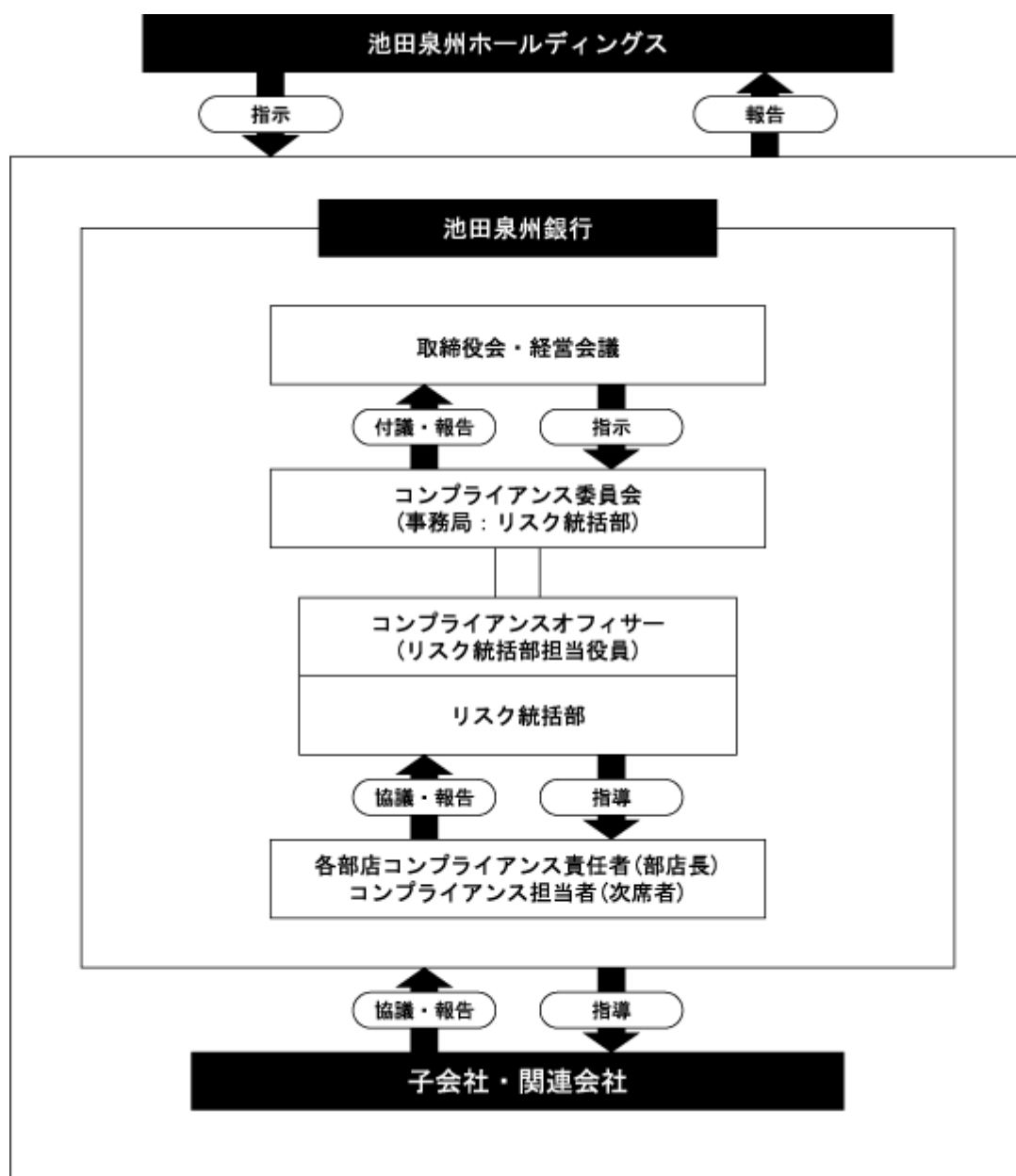
リスク統括部では、法令等遵守に係る実践計画であるコンプライアンス・プログラムの策定・見直しやフォローアップ、コンプライアンスの基本的な事項を取りまとめたコンプライアンス・マニュアルの策定・更新・周知徹底、各種研修等を通じた法令等遵守啓発活動などによりコンプライアンスの推進に取り組んでおります。

各店舗においてはコンプライアンスを実践・浸透させるため「コンプライアンス責任者」や「コンプライアンス担当者」を配置し、コンプライアンスの観点からのチェックや研修を実施するなど、コンプライアンスの浸透に努めております。

また、コンプライアンス上の問題を早期発見し是正を図るため、社外の受付窓口を含むホットラインを設置・運営しております。

金融機関におけるコンプライアンスの重要性はますます高まっており、当行及び当行グループは、銀行法や金融商品取引法をはじめとする関係法令の遵守はもとより、反社会的勢力の排除や適切なお客さま保護等のための体制強化等に取り組んでおります。

今後もお客さまに「安心」してお取引いただけますよう、規定の整備や教育を継続的に行うことでコンプライアンス体制の強化・充実を図ってまいります。



内部監査及び監査役監査の状況

内部監査

当行では、内部監査の目的・方針等を定めた「内部監査基本規定」を制定し、本規定に基づき内部監査を行う部署として「監査部」を設置しております。当行の内部監査方針は、業務の健全性・適切性を確保するため、独立性と専門性を備えた実効性のある内部監査態勢を整備し、リスク管理、内部統制等の適切性・有効性を検証・評価するとともに、必要に応じ、経営陣に対し問題点の改善方法の提言等を行うことにより、グループにおける内部管理態勢の改善、企業価値の拡大等の経営目標の効果的な達成に資することとしております。

当行の監査部は、取締役会で承認された監査計画のもと、本部・営業店に対する内部監査を実施するほか、必要に応じて監査契約等に基づき子会社・関連会社に対する内部監査を実施しております。また、監査結果については、定期的に取締役会等へ報告を行っております。

監査役監査

各監査役は、監査役会で定めた監査方針・監査計画等のもと、「監査役監査基準」「内部統制システムに係る監査の実施基準」等に基づき、「取締役会」及び「経営会議」等重要な会議への出席や重要書類の閲覧等を通じ、取締役の職務執行を監査します。

監査役と会計監査人は、定期的に情報交換の場を設け、監査における諸問題等について意見交換を行うなど、緊密に連携することで効率的かつ実効性の高い監査業務を行っております。また、監査役と内部監査部門においても、内部監査に監査役が立ち会ったり意見交換を行うなど、緊密に連携することで効率的かつ実効性の高い監査業務を行っております。

内部監査部門、監査役及び会計監査人は、意思疎通を十分に図って緊密に連携し、また、内部統制部門からの各種報告を受け、効率的かつ実効性の高い監査を実施するよう努めております。

社外取締役及び社外監査役

当行の社外取締役は2名であります。また、社外監査役は2名であります。

社外取締役長岡孝は、当行親会社の大株主である株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ及び株式会社三菱東京UFJ銀行の出身であります。当行との間に、人的関係、資本関係、取引関係及びその他の利害関係はありません。長年に亘る金融機関の経営者としての豊富な経験に基づき、当行取締役として業務執行に対する監督等の役割を果たすことを期待しております。なお、社外取締役長岡孝は、池田泉州ホールディングスの社外取締役を兼職しております。

社外取締役平松一夫は、当行との間に、人的関係、資本関係、取引関係及びその他の利害関係はありません。学校法人及び企業における幅広い経験に基づき、当行取締役として業務執行に対する監督等の役割を果たしております。なお、社外取締役平松一夫は、池田泉州ホールディングスの社外取締役を兼職しております。

社外監査役大橋太郎は、当行との間に人的関係、資本関係、取引関係及びその他の利害関係はありません。上場企業の代表取締役を経験し、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しており、専門的見地から監査役としての役割を果たしております。

社外監査役吉田二郎は、当行との間に人的関係、資本関係、取引関係及びその他の利害関係はありません。上場企業の代表取締役を経験し、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しており、専門的見地から監査役としての役割を果たしております。

社外取締役は、取締役会を通じて監査役監査、内部監査及び会計監査の状況並びに内部統制部門からの内部統制の状況の報告を受けており、提言・助言等を行っております。また、社外監査役は、常勤監査役から監査役監査、内部監査及び会計監査の状況並びに内部統制部門からの内部統制の状況の報告を受けており、提言・助言等を行っております。

役員の報酬等の内容（平成24年3月期）

イ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の額

	報酬等の総額 (百万円)			対象となる役員 の員数(名)
	基本報酬	役員退職慰労 引当金繰入額	その他	
取締役(社外取締役を除く)	375	332	42	23
監査役(社外監査役を除く)	34	34		2
社外役員	26	26		5

ロ 使用人兼務役員の使用人給与のうち、重要なもの

総額(百万円)	対象となる役員 の員数(名)	内容
34	7	基本報酬34百万円

その他

- イ 当行の取締役は23名以内とする旨を定款で定めております。取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款で定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨を定款で定めております。取締役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結のときまでとしております。
- ロ 当行は、株主総会の普通決議要件について、出席した議決権を行使することができる株主の議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。
- ハ 当行は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものです。
- ニ 当行は、機動的な資本政策の遂行を可能にするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって、自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。
- ホ 当行は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	108	1	100	
連結子会社	14		14	
計	122	1	114	

【その他重要な報酬の内容】

前連結会計年度

該当事項はありません。

当連結会計年度

該当事項はありません。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度

当行が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、金融商品の時価等の開示に関する助言業務であります。

当連結会計年度

該当事項はありません。

【監査報酬の決定方針】

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

- 1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)の財務諸表について、新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。
- 4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には公益財団法人財務会計基準機構への加入や会計基準設定主体等の行う研修への参加により、会計基準等の内容を適切に把握し、または会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】
【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
資産の部		
現金預け金	144,348	133,965
コールローン及び買入手形	-	698
買入金銭債権	1,311	1,494
商品有価証券	36	69
金銭の信託	19,000	19,000
有価証券	1,077,342	1,199,965
貸出金	3,501,016	3,516,142
外国為替	6,210	4,328
その他資産	61,140	57,297
有形固定資産	38,120	38,423
建物	16,145	16,246
土地	15,949	15,868
リース資産	25	18
建設仮勘定	-	2
その他の有形固定資産	6,000	6,288
無形固定資産	5,568	9,007
ソフトウェア	3,362	8,051
その他の無形固定資産	2,206	955
繰延税金資産	38,979	32,831
支払承諾見返	29,459	26,114
貸倒引当金	42,748	48,304
資産の部合計	4,879,786	4,991,035
負債の部		
預金	4,349,369	4,395,696
譲渡性預金	4,500	-
債券貸借取引受入担保金	172,725	237,307
借入金	44,417	67,906
外国為替	480	431
社債	48,000	53,000
その他負債	50,108	44,642
賞与引当金	1,758	1,734
退職給付引当金	6,525	4,515
役員退職慰労引当金	386	335
睡眠預金払戻損失引当金	309	258
ポイント引当金	135	141
統合関連損失引当金	717	-
偶発損失引当金	465	473
繰延税金負債	0	2
負ののれん	10	7
支払承諾	29,459	26,114
負債の部合計	4,709,371	4,832,569

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
純資産の部		
資本金	50,710	50,710
資本剰余金	104,361	93,932
利益剰余金	27,042	24,518
株主資本合計	182,114	169,162
その他有価証券評価差額金	12,884	11,878
繰延ヘッジ損益	19	2
その他の包括利益累計額合計	12,904	11,880
少数株主持分	1,204	1,184
純資産の部合計	170,415	158,466
負債及び純資産の部合計	4,879,786	4,991,035

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】
【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
経常収益	117,308	116,007
資金運用収益	76,281	70,910
貸出金利息	59,699	58,450
有価証券利息配当金	16,463	12,290
コールローン利息及び買入手形利息	29	58
預け金利息	11	22
その他の受入利息	78	89
役務取引等収益	17,440	16,277
その他業務収益	12,556	18,132
その他経常収益	11,030	10,687
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	-	50
償却債権取立益	-	1,321
その他の経常収益	11,030	9,315
経常費用	109,827	105,214
資金調達費用	12,999	10,764
預金利息	10,663	7,937
譲渡性預金利息	19	1
コールマネー利息及び売渡手形利息	9	9
債券貸借取引支払利息	796	978
借入金利息	752	843
社債利息	720	887
その他の支払利息	37	106
役務取引等費用	6,295	6,192
その他業務費用	2,070	6,977
営業経費	56,278	55,567
その他経常費用	32,183	25,713
貸倒引当金繰入額	4,126	6,679
その他の経常費用	28,056	19,033
経常利益	7,481	10,792
特別利益	1,886	249
償却債権取立益	1,863	-
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	12	-
負ののれん発生益	4	187
株式報酬受入益	6	62
特別損失	420	435
固定資産処分損	155	269
減損損失	189	166
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	74	-
税金等調整前当期純利益	8,947	10,606
法人税、住民税及び事業税	343	611
法人税等調整額	874	6,075
法人税等合計	1,217	6,686
少数株主損益調整前当期純利益	7,729	3,919
少数株主利益	77	148
当期純利益	7,652	3,770

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	7,729	3,919
その他の包括利益	1 208	1 1,036
その他有価証券評価差額金	227	1,018
繰延ヘッジ損益	19	17
包括利益	7,938	4,956
親会社株主に係る包括利益	7,859	4,794
少数株主に係る包括利益	78	162

【連結株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
株主資本		
資本金		
当期首残高	50,710	50,710
当期変動額		
当期変動額合計	-	-
当期末残高	50,710	50,710
資本剰余金		
当期首残高	33,651	104,361
当期変動額		
合併による増加	70,709	-
剰余金の配当	-	10,428
当期変動額合計	70,709	10,428
当期末残高	104,361	93,932
利益剰余金		
当期首残高	7,396	27,042
当期変動額		
合併による増加	17,757	-
剰余金の配当	5,763	6,294
当期純利益	7,652	3,770
当期変動額合計	19,645	2,523
当期末残高	27,042	24,518
株主資本合計		
当期首残高	91,758	182,114
当期変動額		
合併による増加	88,467	-
剰余金の配当	5,763	16,722
当期純利益	7,652	3,770
当期変動額合計	90,355	12,952
当期末残高	182,114	169,162

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金		
当期首残高	7,412	12,884
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,471	1,005
当期変動額合計	5,471	1,005
当期末残高	12,884	11,878
繰延ヘッジ損益		
当期首残高	0	19
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	19	17
当期変動額合計	19	17
当期末残高	19	2
その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	7,412	12,904
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,491	1,023
当期変動額合計	5,491	1,023
当期末残高	12,904	11,880
少数株主持分		
当期首残高	803	1,204
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	400	19
当期変動額合計	400	19
当期末残高	1,204	1,184
純資産合計		
当期首残高	85,149	170,415
当期変動額		
合併による増加	88,467	-
剰余金の配当	5,763	16,722
当期純利益	7,652	3,770
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,090	1,003
当期変動額合計	85,265	11,948
当期末残高	170,415	158,466

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	8,947	10,606
減価償却費	4,157	4,375
減損損失	189	166
のれん償却額	111	5
負ののれん償却額	2	2
負ののれん発生益	4	187
持分法による投資損益（は益）	155	38
貸倒引当金の増減（）	2,603	5,555
賞与引当金の増減額（は減少）	12	23
退職給付引当金の増減額（は減少）	452	2,010
役員退職慰労引当金の増減額（は減少）	59	51
睡眠預金払戻損失引当金の増減（）	12	50
ポイント引当金の増減額（は減少）	36	5
統合関連損失引当金の増減（）	473	717
偶発損失引当金の増減（）	83	7
資金運用収益	76,281	70,910
資金調達費用	12,999	10,764
有価証券関係損益（）	7,659	8,812
金銭の信託の運用損益（は運用益）	25	285
為替差損益（は益）	21,428	2,592
固定資産処分損益（は益）	155	269
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	74	-
貸出金の純増（）減	52,435	15,125
預金の純増減（）	92,462	46,326
譲渡性預金の純増減（）	8,000	4,500
借入金（劣後特約付借入金を除く）の純増減（）	57,470	13,489
預け金（日銀預け金を除く）の純増（）減	2,906	44
商品有価証券の純増（）減	27	32
コールローン等の純増（）減	9,939	881
コールマネー等の純増減（）	45,000	-
債券貸借取引受入担保金の純増減（）	82,598	64,581
外国為替（資産）の純増（）減	1,146	1,882
外国為替（負債）の純増減（）	85	49
普通社債発行及び償還による増減（）	300	-
資金運用による収入	77,239	71,134
資金調達による支出	14,000	13,359
その他	3,122	423
小計	113,043	115,839
法人税等の支払額	1,061	364
営業活動によるキャッシュ・フロー	114,105	115,474

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	1,111,068	1,650,619
有価証券の売却による収入	949,870	1,333,067
有価証券の償還による収入	308,731	201,719
金銭の信託の増加による支出	-	339
金銭の信託の減少による収入	-	39
有形固定資産の取得による支出	4,066	2,903
無形固定資産の取得による支出	3,314	5,276
有形固定資産の売却による収入	17	51
投資活動によるキャッシュ・フロー	140,169	124,259
財務活動によるキャッシュ・フロー		
劣後特約付借入れによる収入	-	10,000
劣後特約付社債及び新株予約権付社債の発行による収入	15,000	35,000
劣後特約付社債及び新株予約権付社債の償還による支出	-	30,000
配当金の支払額	5,763	16,722
少数株主への払戻による支出	0	-
財務活動によるキャッシュ・フロー	9,236	1,722
現金及び現金同等物に係る換算差額	138	168
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	35,438	10,339
現金及び現金同等物の期首残高	72,139	141,335
合併に伴う現金及び現金同等物の増加額	33,758	-
現金及び現金同等物の期末残高	141,335	130,996

【連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項】

1 連結の範囲に関する事項

当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
(1) 連結子会社 25社 連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため、省略しております。 (連結の範囲の変更) 前連結会計年度において連結子会社であった泉銀ビジネスサービス株式会社(現商号 池田泉州ビジネスサービス株式会社)と池田ビジネスサービス株式会社は、平成23年7月1日に泉銀ビジネスサービス株式会社を存続会社として合併いたしました。 前連結会計年度において連結子会社であった池銀キャピタル夢仕込ファンド1号投資事業有限責任組合は、平成24年3月15日に清算が終了したため、連結の範囲から除外しております。
(2) 非連結子会社 会社名 Ikeda Preferred Capital Cayman Limited 非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及び繰延ヘッジ損益(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2 持分法の適用に関する事項

当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
(1) 持分法適用の非連結子会社 該当ありません。
(2) 持分法適用の関連会社 3社 会社名 株式会社自然総研 株式会社バンク・コンピュータ・サービス 株式会社ステーションネットワーク関西
(3) 持分法非適用の非連結子会社 会社名 Ikeda Preferred Capital Cayman Limited
(4) 持分法非適用の関連会社 該当ありません。 持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及び繰延ヘッジ損益(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。 12月末日 10社 3月末日 15社
(2) 連結子会社のうち、決算日が連結決算日と異なる子会社については、各社の決算日の財務諸表により連結しております。なお、連結決算日との間に生じた重要な取引については、必要な調整を行っております。

4 会計処理基準に関する事項

当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法 商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。
(2) 有価証券の評価基準及び評価方法 (イ) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、其他有価証券のうち時価のある株式及び投資信託については連結決算日前1カ月の市場価格等の平均に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、それ以外については連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。 なお、其他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
(ロ) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

<p>当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)</p>
<p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法 デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。</p>
<p>(4) 減価償却の方法 有形固定資産(リース資産を除く) 当行及び連結子会社の有形固定資産は、主として定額法を採用しております。 また、主な耐用年数は次のとおりであります。 建物 3年～50年 その他 2年～20年 無形固定資産(リース資産を除く) 無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づいて償却しております。 リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法によっております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。</p>
<p>(5) 貸倒引当金の計上基準 当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。 上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。 すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。 連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ引当てております。 なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は61,781百万円(前連結会計年度末は61,041百万円)であります。</p>
<p>(6) 賞与引当金の計上基準 賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。</p>
<p>(7) 退職給付引当金の計上基準 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。 過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(11年～12年)による定額法により損益処理 数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(11年～12年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から損益処理 なお、会計基準変更時差異(9,894百万円)については、15年による按分額を費用処理しております。 (追加情報) 当連結会計年度において、当行の退職給付制度の改定が行われ、平成23年10月1日に制度統合いたしました。このため、前払年金費用と退職給付引当金を相殺して表示しております。なお、相殺する前に比べ、前払年金費用と退職給付引当金は、それぞれ2,220百万円減少しております。</p>
<p>(8) 役員退職慰労引当金の計上基準 役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。</p>
<p>(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準 睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。</p>
<p>(10) ポイント引当金の計上基準 ポイント引当金は、ポイントの将来の利用による負担に備えるため、未利用の付与済ポイントを金額に換算した残高のうち、将来利用される見込額を見積り、必要と認められる額を計上しております。</p>
<p>(11) 偶発損失引当金の計上基準 偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。</p>

<p>当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)</p>
<p>(12) 外貨建資産・負債の換算基準 当行及び連結子会社の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。</p>
<p>(13) リース取引の処理方法 (借手側) 当行及び連結子会社の所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年 4月 1日前に開始する連結会計年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。 (貸手側) ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準については、リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。 なお、リース取引開始日が適用初年度開始前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、期首に前連結会計年度末における固定資産の減価償却累計額控除後の額で契約したものとしております。</p>
<p>(14) 重要なヘッジ会計の方法 (イ)金利変動リスク・ヘッジ 当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号。以下「業種別監査委員会報告第24号」という。)に規定する繰延ヘッジによっております。 また、一部の連結子会社において、金利スワップの特例処理を行っております。 (ロ)為替変動リスク・ヘッジ 当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。</p>
<p>(15) のれんの償却方法及び償却期間 5年間の定額法により償却を行っております。ただし、当連結会計年度に発生したのれんについては、1年間で償却しております。</p>
<p>(16) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。</p>
<p>(17) 消費税等の会計処理 当行及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、主として税抜方式によっております。</p>

【追加情報】

<p>当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)</p>
<p>当連結会計年度の期首以後に行われる会計上の変更及び過去の誤謬の訂正から、「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準」(企業会計基準第24号平成21年12月4日)及び「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第24号平成21年12月4日)を適用しております。 なお、「金融商品会計に関する実務指針」(日本公認会計士協会会計制度委員会報告第14号)に基づき、当連結会計年度の「睡眠預金払戻損失引当金戻入益」及び「償却債権取立益」は、「その他経常収益」に計上しておりますが、前連結会計年度については遡及処理を行っておりません。</p>

【注記事項】

(連結貸借対照表関係)

1 関連会社の株式の総額

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
株式	272百万円	234百万円

2 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
破綻先債権額	4,733百万円	6,364百万円
延滞債権額	53,653百万円	53,016百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	百万円	51百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
貸出条件緩和債権額	7,460百万円	7,401百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
合計額	65,847百万円	66,833百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6 手形割引は、業種別監査委員会報告第24号に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
21,118百万円	21,947百万円

7 ローン・パーティシペーションで、平成7年6月1日付日本公認会計士協会会計制度委員会報告第3号に基づいて、原債務者に対する貸出金として会計処理した参加元本金額のうち、連結貸借対照表計上額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
21,700百万円	16,500百万円

8 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	257,709百万円	363,766百万円
その他資産	3,339 "	2,573 "
その他の有形固定資産	178 "	"
ソフトウェア	349 "	"
計	261,576 "	366,340 "

担保資産に対応する債務

預金	15,586 "	2,833 "
債券貸借取引受入担保金	172,725 "	237,307 "
借入金	17,965 "	30,101 "

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
有価証券	76,639百万円	74,602百万円

また、その他資産のうち先物取引差入証拠金、保証金、先物取引負担金及びデリバティブ取引担保金は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
先物取引差入証拠金	2,017百万円	2,330百万円
保証金	5,515百万円	5,243百万円
先物取引負担金	503百万円	503百万円
デリバティブ取引担保金	500百万円	500百万円

- 9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
融資未実行残高	603,581百万円	656,430百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消 可能なもの)	603,224百万円	649,505百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

- 10 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
減価償却累計額	41,372百万円	40,954百万円

- 11 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
圧縮記帳額	517百万円	517百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(百万円)

- 12 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
劣後特約付借入金	21,500百万円	31,500百万円

- 13 社債は、劣後特約付無担保社債であります。

- 14 有価証券中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
	27,054百万円	19,723百万円

(連結損益計算書関係)

1 その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)		当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
貸出金償却	11,952百万円	貸出金償却	5,504百万円
統合関連費用	3,076百万円	統合関連費用	4,005百万円
債権譲渡損	1,355百万円	債権譲渡損	1,133百万円
株式等売却損	1,168百万円	株式等償却	462百万円
株式等償却	1,079百万円	株式等売却損	454百万円
統合関連損失引当金繰入額	473百万円	金銭の信託運用損	326百万円
保証協会負担金	325百万円	保証協会負担金	310百万円
偶発損失引当金繰入額	189百万円	社債発行費用	207百万円

(連結包括利益計算書関係)

当連結会計年度(自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

その他有価証券評価差額金：

当期発生額	7,277百万円
組替調整額	6,183 "
税効果調整前	1,093 "
税効果額	74 "
その他有価証券評価差額金	1,018 "

繰延ヘッジ損益：

当期発生額	79 "
組替調整額	97 "
税効果調整前	17 "
税効果額	0 "
繰延ヘッジ損益	17 "
その他の包括利益合計	1,036 "

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	35,587			35,587	
第一種優先株式	6,000			6,000	
第二種優先株式	6,250			6,250	
合計	47,837			47,837	
自己株式					
普通株式					
合計					

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当ありません。

3 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成22年6月29日 定時株主総会	普通株式	3,309	93	平成22年3月31日	平成22年6月29日
	第一種 優先株式	1,176	196	平成22年3月31日	平成22年6月29日
	第二種 優先株式	1,278	204.5	平成22年3月31日	平成22年6月29日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成23年6月29日 定時株主総会	普通株式	3,843	その他 利益剰余金	108	平成23年3月31日	平成23年6月29日
	第一種 優先株式	1,176	その他 利益剰余金	196	平成23年3月31日	平成23年6月29日
	第二種 優先株式	1,275	その他 利益剰余金	204	平成23年3月31日	平成23年6月29日

当連結会計年度(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	35,587	12,250		47,837	注
第一種優先株式	6,000		6,000		注
第二種優先株式	6,250		6,250		注
合計	47,837	12,250	12,250	47,837	

(注) 平成23年6月29日の定時株主総会書面決議並びに種類株主総会書面決議において、定款の一部変更が行われ、第一種優先株式及び第二種優先株式に関する規定が削除されたことに伴い、第一種優先株式及び第二種優先株式は、普通株式に変更されたものであります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当ありません。

3 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成23年6月29日 定時株主総会	普通株式	3,843	108	平成23年3月31日	平成23年6月29日
	第一種 優先株式	1,176	196	平成23年3月31日	平成23年6月29日
	第二種 優先株式	1,275	204	平成23年3月31日	平成23年6月29日
平成24年3月30日 臨時株主総会	普通株式	10,428	218	平成24年3月30日	平成24年3月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成24年6月28日 定時株主総会	普通株式	5,644	その他 利益剰余金	118	平成24年3月31日	平成24年6月28日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
現金預け金勘定	144,348百万円	133,965百万円
当座預け金	465百万円	664百万円
普通預け金	2,045百万円	966百万円
通知預け金	30百万円	30百万円
定期預け金	95百万円	1,095百万円
振替貯金	377百万円	212百万円
現金及び現金同等物	141,335百万円	130,996百万円

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(1) 所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

(ア)有形固定資産

車両であります。

(イ)無形固定資産

該当ありません。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計処理基準に関する事項」の「(4) 減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(2) 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び期末残高相当額
前連結会計年度(平成23年3月31日)

(単位：百万円)

	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	減損損失累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産	49	41		7
無形固定資産				
合計	49	41		7

(注) 取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

(単位：百万円)

	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	減損損失累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産	38	35		3
無形固定資産				
合計	38	35		3

(注) 取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

未経過リース料期末残高相当額等

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
1年内	5	2
1年超	2	0
合計	7	3
リース資産減損勘定の残高		

(注) 未経過リース料期末残高相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額及び減損損失

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
支払リース料	9	6
リース資産減損勘定の取崩額		
減価償却費相当額	9	6
減損損失		

減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年 3月31日)	当連結会計年度 (平成24年 3月31日)
1年内	665	619
1年超	5,250	4,867
合計	5,915	5,486

[次へ](#)

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、地域金融機関として各種金融サービスに係る事業を行っています。主たる業務である預金業務、貸出業務ならびに有価証券運用等のマーケット業務において、金利変動及び市場価格の変動を伴う金融資産及び金融負債を有しています。市場環境等の変化に応じた戦略目標等の策定に資するため、これらの資産及び負債の総合的管理(A L M)を行うとともに、その一環として、デリバティブ取引を行っています。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスク及び金利の変動リスクに晒されています。

また、保有有価証券は、主に株式、債券、投資信託等であり、その他有価証券として、純投資目的及び政策投資目的で保有しているほか、一部は満期保有目的の債券、売買目的有価証券として保有しています。

これらは、それぞれ発行体の信用リスク及びマーケット(金利・株価・為替等)の変動に伴う市場リスクに晒されています。

主な金融負債である預金については、予期せぬ資金流出が発生するなどの流動性リスクが存在します。また、そのほかの調達資金については、一定の環境の下で当行グループが市場を利用できなくなる場合等において必要な資金が確保できない、あるいは、通常よりも高い金利での資金調達を余儀なくされるといった流動性リスクに晒されています。また、これらの金融負債は、金融資産と同様に、金利変動リスクに晒されています。

デリバティブ取引は、顧客ニーズへの対応や、資産・負債のリスクコントロール手段を主な目的として利用しています。また、トレーディング(短期的な売買差益獲得)の一環として、債券や株式の先物取引等を利用しています。これらのデリバティブ取引は、取引相手先の契約不履行などに係る信用リスク(カウンターパーティーリスク)及びマーケット(金利・株価・為替等)の変動に伴う市場リスクに晒されています。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当行グループは、フロント部門から独立したリスク管理部署を設置し、リスク管理についての基本方針を定めています。具体的には、リスク管理に関する体制及びリスク管理基本規定等の諸規定を取締役会で定め、リスクカテゴリー毎の責任部署を明確にするとともに、それらを統括するリスク管理統括部署を設置しています。

さらに、「リスク管理委員会」並びに「A L M委員会」を設置し、当行グループのリスクの状況を把握するとともに、課題及び対応策を審議しています。それらの審議事項を取締役会等に付議・報告することにより、経営レベルでの実効性のあるリスク管理体制を構築しています。

統合的リスク管理

当行グループは、当行のリスク管理基本規定及び統合的リスク管理に関する諸規定に従い、統合的リスク管理を行っています。

具体的には、自己資本比率の算定に含まれない与信集中リスクや銀行勘定の金利リスク等も含めて、信用リスクや市場リスク等のリスクカテゴリー毎の方法で評価したリスクを統合的に捉え、経営体力(自己資本)と対比することによって、統合的な管理を行っています。

信用リスクの管理

当行グループは、当行の信用リスク管理規定及び信用リスク管理に関する諸規定に従い、与信ポートフォリオの分析・管理を行っています。また、個別案件の与信管理については、審査、内部格付、資産自己査定等の体制を整備し運営しています。

これらの与信管理は、各営業店、審査部署、リスク管理部署により行われ、有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクについても、リスク管理部署が、信用情報や時価の把握をモニタリングし、定期的に取り締り会等へ報告を行っております。

さらに、与信管理の状況については、監査部署が監査をしています。

市場リスクの管理

()市場リスク管理

当行グループは、当行の市場リスク管理規定及び市場リスク管理に関する諸規定に従い、マーケット(金利・株価・為替等)の変動に伴う市場リスクの管理を行っています。具体的には、リスク管理部署がバリュー・アット・リスク(V a R)を用いて市場リスク量を把握するとともに、市場リスク量を一定の範囲内にコントロールすることを目的として、継続的なモニタリングを実施し、リスク限度額の遵守状況を監視しています。有価証券については、上記のリスク限度額管理に加えて、損失に上限を設定し、管理しています。なお、これらの情報はリスク管理部署から、リスク管理委員会及び取締役会へ定期的に報告されています。

また、A L M委員会において、資産・負債構造ならびに金利リスクの把握・確認を行うとともに、今後の対応等の協議を行っています。具体的には、A L M担当部署において金融資産及び負債の金利や期間を総合的に把握し、ギャップ分析や金利感応度分析等を行うことにより、安定的かつ継続的な収益の確保に努めています。

なお、外為取引や外債投資等の為替リスクを伴う取引を行っていますが、為替持高をできるだけスクウェアに近い状態にすることで、為替リスクの低減に努めています。

()デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、取引の執行、リスク管理、事務管理に関する部門をそれぞれ分離し内部牽制を図るとともに、市場リスク管理に関する諸規定に従い取引を行っています。

()市場リスクに係る定量的情報

市場リスクは他のリスクに比べて日々の変動が大きいいため、当行グループでは、預金、貸出金や有価証券などの金融商品の市場リスク量を、V a Rを用いて日次で把握、管理しています。

このV a R算定にあたっては、分散共分散法(保有期間120営業日、信頼区間99.0%、観測期間240営業日)を採用しています。

平成24年3月31日(当期の連結決算日)現在で当行グループの金融商品の市場リスク量(損失額の推計値)は、金利が251億円、株式が101億円となっています。また、相関を考慮した市場リスク量全体では227億円となっています。

なお、当行グループでは、金融商品のうち市場変動の影響が大きい有価証券関連のV a Rについて、市場リスク計測モデルの正確性を検証するために、モデルが算出した保有期間1日のV a Rと実際の損益を比較するバックテストングを実施しています。

平成23年度分に関して実施したバックテストングの結果、実際の損失がV a Rを超えた実績はなく、使用する計測モデルは十分な精度により市場リスクを捕捉しているものと考えています。

ただし、V a Rは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、当行の資金流動性リスク管理規定及び資金流動性リスク管理に関する諸規定に従い、資金調達に係る流動性リスクの管理を行っています。

具体的には、A L M担当部署や資金為替担当部署が、グループ全体の運用・調達状況を適時適切に把握するとともに、保有資産の流動性の確保や調達手段の多様化を図るなど、市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、安定した資金繰りの確保に努めています。

また、リスク管理部署は、短期間に資金化可能な流動性準備資産額を定期的に確認することで、流動性リスク顕現化時の対応力を把握するとともに、資金繰り管理の適切性をモニタリングし、リスク管理委員会や取締役会等に報告しています。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれています。

当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（（注2）参照）。

前連結会計年度(平成23年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	144,348	144,348	
(2) 買入金銭債権(*1)	1,271	1,271	
(3) 商品有価証券			
売買目的有価証券	36	36	
(4) 金銭の信託	19,000	19,000	
(5) 有価証券			
満期保有目的の債券	49,198	49,793	594
その他有価証券	1,020,601	1,020,601	
(6) 貸出金	3,501,016		
貸倒引当金(*1)	40,991		
	3,460,024	3,487,598	27,573
(7)外国為替(*1)	6,203	6,210	7
資産計	4,700,685	4,728,861	28,176
(1) 預金	4,349,369	4,354,017	4,647
(2) 譲渡性預金	4,500	4,500	
(3) 債券貸借取引受入担保金	172,725	172,725	
(4) 借入金	44,417	44,277	139
(5) 外国為替	480	480	
(6) 社債	48,000	47,548	451
負債計	4,619,493	4,623,549	4,056
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	26	26	
ヘッジ会計が適用されているもの	(1,129)	(1,129)	
デリバティブ取引計	(1,103)	(1,103)	

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権及び外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	133,965	133,965	
(2) コールローン及び買入手形	698	698	
(3) 買入金銭債権(*1)	1,473	1,473	
(4) 商品有価証券			
売買目的有価証券	69	69	
(5) 金銭の信託	19,000	19,000	
(6) 有価証券			
満期保有目的の債券	49,953	50,428	474
その他有価証券	1,142,714	1,142,714	
(7) 貸出金	3,516,142		
貸倒引当金(*1)	45,571		
	3,470,571	3,495,031	24,460
(8)外国為替(*1)	4,323	4,328	4
資産計	4,822,769	4,847,709	24,939
(1) 預金	4,395,696	4,397,807	2,111
(2) 債券貸借取引受入担保金	237,307	237,307	
(3) 借入金	67,906	67,922	15
(4) 外国為替	431	431	
(5) 社債	53,000	52,666	333
負債計	4,754,342	4,756,136	1,793
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	145	145	
ヘッジ会計が適用されているもの	(2)	(2)	
デリバティブ取引計	143	143	

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権及び外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

(1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、約定期間が短期間(1年以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) コールローン及び買入手形

これらは、残存期間が短期間(1年以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) 買入金銭債権

ファクタリング業務に係る債権は、貸出金と同様の方法により算定しております。

(4) 商品有価証券

ディーリング業務のために保有している債券等の有価証券については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

(5) 金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券については、株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

なお、保有目的ごとの金銭の信託に関する注記事項については、「(金銭の信託関係)」に記載しております。

(6) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、貸出金と同様の方法により算定しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

(7) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

(8) 外国為替

外国為替は、他の銀行に対する外貨預け金(外国他店預け)、輸出手形・旅行小切手等(買入外国為替)及び輸入手形による手形貸付(取立外国為替)であります。これらは、満期のない預け金、又は約定期間が短期間(1年以内)であり、それぞれ時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 債券貸借取引受入担保金

約定期間が短期間(1年以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) 借入金

借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当行及び連結子会社の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該借入金の元利金の合計額(金利スワップの特例処理の対象とされた借入金については、その金利スワップのレートによる元利金の合計額)を同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(4) 外国為替

外国為替は、売渡外国為替及び未払外国為替であり、これらは、約定期間が短期間(1年以内)であり、それぞれ時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(5) 社債

当行の発行する社債の時価は、市場価格によっております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(6)有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区分	平成23年3月31日	平成24年3月31日
非上場株式(*1)(*2)	5,862	5,756
組合出資金(*3)	1,406	1,302
その他	0	4
合計	7,269	7,063

(*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(*2) 前連結会計年度において、非上場株式について362百万円減損処理を行っております。

当連結会計年度において、非上場株式について146百万円減損処理を行っております。

(*3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(平成23年3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	93,053					
買入金銭債権(*1)	1,270					
有価証券	68,796	153,294	382,067	81,590	99,304	140,360
満期保有目的の債券	3,200	21,600	24,500			
うち社債	3,200	21,600	24,500			
その他有価証券のうち 満期があるもの	65,596	131,694	357,567	81,590	99,304	140,360
うち国債	30,012	18,000	108,000	59,700	86,000	39,500
地方債	12,728	37,582	31,292	770	1,210	
社債	22,683	50,422	31,450	6,206	3,004	46,738
その他	172	25,690	186,824	14,914	9,090	54,121
貸出金(*1、2)	695,662	489,372	411,520	247,521	325,491	1,273,030
外国為替	6,210					
合計	864,993	642,666	793,588	329,111	424,795	1,413,390

(*1) 貸出金及び買入金銭債権のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない
58,459百万円は含めておりません。

(*2) 貸出金のうち当座貸越については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	76,485					
コールローン及び買入手形	698					
買入金銭債権(*1)	1,473					
有価証券	130,922	356,758	236,190	158,382	34,704	137,395
満期保有目的の債券	14,600	21,100	14,300			
うち社債	14,600	21,100	12,300			
その他			2,000			
その他有価証券のうち 満期があるもの	116,322	335,658	221,890	158,382	34,704	137,395
うち国債	30,000	221,500	87,000	40,000	17,000	
地方債	25,264	37,596	12,593	350	1,530	
社債	52,076	35,742	35,881	1,908	2,404	51,114
その他	8,982	40,819	86,416	116,123	13,770	86,280
貸出金(*1、2)	638,106	520,613	451,224	266,155	325,631	1,226,163
外国為替	4,328					
合計	852,014	877,372	687,414	424,537	360,336	1,363,558

(*1) 貸出金及び買入金銭債権のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない
88,269百万円は含めておりません。

(*2) 貸出金のうち当座貸越については、「1年以内」に含めて開示しております。

(注4) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(平成23年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*1)	3,965,775	328,742	52,748	788	1,314	
譲渡性預金	4,500					
債券貸借取引受入担保金	172,725					
借入金(*2)	21,349	1,337	230	1,500	8,000	
社債(*3)				30,000	15,000	
合計	4,164,350	330,080	52,978	32,288	24,314	

(*1) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(*2) 借入金のうち、返済期限の定めのないもの12,000百万円は含めておりません。

(*3) 社債のうち、返済期限の定めのないもの3,000百万円は含めておりません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*1)	4,026,375	331,424	36,258	613	1,024	
債券貸借取引受入担保金	237,307					
借入金(*2)	34,247	1,532	626	1,500	18,000	
社債(*3)					50,000	
合計	4,297,931	332,956	36,885	2,113	69,024	

(*1) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(*2) 借入金のうち、返済期限の定めのないもの12,000百万円は含めておりません。

(*3) 社債のうち、返済期限の定めのないもの3,000百万円は含めておりません。

[次へ](#)

(有価証券関係)

- 1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」を含めて記載しております。
- 2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1 売買目的有価証券

	平成23年3月31日	平成24年3月31日
当連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)	0	0

2 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成23年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債			
	地方債			
	短期社債			
	社債	46,411	47,023	612
	その他			
	小計	46,411	47,023	612
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債			
	地方債			
	短期社債			
	社債	2,786	2,769	17
	その他			
	小計	2,786	2,769	17
合計		49,198	49,793	594

当連結会計年度(平成24年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債			
	地方債			
	短期社債			
	社債	46,655	47,157	502
	その他			
	小計	46,655	47,157	502
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債			
	地方債			
	短期社債			
	社債	1,297	1,282	14
	その他	2,000	1,987	12
	小計	3,297	3,270	27
合計		49,953	50,428	474

3 その他有価証券

前連結会計年度(平成23年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	17,720	14,020	3,699
	債券	474,493	463,061	11,432
	国債	288,192	278,839	9,352
	地方債	64,277	63,638	638
	短期社債			
	社債	122,023	120,583	1,440
	その他	63,720	61,433	2,286
	小計	555,934	538,516	17,418
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないもの	株式	39,250	49,559	10,309
	債券	118,982	119,557	575
	国債	59,366	59,564	198
	地方債	20,045	20,057	12
	短期社債			
	社債	39,571	39,935	364
	その他	306,434	325,731	19,296
	小計	464,667	494,849	30,182
合計	1,020,601	1,033,365	12,763	

当連結会計年度(平成24年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	18,923	14,087	4,836
	債券	550,668	547,680	2,987
	国債	339,635	339,286	349
	地方債	52,884	52,310	573
	短期社債			
	社債	158,148	156,083	2,064
	その他	178,715	175,826	2,888
	小計	748,307	737,594	10,712
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないもの	株式	37,368	48,046	10,678
	債券	106,930	107,340	410
	国債	58,746	59,047	301
	地方債	25,087	25,094	6
	短期社債			
	社債	23,096	23,198	102
	その他	250,108	261,402	11,294
	小計	394,407	416,790	22,383
合計	1,142,714	1,154,385	11,670	

4 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当ありません。

5 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	2,862	504	675
債券	337,390	3,906	133
国債	329,692	3,842	132
地方債			
短期社債			
社債	7,698	64	1
その他	604,470	6,936	2,352
合計	944,723	11,347	3,162

当連結会計年度(自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	995	305	440
債券	695,608	7,310	226
国債	661,250	6,892	156
地方債	1,011	14	
短期社債			
社債	33,346	403	69
その他	637,226	9,085	1,497
合計	1,333,830	16,700	2,164

6 保有目的を変更した有価証券

当連結会計年度中に、満期保有目的の債券1,500百万円の保有目的を、債券の発行者の信用状態の著しい悪化の理由により変更し、その他有価証券に区分しております。この変更による経常利益、税金等調整前当期純利益及び当期純利益への影響はありません。

7 減損処理を行った有価証券

有価証券(売買目的有価証券を除く。)で時価のあるもののうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理額は、725百万円(うち、株式716百万円、社債 8百万円)であります。

当連結会計年度における減損処理額は、3,283百万円(うち株式315百万円、投資信託2,967百万円)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、取得原価に比べて時価が50%以上下落した場合、または、時価が30%以上50%未満下落した場合においては、過去の一定期間における時価の推移並びに当該発行会社の信用リスク等を勘案した基準により行っております。

[前へ](#) [次へ](#)

(金銭の信託関係)

1 運用目的の金銭の信託

前連結会計年度(平成23年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益 に含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	19,000	20

当連結会計年度(平成24年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益 に含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	19,000	0

2 満期保有目的の金銭の信託

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

3 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(平成23年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	12,763
その他有価証券	12,763
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	92
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	12,856
()少数株主持分相当額	27
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	12,884

当連結会計年度(平成24年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	11,670
その他有価証券	11,670
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	167
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	11,838
()少数株主持分相当額	40
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	11,878

[前へ](#) [次へ](#)

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
	売建 買建				
店頭	通貨スワップ	98,138	75,626	159	159
	為替予約				
	売建	3,573		28	28
	買建	2,632		34	34
	通貨オプション				
	売建	15,254	10,531	1,653	440
	買建	15,254	10,531	1,641	621
	その他				
	売建				
	買建				
合計				153	345

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
店頭	売建				
	買建				
	通貨スワップ	74,353	44,764	116	116
	為替予約				
	売建	2,431		26	26
	買建	2,330		55	55
	通貨オプション				
	売建	10,686	6,768	988	84
	買建	10,686	6,768	988	217
	その他				
売建					
買建					
合計				145	278

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	株式指数先物				
	売建	2,801		127	127
	買建				
	株式指数オプション				
店頭	売建				
	買建				
	有価証券店頭指数等ス ワップ				
	株価指数変化率受取・ 短期変動金利支払				
	短期変動金利受取・ 株価指数変化率支払				
	その他				
	売建				
	買建				
	合計			127	127

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

取引所取引につきましては、東京証券取引所等における最終の価格によっております。店頭取引につきましては、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算出しております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

(4) 債券関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

(5) 商品関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

(6) クレジットデリバティブ取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ				
	受取固定・支払変動				
	受取変動・支払固定				
	金利先物				
	金利オプション その他				
金利スワップ の特例処理	金利スワップ				(注) 2
	受取固定・支払変動 受取変動・支払固定	借入金	1,050	450	
合計					

(注) 1 時価の算定

取引所取引につきましては、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引につきましては、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

2 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ				
	受取固定・支払変動				
	受取変動・支払固定				
	金利先物				
	金利オプション その他				
金利スワップ の特例処理	金利スワップ				(注) 2
	受取固定・支払変動 受取変動・支払固定	借入金	450	100	
合計					

(注) 1 時価の算定

取引所取引につきましては、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引につきましては、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

2 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該借入金の時価に含めて記載しております。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	通貨スワップ	外貨建の有価証券	23,683		1,129
	為替予約 その他				
為替予約等の 振当処理	通貨スワップ 為替予約				
合計					1,129

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	通貨スワップ	外貨建の有価証券	21,783		2
	為替予約 その他				
為替予約等の 振当処理	通貨スワップ 為替予約				
合計					2

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

(4) 債券関連取引

前連結会計年度(平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(平成24年3月31日)

該当ありません。

[前へ](#) [次へ](#)

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付型の制度として、企業年金基金制度、適格退職年金制度及び退職一時金制度を設けておりましたが、平成23年10月1日に退職給付制度の改定を行い、適格退職年金制度を廃止し、確定給付型企業年金基金制度に統合しております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。

一部の連結子会社においても、確定給付型の制度として、退職一時金制度を設けております。

2 退職給付債務に関する事項

区分	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
退職給付債務	33,154	30,324
年金資産	24,115	24,655
未積立退職給付債務(+)	9,038	5,669
会計基準変更時差異の未処理額	2,638	1,978
未認識数理計算上の差異	9,041	8,344
未認識過去勤務債務	687	3,214
連結貸借対照表計上額純額(+ + +)	1,953	1,440
前払年金費用	8,478	5,955
退職給付引当金(-)	6,525	4,515

(注) 1 臨時に支払う割増退職金は含めておりません。

2 一部の連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

3 当連結会計年度において、当行の退職給付制度の改定が行われ、平成23年10月1日に制度統合いたしました。このため、前払年金費用と退職給付引当金を相殺して表示しております。なお、相殺する前に比べ、前払年金費用と退職給付引当金は、それぞれ2,220百万円減少しております。

3 退職給付費用に関する事項

区分	前連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)	当連結会計年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
勤務費用	1,168	1,076
利息費用	576	641
期待運用収益	542	542
過去勤務債務の費用処理額	225	356
数理計算上の差異の費用処理額	1,201	1,408
会計基準変更時差異の費用処理額	659	659
その他(臨時に支払った割増退職金等)		
退職給付費用(+ + + + +)	2,837	2,886

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。

4 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

(1) 割引率

前連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
1.4% ~ 2.1%	1.7% ~ 2.1%

(2) 期待運用収益率

前連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
2.1% ~ 3.0%	2.5%

(3) 退職給付見込額の期間配分方法

期間定額基準

(4) 過去勤務債務の額の処理年数

11年～12年(その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数による定額法による)

(5) 数理計算上の差異の処理年数

11年～12年(各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理することとしている)

(6) 会計基準変更時差異の処理年数

15年

[前へ](#) [次へ](#)

(ストック・オプション等関係)

該当ありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	35,495百万円	32,572百万円
賞与引当金	716百万円	659百万円
退職給付引当金	3,254百万円	3,127百万円
有価証券評価損	14,204百万円	12,516百万円
繰越欠損金	26,316百万円	19,277百万円
減価償却費	702百万円	574百万円
その他有価証券評価差額金	5,429百万円	4,743百万円
その他	5,106百万円	4,305百万円
繰延税金資産小計	91,223百万円	77,776百万円
評価性引当額	51,618百万円	43,959百万円
繰延税金資産合計	39,605百万円	33,817百万円
繰延税金負債		
未収配当金益金不算入	345百万円	394百万円
その他有価証券評価差額金	244百万円	569百万円
その他	36百万円	24百万円
繰延税金負債合計	626百万円	989百万円
繰延税金資産の純額	38,978百万円	32,828百万円

2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
法定実効税率	40.6%	40.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.2%	0.6%
住民税均等割等	1.0%	0.9%
評価性引当額の減少	50.2%	34.0%
繰越欠損金控除期限超過	19.0%	%
繰越欠損金控除限度額制限	%	30.4%
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	%	32.1%
連結納税による影響	%	9.0%
その他	2.0%	1.4%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	13.6%	63.0%

3 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「経済社会の構造の変化に対応した税制の構築を図るための所得税法等の一部を改正する法律」(平成23年法律第114号)及び「東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法」(平成23年法律第117号)が平成23年12月2日に公布され、平成24年4月1日以後に開始する連結会計年度から法人税率の引下げ及び復興特別法人税の課税が行われることとなりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の40.6%から、平成24年4月1日に開始する連結会計年度から平成26年4月1日に開始する連結会計年度に解消が見込まれる一時差異等については37.9%に、平成27年4月1日に開始する連結会計年度以降に解消が見込まれる一時差異等については35.5%となります。この税率変更により、繰延税金資産は3,356百万円減少し、その他有価証券評価差額金は50百万円、繰延ヘッジ損益は0百万円、法人税等調整額は3,406百万円それぞれ増加しております。

また、欠損金の繰越控除制度が平成24年4月1日以後に開始する連結会計年度から繰越控除前の所得の金額の100分の80相当額が控除限度額とされることに伴い、繰延税金資産は3,227百万円減少し、法人税等調整額は同額増加しております。

4 当行及び親会社並びに一部の連結子会社は、平成24年4月1日開始連結会計年度より、法人税法(昭和40年法律第34号)に規定される連結納税制度を選択する申請を行い、法人税法の規定により、平成24年4月1日に連結納税のみなし承認を受けております。

これにより、当連結会計年度から「連結納税制度を適用する場合の税効果会計に関する当面の取扱い(その1)」(企業会計基準委員会実務対応報告第5号平成23年3月18日)及び「連結納税制度を適用する場合の税効果会計に関する当面の取扱い(その2)」(企業会計基準委員会実務対応報告第7号平成22年6月30日)を適用し、繰延税金資産及び法人税等調整額については、連結納税制度の選択を前提として計上することに変更しております。

この変更により、繰延税金資産は954百万円増加し、法人税等調整額は同額減少しております。

(企業結合等関係)

記載すべき重要なものはありません。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

当行の一部店舗又は事務所等における事業用定期借地権契約に係る資産除去債務並びに一部店舗におけるアスベスト等の有害物質に係る資産除去債務などであります。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を、取得から主として37年と見積り、割引率は主として2.3%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

八 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
期首残高(注)	104百万円	192百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	96百万円	17百万円
時の経過による調整額	百万円	3百万円
資産除去債務の履行による減少額	百万円	43百万円
その他増減(は減少)	9百万円	3百万円
期末残高	192百万円	165百万円

(注) 前連結会計年度の「期首残高」は、「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準第18号 平成20年3月31日)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第21号 平成20年3月31日)を適用したことによる残高であります。

[前へ](#)

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当行グループは、報告セグメントが銀行業のみであり、当行グループの業績における「その他」の重要性が乏しいため、記載を省略しております。なお、「その他」にはリース業務等が含まれております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	59,699	29,561	28,047	117,308

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	58,450	29,881	27,675	116,007

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者の取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
親会社	株式会社 池田泉州ホール ディングス	大阪市 北区	72,311	銀行持株 会社	(直接 100.0)	経営管理等 役員の兼任 等	経営管理費 の支払	1,030		

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引先と同様に決定しております。

当連結会計年度(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
親会社	株式会社 池田泉州ホール ディングス	大阪市 北区	72,311	銀行持株 会社	(直接 100.0)	経営管理等 役員の兼任 等	経営管理費 の支払	912		

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引先と同様に決定しております。

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

該当ありません。

(ウ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

当連結会計年度(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

該当ありません。

(工)連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及び その近親 者が議決 権の過半 数を所有 している 会社等	株式会社 姫野技建 (注)1、2	大阪市 東淀川区	20	建設業			貸出取引			
							利息受入	0		
親会社の 役員及び その近親 者	佐々木節子 (注)1			不動産賃貸 業			貸出取引		貸出金	73
							利息受入	2	その他資産 その他負債	0 0

取引条件及び取引条件の決定方針等

- (注)1 貸出取引条件等については、一般の取引先と同様に決定しております。
2 当行元取締役姫野豊が議決権の5%並びに近親者が議決権の95%を直接保有しております。
3 上記取引金額は、姫野豊が当行取締役在任期間中の平成22年4月1日から平成22年4月30日までの期間に係る記載であり、同社は当連結会計年度末時点では関連当事者に該当しないため、期末残高の記載をしておりません。

当連結会計年度(自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
親会社の 役員及び その近親 者	佐々木節子 (注)			不動産賃貸 業			貸出取引		貸出金	67
							利息受入	1	その他資産 その他負債	0 0

取引条件及び取引条件の決定方針等

- (注) 貸出取引条件等については、一般の取引先と同様に決定しております。

- (2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引
該当ありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

株式会社池田泉州ホールディングス
(東京証券取引所及び大阪証券取引所に上場)

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

重要な関連会社はありません。

(1株当たり情報)

		前連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)	当連結会計年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)
1株当たり純資産額	円	3,140.45	3,287.86
1株当たり当期純利益金額	円	146.15	84.12

(注) 1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年3月31日)	当連結会計年度 (平成24年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	170,415	158,466
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	58,655	1,184
(うち第一種優先株式払込金額)	30,000	
(うち第一種優先株式配当額)	1,176	
(うち第二種優先株式払込金額)	25,000	
(うち第二種優先株式配当額)	1,275	
(うち少数株主持分)	1,204	1,184
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	111,759	157,281
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	35,587	47,837

2 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)	当連結会計年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)
1株当たり当期純利益金額			
当期純利益	百万円	7,652	3,770
普通株主に帰属しない金額	百万円	2,451	
うち定時株主総会決議による第一 種優先株式配当額	百万円	1,176	
うち定時株主総会決議による第二 種優先株式配当額	百万円	1,275	
普通株式に係る当期純利益	百万円	5,201	3,770
普通株式の期中平均株式数	千株	35,587	44,824

なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないので記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当ありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
当行	第7回国内劣後 特約付無担保社債 (注1)	平成18年 9月29日	15,000		1.78	なし	平成28年 9月29日
	第8回国内劣後 特約付無担保社債 (注1)	平成19年 3月20日	5,000		1.79	なし	平成29年 3月17日
	第9回国内劣後 特約付無担保社債 (注1)	平成19年 12月28日	3,000	3,000	3.06	なし	
	第2回国内劣後 特約付無担保社債 (注2)	平成19年 2月27日	10,000		1.97	なし	平成29年 2月27日
	第1回国内劣後 特約付無担保社債	平成22年 12月17日	15,000	15,000	1.67	なし	平成32年 12月17日
	第2回国内劣後 特約付無担保社債	平成23年 9月21日		10,000	2.01	なし	平成33年 9月21日
	第3回国内劣後 特約付無担保社債	平成23年 12月16日		5,000	2.06	なし	平成33年 12月16日
	第4回国内劣後 特約付無担保社債	平成24年 3月23日		20,000	2.23	なし	平成34年 3月23日
合計			48,000	53,000			

- (注) 1 合併前の池田銀行が発行した社債であります。
2 合併前の泉州銀行が発行した社債であります。
3 連結決算日後5年以内における償還予定額はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率(%)	返済期限
借入金	44,417	67,906	1.40	
借入金	44,417	67,906	1.40	平成24年4月～ 平成33年9月
1年以内に返済予定のリース 債務	6	6	3.31	
リース債務(1年以内に返済予 定のものを除く。)	19	12	3.08	平成25年4月～ 平成28年9月

- (注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。
2 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
借入金	34,247	998	533	415	211
リース債務	6	6	3	2	0

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」勘定及び「その他負債」中のリース債務の内訳を記載しております。

(参考) 営業活動として資金調達を行っている約束手形方式による商業・ペーパーの発行は、該当ありません。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、資産除去債務明細表の作成を省略しております。

(2) 【その他】

該当事項はありません。

2【財務諸表等】
(1)【財務諸表】
【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
資産の部		
現金預け金	143,728	133,027
現金	51,291	57,477
預け金	92,437	75,550
コールローン	-	698
買入金銭債権	1,270	1,473
商品有価証券	36	69
商品地方債	36	69
金銭の信託	19,000	19,000
有価証券	1,081,565	1,203,706
国債	347,546	398,381
地方債	84,323	77,972
社債	211,276	229,180
株式	65,234	64,630
その他の証券	373,185	433,540
貸出金	3,512,391	3,527,485
割引手形	20,696	21,580
手形貸付	113,170	102,503
証書貸付	3,145,977	3,193,734
当座貸越	232,547	209,666
外国為替	6,210	4,328
外国他店預け	5,061	3,209
買入外国為替	248	210
取立外国為替	900	908
その他資産	34,321	30,421
前払費用	233	231
未収収益	7,338	7,626
先物取引差入証拠金	2,017	2,330
先物取引差金勘定	112	-
金融派生商品	2,968	1,959
その他の資産	21,651	18,271
有形固定資産	37,452	37,977
建物	16,111	16,197
土地	15,949	15,868
リース資産	770	572
建設仮勘定	-	2
その他の有形固定資産	4,621	5,337
無形固定資産	5,629	9,592
ソフトウェア	3,026	8,435
リース資産	253	188
その他の無形固定資産	2,350	967
繰延税金資産	36,017	30,653
支払承諾見返	23,487	21,482
貸倒引当金	32,088	37,681
資産の部合計	4,869,023	4,982,234

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
負債の部		
預金	8 4,357,005	8 4,407,710
当座預金	156,600	160,801
普通預金	1,502,317	1,601,756
貯蓄預金	30,311	29,879
通知預金	13,232	13,567
定期預金	2,603,504	2,552,853
定期積金	53	47
その他の預金	50,985	48,805
譲渡性預金	24,300	17,200
債券貸借取引受入担保金	8 172,725	8 237,307
借入金	8 36,352	8 60,130
借入金	12 36,352	12 60,130
外国為替	480	431
売渡外国為替	428	431
未払外国為替	52	0
社債	13 48,000	13 53,000
その他負債	28,948	23,739
未決済為替借	0	-
未払法人税等	278	294
未払費用	11,746	10,026
前受収益	1,812	1,136
従業員預り金	1,284	1,262
給付補てん備金	0	0
金融派生商品	4,071	1,716
リース債務	1,066	812
資産除去債務	192	165
その他の負債	8,496	8,324
賞与引当金	1,593	1,585
退職給付引当金	6,440	4,416
役員退職慰労引当金	372	313
睡眠預金払戻損失引当金	309	258
ポイント引当金	41	53
統合関連損失引当金	717	-
偶発損失引当金	465	473
支払承諾	23,487	21,482
負債の部合計	4,701,241	4,828,103

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
純資産の部		
資本金	50,710	50,710
資本剰余金	104,361	93,932
資本準備金	11,082	13,168
その他資本剰余金	93,278	80,764
利益剰余金	25,625	21,381
利益準備金	1,152	2,411
その他利益剰余金	24,473	18,970
繰越利益剰余金	24,473	18,970
株主資本合計	180,698	166,025
その他有価証券評価差額金	12,895	11,892
繰延ヘッジ損益	19	2
評価・換算差額等合計	12,915	11,894
純資産の部合計	167,782	154,130
負債及び純資産の部合計	4,869,023	4,982,234

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当事業年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
経常収益	100,984	104,074
資金運用収益	73,036	70,817
貸出金利息	56,861	58,391
有価証券利息配当金	16,084	12,280
コールローン利息	29	58
預け金利息	10	22
その他の受入利息	50	64
役務取引等収益	12,866	12,712
受入為替手数料	2,635	2,611
その他の役務収益	10,231	10,101
その他業務収益	12,465	18,132
外国為替売買益	1,062	1,185
商品有価証券売却益	0	2
国債等債券売却益	10,843	16,396
国債等債券償還益	515	-
金融派生商品収益	42	547
その他の業務収益	0	0
その他経常収益	2,616	2,412
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	-	50
償却債権取立益	-	631
株式等売却益	483	298
金銭の信託運用益	220	41
その他の経常収益	1,911	1,390
経常費用	95,197	96,357
資金調達費用	12,264	10,712
預金利息	10,056	7,939
譲渡性預金利息	34	11
コールマネー利息	6	9
債券貸借取引支払利息	792	978
借入金利息	582	732
社債利息	700	887
金利スワップ支払利息	28	97
その他の支払利息	62	56
役務取引等費用	9,351	9,801
支払為替手数料	733	604
その他の役務費用	8,618	9,196
その他業務費用	2,364	7,136
国債等債券売却損	2,011	1,724
国債等債券償還損	-	2,281
国債等債券償却	8	2,967
その他の業務費用	344	163
営業経費	50,536	53,048

	前事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当事業年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
その他経常費用	20,681	15,658
貸倒引当金繰入額	5,823	6,755
貸出金償却	8,174	3,061
株式等売却損	1,150	439
株式等償却	757	318
金銭の信託運用損	246	326
その他の経常費用	4,528	4,755
経常利益	5,786	7,716
特別利益	1,188	62
償却債権取立益	1,169	-
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	12	-
株式報酬受入益	6	62
特別損失	407	343
固定資産処分損	143	176
減損損失	189	166
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	74	-
税引前当期純利益	6,568	7,436
法人税、住民税及び事業税	82	86
法人税等調整額	141	5,299
法人税等合計	224	5,385
当期純利益	6,343	2,050

【株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当事業年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
株主資本		
資本金		
当期首残高	50,710	50,710
当期変動額		
当期変動額合計	-	-
当期末残高	50,710	50,710
資本剰余金		
資本準備金		
当期首残高	11,082	11,082
当期変動額		
剰余金の配当	-	2,085
当期変動額合計	-	2,085
当期末残高	11,082	13,168
その他資本剰余金		
当期首残高	22,568	93,278
当期変動額		
合併による増加	70,709	-
剰余金の配当	-	12,514
当期変動額合計	70,709	12,514
当期末残高	93,278	80,764
資本剰余金合計		
当期首残高	33,651	104,361
当期変動額		
合併による増加	70,709	-
剰余金の配当	-	10,428
当期変動額合計	70,709	10,428
当期末残高	104,361	93,932
利益剰余金		
利益準備金		
当期首残高	-	1,152
当期変動額		
剰余金の配当	1,152	1,258
当期変動額合計	1,152	1,258
当期末残高	1,152	2,411
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金		
当期首残高	7,104	24,473
当期変動額		
合併による増加	17,941	-
剰余金の配当	6,916	7,553
当期純利益	6,343	2,050
当期変動額合計	17,368	5,502
当期末残高	24,473	18,970

	前事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)	当事業年度 (自 平成23年 4月 1日 至 平成24年 3月31日)
利益剰余金合計		
当期首残高	7,104	25,625
当期変動額		
合併による増加	17,941	-
剰余金の配当	5,763	6,294
当期純利益	6,343	2,050
当期変動額合計	18,521	4,244
当期末残高	25,625	21,381
株主資本合計		
当期首残高	91,466	180,698
当期変動額		
合併による増加	88,651	-
剰余金の配当	5,763	16,722
当期純利益	6,343	2,050
当期変動額合計	89,231	14,672
当期末残高	180,698	166,025
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金		
当期首残高	7,420	12,895
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,474	1,002
当期変動額合計	5,474	1,002
当期末残高	12,895	11,892
繰延ヘッジ損益		
当期首残高	0	19
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	19	17
当期変動額合計	19	17
当期末残高	19	2
評価・換算差額等合計		
当期首残高	7,421	12,915
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,494	1,020
当期変動額合計	5,494	1,020
当期末残高	12,915	11,894
純資産合計		
当期首残高	84,045	167,782
当期変動額		
合併による増加	88,651	-
剰余金の配当	5,763	16,722
当期純利益	6,343	2,050
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,494	1,020
当期変動額合計	83,737	13,652
当期末残高	167,782	154,130

【重要な会計方針】

	当事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
1 商品有価証券の評価基準及び評価方法	商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。
2 有価証券の評価基準及び評価方法	(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のある株式及び投資信託については決算日前1カ月の市場価格等の平均に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、それ以外については決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。 なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。 (2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法	デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
4 固定資産の減価償却の方法	(1) 有形固定資産(リース資産を除く) 有形固定資産は、定額法を採用しております。 また、主な耐用年数は次のとおりであります。 建物 3年～50年 その他 2年～20年 (2) 無形固定資産(リース資産を除く) 無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。 (3) リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法によっております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のは零としております。
5 繰延資産の処理方法	社債発行費は、支出時に全額費用として処理しております。
6 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準	外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

	<p style="text-align: center;">当事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)</p>
7 引当金の計上基準	<p>(1) 貸倒引当金 貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。 上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。 すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。 なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は59,173百万円(前事業年度末は57,174百万円)であります。</p> <p>(2) 賞与引当金 賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。</p> <p>(3) 退職給付引当金 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。 過去勤務債務：その発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(11年～12年)による定額法により損益処理 数理計算上の差異：各発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(11年～12年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理 なお、会計基準変更時差異(9,894百万円)については、15年による按分額を費用処理しております。 (追加情報) 当事業年度において、当行の退職給付制度の改定が行われ、平成23年10月1日に制度統合いたしました。このため、前払年金費用と退職給付引当金を相殺して表示しております。なお、相殺する前に比べ、前払年金費用と退職給付引当金は、それぞれ2,220百万円減少しております。</p> <p>(4) 役員退職慰労引当金 役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当事業年度末までに発生していると認められる額を計上しております。</p> <p>(5) 睡眠預金払戻損失引当金 睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。</p> <p>(6) ポイント引当金 ポイント引当金は、ポイントの将来の利用による負担に備えるため、未利用の付与済ポイントを金額に換算した残高のうち、将来利用される見込額を見積り、必要と認められる額を計上しております。</p>

	当事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
	(7) 偶発損失引当金 偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。
8 リース取引の処理方法	所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する事業年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。
9 ヘッジ会計の方法	(イ)金利リスク・ヘッジ 金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号。以下「業種別監査委員会報告第24号」という。)に規定する繰延ヘッジによっております。 (ロ)為替変動リスク・ヘッジ 外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。
10 消費税等の会計処理	消費税及び地方消費税(以下、消費税等という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

【追加情報】

当事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
<p>当事業年度の期首以後に行われる会計上の変更及び過去の誤謬の訂正から、「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準」(企業会計基準第24号平成21年12月4日)及び「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第24号平成21年12月4日)を適用しております。</p> <p>なお、「金融商品会計に関する実務指針」(日本公認会計士協会会計制度委員会報告第14号)に基づき、当事業年度の「睡眠預金払戻損失引当金戻入益」及び「償却債権取立益」は、「その他経常収益」に計上しておりますが、前事業年度については遡及処理を行っておりません。</p>

【注記事項】

(貸借対照表関係)

1 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
株式	3,518百万円	3,597百万円
出資金	1,706百万円	1,515百万円

2 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
破綻先債権額	3,304百万円	5,406百万円
延滞債権額	51,704百万円	51,529百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	百万円	51百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
貸出条件緩和債権額	7,460百万円	7,401百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
合計額	62,469百万円	64,389百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

- 6 手形割引は、日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号に基づき金融取引として処理しておりま
す。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替は、売却又は(再)担保
という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
21,118百万円	21,947百万円

- 7 ローン・パーティシペーションで、平成7年6月1日付日本公認会計士協会会計制度委員会報告第3号
に基づいて、原債務者に対する貸出金として会計処理した参加元本金額のうち、貸借対照表計上額は次の
とおりであります。

前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
21,700百万円	16,500百万円

- 8 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	257,709百万円	363,766百万円
その他資産	76百万円	98百万円
計	257,786百万円	363,864百万円

担保資産に対応する債務

預金	15,586百万円	2,833百万円
債券貸借取引受入担保金	172,725百万円	237,307百万円
借入金	14,650百万円	28,270百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れて
おります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
有価証券	76,639百万円	74,602百万円

また、その他の資産のうち保証金、先物取引負担金及びデリバティブ取引担保金は次のとおりでありま
す。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
保証金	5,433百万円	5,177百万円
先物取引負担金	503百万円	503百万円
デリバティブ取引担保金	500百万円	500百万円

- 9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
融資未実行残高	575,516百万円	629,622百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消 可能なもの)	575,159百万円	622,697百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

- 10 有形固定資産の減価償却累計額

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
減価償却累計額	36,527百万円	37,003百万円

- 11 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
圧縮記帳額	517百万円	517百万円
(当該事業年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(百万円)

- 12 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
劣後特約付借入金	21,500百万円	31,500百万円

- 13 社債は、劣後特約付無担保社債であります。

- 14 有価証券中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
	27,554百万円	19,723百万円

15 銀行法第18条の定めにより剰余金の配当に制限を受けております。

剰余金の配当をする場合には、会社法第445条第4項(資本金の額及び準備金の額)の規定にかかわらず、当該剰余金の配当により減少する剰余金の額に5分の1を乗じて得た額を資本準備金又は利益準備金として計上しております。

当該剰余金の配当に係る資本準備金及び利益準備金の計上額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
資本準備金	百万円	2,085百万円
利益準備金	1,152百万円	1,258百万円

(損益計算書関係)

1 その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前事業年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)	当事業年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)
統合関連費用	3,071百万円	統合関連費用 4,005百万円
統合関連損失引当金繰入額	448百万円	保証協会負担金 310百万円
保証協会負担金	319百万円	社債発行費用 207百万円
偶発損失引当金繰入額	201百万円	

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自平成22年4月1日至平成23年3月31日)

該当ありません。

当事業年度(自平成23年4月1日至平成24年3月31日)

該当ありません。

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(1) 所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

(ア)有形固定資産

主として、事務機器及び車両であります。

(イ)無形固定資産

ソフトウェアであります。

リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「4 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(2) 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、減損損失累計額相当額及び期末残高相当額
前事業年度(平成23年3月31日)

(単位：百万円)

	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	減損損失累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産	3,773	2,606		1,166
無形固定資産	334	253		80
合計	4,108	2,860		1,247

(注) 取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

当事業年度(平成24年3月31日)

(単位：百万円)

	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	減損損失累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産	2,065	1,684		381
無形固定資産	199	183		16
合計	2,265	1,867		398

(注) 取得価額相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低いため、支払利子込み法によっております。

未経過リース料期末残高相当額等

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
1年内	633	250
1年超	613	147
合計	1,247	398
リース資産減損勘定の残高		

(注) 未経過リース料期末残高相当額は、未経過リース料期末残高が有形固定資産の期末残高等に占める割合が低い
ため、支払利子込み法によっております。

支払リース料、リース資産減損勘定の取崩額、減価償却費相当額及び減損損失

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	当事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)
支払リース料	792	605
リース資産減損勘定の取崩額		
減価償却費相当額	792	605
減損損失		

減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
1年内	659	611
1年超	5,250	4,866
合計	5,909	5,478

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式で時価のあるものは該当ありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

(百万円)

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
子会社株式	4,849	4,839
関連会社株式	189	189
合計	5,038	5,028

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

[次へ](#)

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	30,227百万円	28,286百万円
繰越欠損金	25,872百万円	19,120百万円
有価証券評価損	14,120百万円	12,454百万円
退職給付引当金	3,219百万円	3,091百万円
減価償却費	668百万円	514百万円
賞与引当金	647百万円	601百万円
その他有価証券評価差額金	5,428百万円	4,741百万円
その他	4,637百万円	4,051百万円
繰延税金資産小計	84,820百万円	72,861百万円
評価性引当額	48,206百万円	41,259百万円
繰延税金資産合計	36,613百万円	31,601百万円
繰延税金負債		
未収配当金益金不算入	345百万円	394百万円
その他有価証券評価差額金	214百万円	529百万円
その他	35百万円	24百万円
繰延税金負債合計	596百万円	948百万円
繰延税金資産の純額	36,017百万円	30,653百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
法定実効税率	40.6%	40.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.5%	0.8%
住民税均等割等	1.3%	1.2%
繰越欠損金控除期限超過	12.0%	%
評価性引当額の減少	52.9%	43.8%
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	%	43.4%
繰越欠損金控除限度額制限	%	43.4%
連結納税による影響	%	12.8%
その他	0.9%	0.4%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	3.4%	72.4%

3 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「経済社会の構造の変化に対応した税制の構築を図るための所得税法等の一部を改正する法律」(平成23年法律第114号)及び「東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法」(平成23年法律第117号)が平成23年12月2日に公布され、平成24年4月1日以後に開始する事業年度から法人税率の引下げ及び復興特別法人税の課税が行われることとなりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の40.6%から、平成24年4月1日に開始する事業年度から平成26年4月1日に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異等については37.9%に、平成27年4月1日に開始する事業年度以降に解消が見込まれる一時差異等については35.5%となります。この税率変更により、繰延税金資産は3,178百万円減少し、その他有価証券評価差額金は46百万円、繰延ヘッジ損益は0百万円、法人税等調整額は3,225百万円それぞれ増加しております。

また、欠損金の繰越控除制度が平成24年4月1日以後に開始する事業年度から繰越控除前の所得の金額の100分の80相当額が控除限度額とされることに伴い、繰延税金資産は3,227百万円減少し、法人税等調整額は同額増加しております。

4 当行及び親会社並びに一部の連結子会社は、平成24年4月1日開始事業年度より、法人税法(昭和40年法律第34号)に規定される連結納税制度を選択する申請を行い、法人税法の規定により、平成24年4月1日に連結納税のみなし承認を受けております。

これにより、当事業年度から「連結納税制度を適用する場合の税効果会計に関する当面の取扱い(その1)」(企業会計基準委員会実務対応報告第5号平成23年3月18日)及び「連結納税制度を適用する場合の税効果会計に関する当面の取扱い(その2)」(企業会計基準委員会実務対応報告第7号平成22年6月30日)を適用し、繰延税金資産及び法人税等調整額については、連結納税制度の選択を前提として計上することに変更しております。

この変更により、繰延税金資産は954百万円増加し、法人税等調整額は同額減少しております。

(企業結合等関係)

該当ありません。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

当行の一部店舗又は事務所等における事業用定期借地権契約に係る資産除去債務並びに一部店舗におけるアスベスト等の有害物質に係る資産除去債務などであります。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を、取得から主として37年と見積り、割引率は主として2.3%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

八 当該資産除去債務の総額の増減

	前事業年度		当事業年度	
	(自	平成22年4月1日	(自	平成23年4月1日
	至	平成23年3月31日)	至	平成24年3月31日)
期首残高(注)		104百万円		192百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額		96百万円		17百万円
時の経過による調整額		百万円		3百万円
資産除去債務の履行による減少額		百万円		43百万円
その他増減(は減少)		9百万円		3百万円
期末残高		192百万円		165百万円

(注) 前事業年度の「期首残高」は、「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準第18号 平成20年3月31日)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第21号 平成20年3月31日)を適用したことによる残高であります。

(1株当たり情報)

		前事業年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)	当事業年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)
1株当たり純資産額	円	3,100.33	3,221.99
1株当たり当期純利益金額	円	109.38	45.74

(注) 1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年3月31日)	当事業年度 (平成24年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	167,782	154,130
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	57,451	
(うち第一種優先株式払込金額)	30,000	
(うち第一種優先株式配当額)	1,176	
(うち第二種優先株式払込金額)	25,000	
(うち第二種優先株式配当額)	1,275	
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	110,331	154,130
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	35,587	47,837

2 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前事業年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)	当事業年度 (自平成23年4月1日 至平成24年3月31日)
1株当たり当期純利益金額			
当期純利益	百万円	6,343	2,050
普通株主に帰属しない金額	百万円	2,451	
うち定時株主総会決議による第一 種優先株式配当額	百万円	1,176	
うち定時株主総会決議による第二 種優先株式配当額	百万円	1,275	
普通株式に係る当期純利益	百万円	3,892	2,050
普通株式の期中平均株式数	千株	35,587	44,824

なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないので記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当ありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額(百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	41,976	1,117	657 (41)	42,436	26,239	923	16,197
土地	15,949	1	82 (82)	15,868			15,868
リース資産	1,126		10 ()	1,116	544	193	572
建設仮勘定		2		2			2
その他の 有形固定資産	14,928	1,879	1,251 (42)	15,556	10,219	1,024	5,337
有形固定資産計	73,980	3,001	2,002 (166)	74,980	37,003	2,140	37,977
無形固定資産							
ソフトウェア				11,474	3,038	1,727	8,435
リース資産				335	146	59	188
その他の 無形固定資産				967			967
無形固定資産計				12,777	3,184	1,786	9,592

(注) 1 当期減少額欄における()内は、減損損失の計上額(内書き)であります。

2 無形固定資産の金額が、資産の総額の1%以下であるため「当期首残高」「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しております。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	32,088	37,681	1,162	30,925	37,681
一般貸倒引当金	22,197	24,607		22,197	24,607
個別貸倒引当金	9,890	13,073	1,162	8,727	13,073
うち非居住者向け 債権分					
特定海外債権 引当勘定					
賞与引当金	1,593	1,585	1,593		1,585
役員退職慰労引当金	372		54	4	313
睡眠預金払戻損失 引当金	309			50	258
ポイント引当金	41	53		41	53
統合関連損失引当金	717		717		
偶発損失引当金	465	473		465	473
計	35,587	39,793	3,529	31,486	40,365

(注) 当期減少額「その他」欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

- 一般貸倒引当金 洗替による取崩額
- 個別貸倒引当金 洗替による取崩額
- 役員退職慰労引当金 引当金不使用による取崩額
- 睡眠預金払戻損失引当金 引当金減少による取崩額
- ポイント引当金 洗替による取崩額
- 偶発損失引当金 洗替による取崩額

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	278	291	276		294
未払法人税等	82	86	82		86
未払事業税	196	205	193		207

(2) 【主な資産及び負債の内容】

当事業年度末(平成24年3月31日現在)の主な資産及び負債の内容は、次のとおりであります。

資産の部

預け金	日本銀行への預け金73,516百万円、他の銀行への預け金2,034百万円であり ます。
その他の証券	外国証券283,307百万円、投資信託146,241百万円、投資事業組合出資金3,991百 万円であります。
前払費用	土地建物賃借料149百万円、損害保険料17百万円、福利厚生費14百万円、機械賃 借料7百万円その他であります。
未収収益	貸出金利息3,068百万円、有価証券利息2,748百万円その他であります。
その他の資産	前払年金費用5,955百万円、保証金5,177百万円、仮払金2,527百万円(為替関係 未決済資金等)、未収入金1,803百万円、金融安定化のための拠出金1,368百万 円その他であります。

負債の部

その他の預金	別段預金34,529百万円、外貨預金13,145百万円その他であります。
未払費用	預金利息7,085百万円、手当505百万円その他であります。
前受収益	貸出金利息908百万円その他であります。
その他の負債	有価証券購入代金3,603百万円、仮受金(為替関係未決済資金等)2,800百万円、 ファクタリング債務1,073百万円その他であります。

(3) 【その他】

該当ありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
株券の種類	当行は株券を発行していません。
剰余金の配当の基準日	3月31日、9月30日
1単元の株式数	100株
株式の名義書換え 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 名義書換手数料 新券交付手数料	大阪市北区茶屋町18番14号 当行総務部
単元未満株式の買取り・買増し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・買増手数料	大阪市北区茶屋町18番14号 当行総務部
公告掲載方法	電子公告の方法により行います。 但し、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、産業経済新聞に掲載して行います。 公告掲載URL http://www.sihd-bk.jp/
株主に対する特典	該当事項ありません。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当行は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | | | | |
|-----|--|----------------|-----------------------------|--------------------------|
| (1) | 有価証券報告書及び
その添付書類並びに確認書 | 事業年度
(第89期) | 自 平成22年4月1日
至 平成23年3月31日 | 平成23年6月30日
近畿財務局長に提出 |
| (2) | 半期報告書及び確認書 | (第90期中) | 自 平成23年4月1日
至 平成23年9月30日 | 平成23年11月25日
近畿財務局長に提出 |
| (3) | 発行登録書(普通社債)及び
その添付書類 | | | 平成24年2月8日
近畿財務局長に提出 |
| (4) | 訂正発行登録書(普通社債) | | | 平成24年2月24日
近畿財務局長に提出 |
| | 平成24年2月8日提出上記(3)の発行登録書の訂正発行登録書でありま
す。 | | | |
| (5) | 発行登録追補書類(普通社
債)及びその添付書類 | | | 平成24年3月9日
近畿財務局長に提出 |

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし

独立監査人の監査報告書

平成24年6月25日

株式会社 池田泉州銀行
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 津 田 多 聞 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鶴 森 寿 士 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 伊 加 井 真 弓 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社池田泉州銀行の平成23年4月1日から平成24年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社池田泉州銀行及び連結子会社の平成24年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。
以上

- 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
- 2 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成24年6月25日

株式会社 池田泉州銀行
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	津	田	多	間	印	
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	鶴	森	寿	士	印	
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	伊	加	井	真	弓	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社池田泉州銀行の平成23年4月1日から平成24年3月31日までの第90期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社池田泉州銀行の平成24年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
- 2 財務諸表の範囲にはX B R Lデータ自体は含まれていません。